

中国・四川省の元・明代の寺廟建築に関する研究

—三間仏殿と単層裳階付仏殿を中心として—

A STUDY ON THE TEMPLE BUILDINGS IN YUAN AND MING DYNASTIES  
IN SICHUAN PROVINCE, CHINA

— Centered on Three Bay Type and Single-layer with under roof —

2022年3月

曹 毅  
CAO YI



中国・四川省の元・明代の寺廟建築に関する研究

—三間仏殿と単層裳階付仏殿を中心として—

A STUDY ON THE TEMPLE BUILDINGS IN YUAN AND MING DYNASTIES IN  
SICHUAN PROVINCE, CHINA

— Centered on Three Bay Type and Single-layer with under roof —

2022年3月

曹 毅

CAO YI



# —目次—

## 第一章 序論

1-1 研究背景	3
1-1-1 中国建築史学	3
1-1-2 中国の木造建築と营造法式	5
1-1-3 中国寺廟建築の既往研究	10
1-2 研究目的	12
1-3 研究方法	13
1-4 調査概要	14
1-5 論文構成	17

## 第二章 四川省の寺廟建築の歴史的背景

はじめに	27
2-1 四川省の地勢と歴史	28
2-2 四川省の宗教	30
2-3 四川省の寺廟建築	32
2-4 結び	35

## 第三章 四川省の元・明代の三間仏殿

はじめに	41
3-1 三間仏殿の沿革	43
3-2 平面寸法と柱間配置	47
3-3 間架と架構システム	51
3-4 斗拱と中備	57
3-5 登梁と尾垂木尻	61
3-6 結び	65

## 第四章 四川省の明代の一間裳階付仏殿

はじめに	73
4-1 一間裳階付仏殿の沿革	75
4-2 平面寸法と柱間配置	76
4-3 間架と架構システム	82
4-4 斗拱の形態	88

4-5	天井の形態	100
4-6	結び	101

## 第五章 四川省の明代の三間裳階付仏殿

	はじめに	107
5-1	四川省の三間裳階付仏殿	109
5-1-1	温泉寺接引殿と大雄宝殿	109
5-1-2	報恩寺大雄宝殿	113
5-1-3	観音寺羅漢殿と大雄宝殿	116
5-2	平面寸法と柱間配置	121
5-3	間架と架構システム	125
5-4	斗栱の形態	128
5-5	結び	134

## 第六章 結論

6-1	本論文の成果	139
6-2	本論文の意義	144

	参考文献目録	145
	本論文に関係する著者の発表論文	148
	後書	150

# 第一章

## 序 論





## 第一章 序論

### 1-1. 研究背景

#### 1-1-1. 中国建築史学

中国建築史学では、『中国古代建築史』<sup>注1)</sup>によると、紀元前 2070 年以降の夏・殷・周時代より後漢 (25～220) までを「古代」(BC. 21 世紀～AD. 3 世紀)、魏 (三国)・晋・南北朝から隋・唐・五代までを「中世」(3 世紀～10 世紀)、宋代 (遼・金・西夏) から元・明・清時代までを「近世」(10 世紀～20 世紀初) とする時代区分を設け、さらに宮殿建築、陵墓建築、宗教建築、住宅建築、壇廟建築などの建築区分を行い、これらを基に個別の遺構、遺跡について研究が行われてきた。そこで、先ず、建築史学の枠組となる時代区分と建築区分について概観し、次いで、建築史学の進展について眺めてみたい。

古代には、黄河中流域の中原地方において、BC. 11 世紀以降に西周・東周代の都が長安 (陝西省西安)、洛陽 (河南省洛陽) におかれたことで、この地域は政治・経済・文化の中心として繁栄した。この時代の遺跡には、河南省の「偃師二里头夏・殷代遺跡」<sup>注2)</sup>、陝西省の「驪山秦始皇陵」<sup>注3)</sup>、「前漢皇帝十一陵」<sup>注4)</sup>等が残されている。また、中国古代文明の一つとされる古蜀文明の存在が、長江上流の四川省において確認され、BC. 20 世紀以前の「三星堆遺跡 (広漢)」<sup>注5)</sup>、「十二橋遺跡」<sup>注6)</sup>等が発見されたことで明らかになり、四川省の蜀国 (BC. 30 世紀早期～BC. 316)、巴国 (BC. 11 世紀早期～BC. 316) の存在が改めて確認され、現在も古代遺跡の発掘が行われている。これらの古代遺跡の発見と発掘は考古学による研究成果であり、建築史学では、こうした考古学の発掘成果を基に宮殿・陵墓・集落等について、当時の建物を再現する復原的研究が行われている。

中世には、三国時代 (220～280) から南北朝まで約 4 世紀に亘って動乱期が続き、魏・蜀・呉の武将が覇権を争ったが、隋・唐時代には中国が再び統一され、北周の楊堅 (541～604) は隋を起して長安に都をおき、唐の李淵 (566～635) も長安に都をおいたため、中原地方は繁栄を取り戻した。また、西南地方では蜀国 (四川省) の後、BC. 206 年に秦が滅亡して漢朝の支配に入ると、四川地域の社会、経済、文化は発展した。しかし、9 世紀後半に唐朝の支配が崩壊すると、中原地方は五代十国に再び分裂し、十国時代には四川も前蜀 (907～925) と後蜀 (934～966) に分裂した。その結果、この時代までの中国の木造建築の大半は消滅し、僅かに唐代 (618～907) の木造遺構が数ヶ所残されるのみである。それらの遺構は山西省の「南禅寺大殿」<sup>注7)</sup>、「仏光寺大殿」<sup>注8)</sup>、「鎮国寺万仏殿」<sup>注9)</sup>、河北省の「正定文廟大成殿」<sup>注10)</sup>等であり、唐代末期から五代 (907～960) に建てられた寺院や壇廟建築に限られている。また、この時代には仏教の隆盛により、仏教遺跡が数多く築造

された。その内、甘肅省の「敦煌莫高窟」<sup>注11)</sup>、「麦積山石窟」<sup>注12)</sup>、山西省の「雲岡石窟」<sup>注13)</sup>、河南省の「龍門石窟」<sup>注14)</sup>、四川省の「巴中石窟」<sup>注15)</sup>、重慶市の「大足石刻」<sup>注16)</sup>などの石窟群は広く知られ、現存する仏像、壁画、遺構の総数は数十万点と云はれ、これらは歴史学、宗教学、芸術分野から学術的な関心が寄せられ、多方面から研究が行われている。また、敦煌莫高窟の仏教遺物は、20世紀初頭の英・仏・米などの探検隊により国外に流出したが、その多くがヨーロッパの美術館、博物館に収蔵され、それらの遺物・美術品等も仏教史、美術史、建築史学における重要な研究対象となっている。

近世には、宋代（960～1279）に入ると北方民族の台頭、漢民族の衣冠南渡等により、中原地方は次第に荒廃した。また、長江上流域の四川省では、北宋咸平四年（1001）に益州路（現成都）・梓州路（現三台）・夔州路（現奉節）と利州路（現広元）に統合され、周囲を山岳地で囲まれた地理的な環境ながら、華北、華中、華南地方との交流を発展させ、周辺地域の文化を受容した。しかし、四川省の宋代までの木造建築の遺構は油江寶圖山の「雲岩寺輪藏」を残すのみである。それに対し、南宋（1127～1279）では都が臨安（浙江杭州）におかれたことで、長江下流域では河川交通によって商業化と都市化が進んだことにより、江南地方とその周辺には、南宋以降の歴史的建造物が数多く残されている。中でも江蘇省蘇州の「玄妙觀三清殿」<sup>注17)</sup>、「寒山寺」<sup>注18)</sup>、南京の「明孝陵」<sup>注19)</sup>、浙江省寧波の「天童禪寺」<sup>注20)</sup>、「阿育王寺」<sup>注21)</sup>などは早くから知られ、また、安徽、江蘇、浙江、福建省では、近年明・清時代の伝統的な村落、街並の調査が進み、修復保存も行われ、歴史的な景観が保たれるようになった。その他、西北、西南地方の新疆、西藏、四川、雲南、貴州、湖南省などの地域においても、少数民族の伝統的な集落や民居等が保存されるようになった。

次に、中国建築史学の進展について眺めてみよう。中国建築史学に関する学術的な研究は、19世紀に西欧の科学的な研究手法が中国に伝えられてから始められることになる。1929年に朱啓鈴（1872～1964）によって「中国營造学社」<sup>注22)</sup>が設立されると、中国建築史の研究が本格化することになった。營造学社では梁思成（1901～72）を始めとして、劉敦楨（1897～1968）、楊廷宝（1901～82）、童寯（1900～83）などの研究者が加わったことで、基礎的な研究が進んだ。中国各地の現地調査から始まり、文献調査を含め、多くの調査資料を収集し、建築遺構、建築文献、建築技法などの系統的な研究が始められた。しかし、日中戦争、第二次世界大戦が勃発すると中国建築史学は一時中断したが、1949年に中華人民共和国が成立すると、学術・研究の進展が期待されたが、その後の1960年代の「文化大革命」により、中国各地の宗教施設が破壊され、研究活動は再び中断されることになった。1970年代後半に入ると改革開放政策により、羅哲文（1924～2012）、潘谷西（1928～）、傅熹年（1933～）、郭黛姮（1936～）等の学者が研究活動を再開した。1980年代には、中国経済の成

長により、地方都市の開発が進み、再び数多くの歴史的建造物が取り壊されることになった。しかし、2000年代に入ると歴史的遺産の消失の危機感が叫ばれ、1982年に実施した『中華人民共和国文物保護法』の改訂や、各地の文物の管理や保護に関する条例の実施により、歴史的建造物の調査・研究が進展することになった。近年の主な研究成果は、中国各地の研究機関の活動が活発になり、山西省古建築保護研究所、河南省文物建築保護研究院、陝西省文物保護研究院、清華大学建築学院、北京大学考古文博院、天津大学建築歴史与理論研究所、東南大学建築歴史与理論研究所、華南理工大学建築歴史文化研究中心等により研究論文、報告書等が出されている。

一方、日本側では、明治時代（1868～1912）に伊東忠太（1867～1954）が仏教建築の源流を求めて清国建築探訪の視察に向い、様々な仏教遺跡や建築遺構を踏査し、多くの学術的な成果をもたらした。その後、関野貞（1868～1936）、村田治郎（1895～1985）、竹島卓一（1901～92）などに引き継がれた。中でも、竹島の『营造法式の研究』<sup>注23</sup>は北宋時代（960～1127）の建築技術書に対する解釈・研究であり、日中両国において高く評価されている。しかし、第二次世界大戦と東西冷戦を機に、1930～60年代にかけて日本側の中国建築史の研究は絶学状態となった。1970年代に入って日中国交が回復されると、寺廟建築の分野では京都大学人文科学研究所の田中淡（1946～2012）を始めとする建築史学の研究者が留学し、日本側の中国建築史研究は再開されることになる。特に1980年代以降、日中民間交流が進んだことにより、中国建築史学の研究は日本人研究者が積極的に取り組むようになり、中でも田中の訳本『中国建築史の研究』<sup>注24</sup>などは、日本における中国建築史学の全体像を理解するのに大きな役割を果たした。さらに、宗教建築については関口欣也（1932～2020）が浙江省、江蘇省の仏教寺院<sup>注25</sup>、杉野丞（1952～）が福建省、廣東省、四川省の仏教と道教の寺院と廟<sup>注26</sup>、住宅建築については土田充義他が湖南省の漢民族、少数民族民居<sup>注27</sup>などの調査を行い、西南、華中、華南地方の建築に関する論文、報告書が発表・刊行されるようになった。

### 1-1-2. 中国の木造建築と营造法式

中国建築の起源については、古くは穴居に始まったとされる。『易経』<sup>注28</sup>によると「上古は穴居し、野処していた。後に聖人がこれを宮室に代え、風雨を凌ぎやすくした。」とあり、『墨子』<sup>注29</sup>にも同様の記載があり、人類は建築技術の未発達時代には、自然の洞窟を利用して生活していたことが分かる。そこで、中国の建築技術により造り出された遺跡について眺めてみよう。殷時代（BC. 17世紀～BC. 1046）の前、すなわち新石器時代の晩期の仰韶期と竜山期の遺跡が発見されたが、これらの建築遺跡には住居址が多く、平面には円形・四角形があり、いずれも地面を掘り下げた堅穴住居であり（写真1-1）、日本の縄文・弥生時代の遺跡に見られる堅穴住居と大差ない形式であった。その後、甲骨文字の発見と解読が行われ、殷王朝の時代から遺跡の内容が次第に明らかにされ

るようになった。殷代（BC. 17世紀～BC. 1046）の遺跡からは、城壁が出現し、基壇を築いて礎石を据え、建築を建てる技術が明らかにされた。河南省北部の殷時代の遺跡地殷墟では、版築で高く基壇を築き上げ、その上に礎石を据えて柱を立てたとみられ、大小数十基の建築遺跡が発見され、当初は宗廟か王宮であったと考えられている。また、陝西省西部の岐山県で西周時代（BC. 1046～BC. 771）の瓦が発見され、この時代には瓦屋根と木造軸組の構造が成立していたと考えられている。春秋戦国時代（BC. 770～BC. 221）の遺跡からは丸瓦、簷平瓦等が発見され、さらに、河北省南部邯鄲市の趙王城址からも大型の礎石が発見され、この時代には大型の木造建築が存在したと考えられている<sup>1-1)</sup>。秦（BC. 221～BC. 206）時代には始皇帝が中国を統一したため、各地の建築技術が融合され、宮殿や離宮等の建設の最盛期を迎えた。漢代（BC. 206～AD. 23）に入ると、長楽宮や未央宮等の宮闕の建設により、建築技術が一層発展した。後漢（25～220）の滅亡以後には戦乱期を迎えたため、建築的遺跡にとって長い空白期に入る。南北朝（420～589）から隋・唐時代（581～907）は石窟の全盛期であり、雲岡・龍門をはじめとする石窟が建設され、多くの優れた遺跡を残している（写真 1-2、写真 1-3）。また、磚造や石造の独立した塔婆建築の遺構も数を増している<sup>1-1)</sup>。

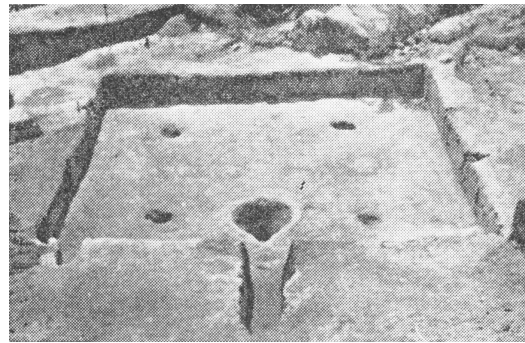
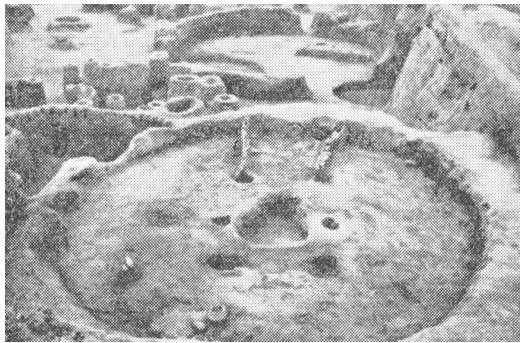


写真 1-1 仰韶期の竖穴住居址

（出典：『中国の建築』中央公論美術出版 1970 年刊）

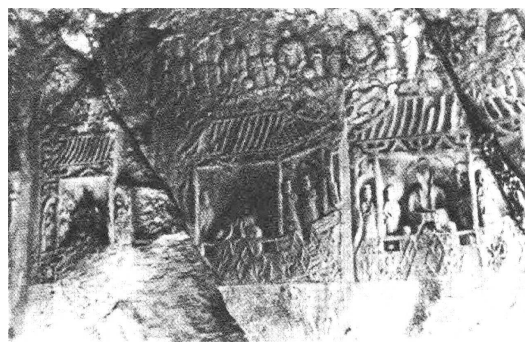


写真 1-2 山西大同北魏雲岡石窟第 12 窟前廊東壁彫刻

写真 1-3 河南洛陽龍門石窟北魏路洞彫刻

（出典：『中国古代建築史・第二卷(第二版)』中国建筑工業出版社 2009 年刊）

しかし、中国建築の基本は木造建築であり、現在確認されている現存最古の木造建築は唐建中三年（782）に建立された前述の南禅寺大殿であり、これに続く遺構が唐大中十一年（857）の仏光寺大殿である。また、唐代の都長安の慈恩寺大雁塔に彫られた仏殿の線刻図を見ると（図 1-1）、日本の奈良唐招提寺金堂<sup>注30</sup>に類似する高度に発展した木造建築が存在したことが知られる。

次に、中国古建築を論ずる際、常に引き合いに出されるのが建築技術書の『营造法式』である。この書は、巻 1～巻 2 が建築名称と術語の考証、総労日数の算出法、巻 3～巻 15 が建築の施工技術、巻 16～巻 28 が各工事の積算規定を記し、巻 29～巻 34 には付図を掲載し、別に看詳 1 巻と総目 1 巻を加え、合計 36 巻となっている。中でも、木工事については「殿堂」と「厅堂」に分け、栱（肘木）の断面を基準とした 8 等級の「材」を基準単位として定め、この材により建築の間口幅、奥行、柱高、梁成等の部材寸法を決め、設計・積算の基準とされている。この書は、北宋の 1103 年に国家の营造を司る将作監の職にあった李誠が、6 年間をかけて編纂したものであり、宋代までの中国の建築技術を集大成したものである。

一方、『营造法式』に先行する北宋の喻皓（出生不祥）の『木經』<sup>注31</sup>、並びに沈括（1031～1095）の『夢溪筆談』<sup>注32</sup>によると、「一般に、建物は 3 つの分（部分）からなる。梁から上を上分、基壇から上を中分、基壇・階段部分を下分という。梁の長さがどれだけなら棟木の高さをいくらにする、というようにして比例を定める。たとえば、梁の長さが 8 尺ならば、棟木の高さを 3 尺 5 寸に置くのが、厅堂の場合の方式である。また、柱の高さがどのくらいなら基壇は何尺にするというように

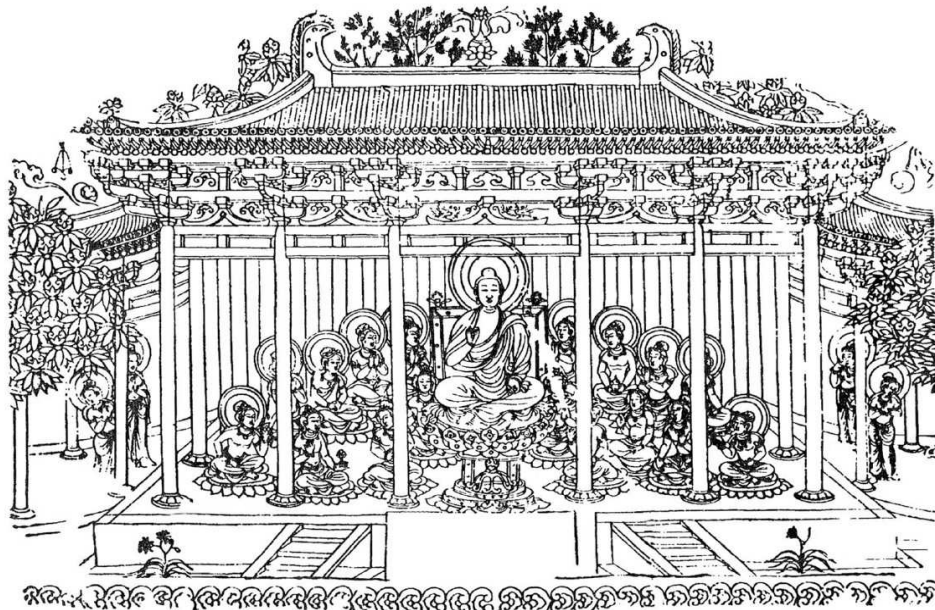


図 1-1 慈恩寺大雁塔楣石に彫られた仏殿の図

（出典：『中国古代建築史（第二版）』中国建築工業出版社 1984 年刊）

して比例を定める。斗栱や垂木にいたるまで、すべて一定の方式がある。これを中分という。基壇の階段の勾配には峻・平・慢の三段階があり、宮中の場合、御輦（れん）にもとづいた方式を定めている。・・・これを下分という。云々」とあり、この屋根・屋身・基壇という3つの構成要素は、後に建てられた実在の建物を見ると、中国木造建築の基本的な構成要素であり、この方式が『营造法式』に継承されていることが分る<sup>1-2)</sup>。

日本では、平安時代の「間面記法」において建築の規模形式が示されるが、中国においても建築の規模を示す「間架」とする表記法があった。建物の規模を示すのに、間口の柱間数「間」と、奥行の梁組を重ねる柱や束の総数「架」によって、「三間五架」、「五間九架」などのように記した。この「間架」表記法の起源は、儒教の経典「儀礼」郷射礼で、弓を射る立ち位置を母屋桁の位置によって説明した記述があり、後漢の著名な学者の注釈に、「これは五架屋である。真中を棟（棟木）、次を楣（母屋桁）前を戾（丸桁）という」と見える。また、中国最古の辞書『爾雅』<sup>注33)</sup>の垂木の名称の注釈のなかで、西晋の郭璞（276～324）によると、「闕」は「五架屋の軒先側の垂木」に相当し、「交」は「五架屋の垂木のうちで直接、軒を支えず、棟木の上で交わるものとする」とした<sup>1-2)</sup>。このように、「間」と「架」は、桁行の柱間と梁間の架構という2方向の基本単位による木造建築の構造を示す基本となるものである。

次に、指摘しておくべきことは、その実際の施工における手順である。『营造法式』の看詳（総論）によれば、「挙折」と称する、母屋桁ごとに垂木を折り繋いで架け渡す屋垂みを形成する手法について、次のように述べている。「挙折の方式は、先ず尺を丈、寸を尺、分を寸、厘を分、毫を厘とする縮尺（10分の1）よって、建物の図を妻壁の表面に描き、その屋垂勾配の緩急を定めておく。それにより、建物内部の柱や梁の高さ、柄穴の大きさや長さを正しく知ることができる」とし、注記には「今日、このことを“側様（断面図）を定める”とか“草架（小屋組）を点く”といっている」とある。木造の建物を施工する場合、妻壁に断面図を描いてから組み立てるという手順は、中国の木造建築の架構の基本原理を反映した手法であるといつてよい（図 1-2）。すでに説明したように、梁間方向の「架」が定めれば、桁行方向の「間」はそれを繰り返すことによって形成されるという考え方に基づいており、中国建築においてかなり普遍的な手法であったと考えられる<sup>1-2)</sup>。

一方、中国大陸における近世の木造建築の構造形式を見渡すと、華南地方（福建、広東、広西省他）では、民間建築に用いられた建築技術が形成されており、その内容は明代に編集された『魯班経』<sup>注34)</sup>に記され、風水、吉凶等を勘案した尺度である「魯班尺」<sup>注35)</sup>が知られている。中国の木造建築における架構形式の類型は、この2つの技術書に記された方式に代表され、一般に『营造法式』が官式、『魯班経』が民間式と称され、両者の使い分けが行われていた。前者は、華北・華中地方に

において、柱と柱を梁で繋ぎ、柱上に梁・束を組み重ねることにより、小屋組架構を形成するもので、中国ではこの種の架構法を「抬梁式」(疊梁式)と称し、宮殿・寺廟建築等のように、比較的大きな部材を組み合わせて、大空間を構成する建築に用いられた(図1-3)。その萌芽は、先秦時代には木材が豊富にあった中原地方の黄河中・下流域および以南の地域に見られる。それに対して、後者は、華南地方において、「穿闘式」(立貼式)と呼ばれる架構法が用いられた(図1-4)。これは、柱と柱を繋ぐのに、梁ではなく、「穿」すなわち貫を多用し、柱を母屋桁まで立ち上げる架構である。清代後期のものまで含めていえば、この架構法は福建・広東省およびそれ以南の地方に渡ってきわめて広範囲に見られ、中小規模の寺廟建築・住宅等のように、個々の用材が小さく、柱間も比較的に狭く、中小規模の建築空間を構成する建物に用いられた。華南および西南地方の少数民族の「高床式」や「懸造」の多くの建物はこの類型に属する。

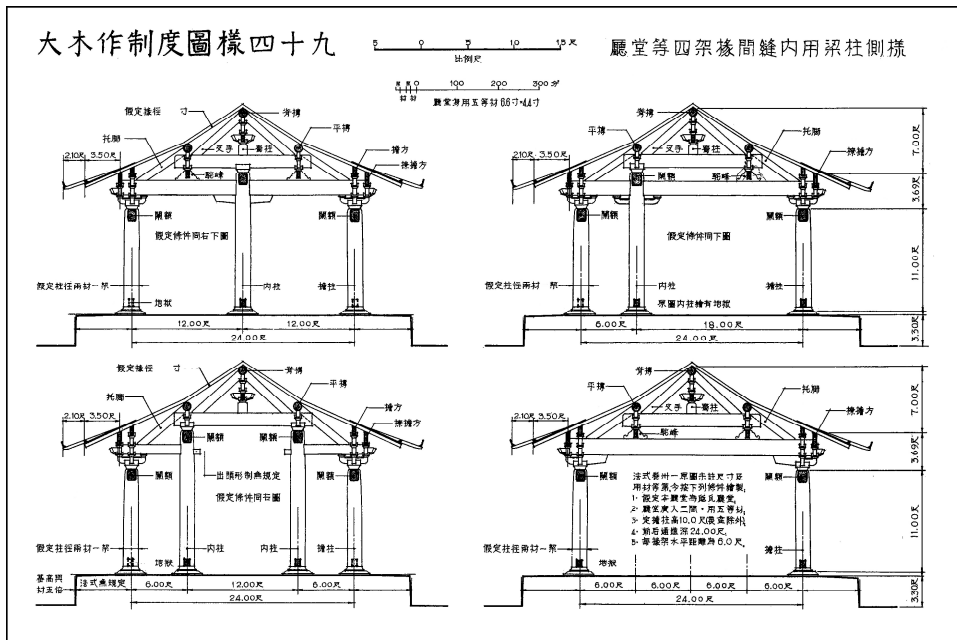


図1-2 大木作・四架の椽屋式側様図

(出典：『营造法式注釈(卷上)』明文書局1984年刊)

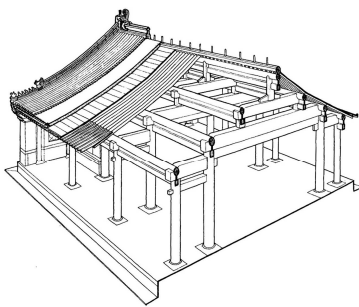


図1-3 抬梁式の架構形式

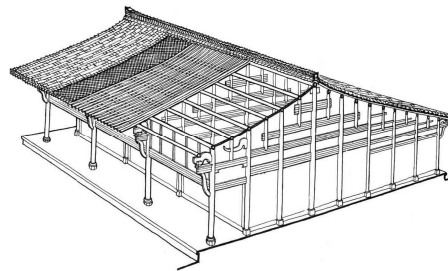


図1-4 穿闘式の架構形式

(出典：『中国古代建築史(第二版)』中国建築工業出版社1984年刊)

### 1-1-3. 中国寺廟建築の既往研究

中国寺廟建築に関する既往研究は、前述の1-1-1 中国建築史学に示したように、1930年に中国最初の建築研究機構として創設された「中国营造学社」において、『中国营造学社彙刊』の中で発表された「薊縣独楽寺観音閣山門考」<sup>注36)</sup>、「華嚴寺」<sup>注37)</sup>、「善化寺」<sup>注38)</sup>他、寺廟建築に関する研究が初期の論考となる。その後、中国の宋・元代(1271~1368)以前の代表的な遺構に関する論文としては、1950年代から1980年代にかけて、次の世代の研究者により「義県奉国寺大雄殿調査報告」<sup>注39)</sup>(遼寧省)、「山東広饒関帝廟正殿」<sup>注40)</sup>(山東省)、「隆興寺」<sup>注41)</sup>(河北省)、「記五台山仏光寺の建築」<sup>注42)</sup>(山西省)、「洛陽白馬寺」<sup>注43)</sup>(河南省)、「武当山金殿」<sup>注44)</sup>(湖北省)、「真如寺正殿」<sup>注45)</sup>(上海)、「揚州大明寺」<sup>注46)</sup>(江蘇省)、「金華天寧寺元代正殿」<sup>注47)</sup>(浙江省)、「福州華林寺大雄宝殿調査簡報」<sup>注48)</sup>(福建省)、「光孝寺大殿」<sup>注49)</sup>(広東省)、「雲南建水指林寺正殿」<sup>注50)</sup>(雲南省)等の論文が発表された。また、これらの研究成果を基に『薊縣独楽寺』<sup>注51)</sup>、『朔州崇福寺』<sup>注52)</sup>、『正定隆興寺』<sup>注53)</sup>、『洪洞廣勝寺』<sup>注54)</sup>、『解州關帝廟』<sup>注55)</sup>、『梁平双桂堂』<sup>注56)</sup>、『寧波保国寺大殿勘測分析與基礎研究』<sup>注57)</sup>等の図書が出版された。このように、中国各地では前述のような研究機関により、華北、華中、華南地方の寺廟建築の個別の研究が行われた(図1-5)。

一方、西南地方(四川省)についてみると、四川省の寺廟建築に関する研究は、前述のように、1930年代に「中国营造学社」から発表された一連の論文がある。その内容は、1939年9月から翌年2月までの梁思成、劉敦楨等による中国营造学社の調査結果をまとめたものであり、四川省の成都、宜賓、樂山、雅安、広漢、綿陽等地区の寺廟建築を対象とし、四川省各地の厩、崖墓、石窟、木造建築等の調査が行われ、1942年に劉敦楨により、「西南古建築調査概況」<sup>注58)</sup>として報告され、1945年までに、「宜賓舊州壩白塔宋墓」<sup>注59)</sup>、「旋螺殿」<sup>注60)</sup>、「四川南溪李莊宋墓」<sup>注61)</sup>等が発表された。その後、中国建築史学を代表する劉致平(1909~95)による「成都清真寺」<sup>注62)</sup>等の論文が発表された。しかし、1940年代以降は国内の政治状況の混乱により研究活動は停滞することになった。1980年代に入り、四川省の古建築に関する調査研究が再開され、「富順文廟」<sup>注63)</sup>、「記平武報恩寺」<sup>注64)</sup>、「清代渠県文廟」<sup>注65)</sup>、「劍閣覺苑寺大殿建築及大木結構初探」<sup>注66)</sup>、「遂寧広徳寺」<sup>注67)</sup>、「什邡龍居寺」<sup>注68)</sup>、「綿陽碧水寺」<sup>注69)</sup>等の論文が発表された。これにより、四川省の厩、石窟、寺廟建築等について、さらに、渠県趙家坪馮煥闕、大足石窟、成都文殊院、新都宝光寺、閬中観音寺、蓬溪宝梵寺等の建物遺構や遺跡の調査が進み、省内の主要な歴史的遺産の歴史、写真、図面等の基礎資料が整うこととなった。

2000年代に入ると、「徳陽文廟的建築特色」<sup>注70)</sup>、「七曲山大廟建造史初考」<sup>注71)</sup>、「四川蓬溪県新發現元代建築金仙寺」<sup>注72)</sup>、「四川元代漢地寺廟仏殿建築的間架特色分析」<sup>注73)</sup>、「閬中永安寺建築技



芸」<sup>注74)</sup>、「四川塩亭新発現的元代建築花林寺大殿」<sup>注75)</sup>、「四川眉山報恩寺元代大殿」<sup>注76)</sup>、「四川蓬溪県金仙寺蔵殿建築尺度探討論」<sup>注77)</sup>、「峨眉山万年寺磚殿復原研究」<sup>注78)</sup>、「四川広漢龍居寺中殿建築熱湿環境特征研究」<sup>注79)</sup>等の論文が発表された。また、『四川古建築』<sup>注80)</sup>、『四川重慶古建築地図』<sup>注81)</sup>、『四川古建築調査報告集(第一巻)』<sup>注82)</sup>等の四川古建築に関する図書が出版され、四川省の文物指定の古建築に関する資料等が報告されるようになった。しかし、これまでの研究成果は、単独の寺廟建築の調査報告や、個別の建物の研究論文であった。そのため、四川省の寺廟建築の全域を俯瞰し、時代区分、建築区分<sup>注83)</sup>に加え、地域区分を視野に入れた遺構群の分析・検討を行った研究論文は無く、それらの平面、構造、意匠等について、地域性を解明するための研究は未だ行われていない。



図 1-5 四川省位置図

## 1-2. 研究目的

四川省は、中国大陸の西南部に位置し、長江の上流域にあり、北に青海省、甘肅省及び陝西省、東に重慶、南に貴州省及び雲南省、西にチベット自治区を擁し、海拔 700m程の平原にあって周囲を 3000m級の山岳地が取り囲む盆地である。盆地内には、楊子江・嘉陵江・岷江などの大河が流れ、豊かな水と肥沃な土地に恵まれ、古来「沃野千里、天府之国」と呼ばれた地である。後漢(25～220)が滅亡すると、三国時代(220～280)を迎え、四川地方を治めた劉備・諸葛孔明は成都(四川省)を都として蜀(蜀漢)を建国した。これにより、三国は鼎立し、戦国武将が群雄割拠することとなり、この時代は官史陳寿(233～297)による『三国志』にまとめられている。蜀漢は623年に滅亡し、晋の武帝により統一され、五代十国時代には中原支配を脱して前蜀・後蜀を成立させ、北宋時代に入ると四川路が設置されたことにより、この地方一帯は四川と称されるようになった。この間、四川省では仏教が後漢以後に華北の洛陽(河南省)、長安(陝西省)より伝えられ、唐代(618～907)に入ると仏教文化の隆盛により、峨眉山等各地に寺院が建てられ、北宋代(960～1127)には峨眉山が中国の四大仏教聖地となり、四川省は南宋代(1127～1279)に最盛期を迎えることになる。その後、四川省の仏教は元・明代に盛衰を繰り返しながら、西南地方の中核地として仏教文化を定着させ、多くの寺院建築を建てた。

このように、四川省は、峨眉山や樂山等の仏教聖地、さらに青城山等の道教聖地など、歴史的な聖地を擁しており、中国仏教・道教における重要な聖域となっている。しかし、寺廟建築について着目してみると、宋代までの遺構は前述のように、綿陽の雲岩寺輪藏を除いて殆ど残されていない。そこで、元・明代(1271～1644)の木造建築を眺めると、幸に保存状態のよい仏殿の遺構がよく残されている。それらの遺構の多くは、国家・省の文物に指定されており、個別の調査・研究が行われているものの、四川省の元・明代の遺構を俯瞰した研究は無く、寺廟建築の全体像とそれらの地域的な特性については未だ明らかにされていない。

そこで、本研究は、四川省の元・明代の寺廟建築の遺構について、国家・省の重点文物と同時代の未指定の遺構を加え、これらの時代区分と建築区分に基づいて、「元・明代の三間仏殿」、「明代の一間裳階付仏殿」、「明代の三間裳階付仏殿」に分けて取り上げ、建築形態ごとの建築的な特徴と元・明代の変容を検討することで、四川省の元・明代の寺廟建築の平面、構造、意匠等についての特質を明らかにすることを目的とする。

### 1-3. 研究方法

中国建築史学では、遺構・遺跡等の資料を対象とする「遺構研究」、古記録・古文書・歴史書等の史料を対象とする「文献研究」の2つの研究手法がある。

本研究では、四川省の元・明代の寺廟建築について、2つの方法を採用した。まず、「遺構研究」としては、同省に残される遺構の現地調査を実施し、省内の全体像を把握した上で、保存状態の良い遺構について実測資料を基に建築的な特徴を検討した。また、「文献研究」としては、現地の石磚、建物の墨書、地方誌等の史料に基づき、遺構の建立年代を検討し、同省の元・明代の寺廟建築の特質を解明することとした。そこで、寺廟建築の調査、分析、検討は、次の手順により行った。

- 1) 四川省の仏教寺院、道教寺院、靈廟について、所在地と歴史を地方史、史跡、宗教名簿等により、第1次調査表を作成した。
- 2) 第1次調査表の寺廟建築の中から、国家、省等の文物に指定されている木造建築を取り上げ、さらに、長い歴史を有する古刹について、未指定の建築の残存状況を把握し、第2次調査表を作成し、それらを地図上に書き込んだ。
- 3) 第2次調査表により、現地調査の日数と調査の行程を計画し、移動経路、調査時間等を決め、全行程の日程を作成した。また、各調査物件の文献資料、写真等の資料を事前に整理し、現地において、調査に対する案内を受けた。
- 4) 現地調査では、敷地周辺の境内状況を含め、建物の外観、内観全体の写真撮影を行い、外部の軒、垂木、斗栱等、内部の架構、軸部等の詳細部分を写真撮影した。次に、巻尺、レーザー距離計を使い、柱径、柱間距離、軒高等を測量し、野帳を作成した。
- 5) 現地調査で得た資料を研究室において分類、整理し、野帳と写真を基づき、各建築の測量図を制作し、次に各建物の平面、断面、架構、斗栱等をCADソフトで図面化した。
- 6) 現地調査で収集した資料について、時代区分と建築区分に基づいて、元・明代の三間仏殿（20棟）、明代の一間裳階付仏殿（12棟）、さらに三間裳階仏殿（5棟）に分けた上で、各建物の平面寸法、意匠等をまとめ、それらの外観様式、平面規模、構造形式、斗栱、天井等に関する比較表を作成し、それらの特徴と元・明代の建築的な変容について分析・検討し、結論を導き出した。

#### 1-4. 調査概要

本研究は、愛知工業大学建築学科歴史意匠研究室が1999年8月、2009年9月、2018年8月、2019年8月の4回に亘り、四川省及び重慶市の仏教、道教、イスラム教の宗教建築及び廟について、後掲の一覧表（表 1-1）のように、四川省南北部及び東部と重慶地域を対象として現地調査を実施したものであり、筆者は2009年、2018年、2019年の調査に参加した。

まず、4回の調査に先立ち、四川省の元・明代寺廟建築について、前述のように国家文物局から公表された国家重点文物、四川省文物局から公表された省重点文物のリストより、元・明代の寺廟建築を取り上げ、さらに、これらの寺廟建築に関する史料、文献等を収集・整理し、省内の各市に保存状況がよいものを選定し、代表的な遺構について現地調査を実施した。

第①回調査（1999年8月）では、成都市、雅安市、綿陽市、内江市、重慶市を中心とし、仏教寺院12件（建物32棟）、道教寺院1件（建物4棟）、廟4件（建物6棟）、祠堂2件（建物2棟）、楼1棟の実測調査、写真撮影などを行った。

第②回調査（2009年9月～10月）では、宜賓市、樂山市、遂寧市、閬中市を中心とし、仏教寺院13件（建物24棟）、道教寺院7件（建物14棟）、イスラム教寺院2件（建物2棟）、廟1件（建物1棟）、祠堂1件（建物1棟）、楼2棟、住宅1棟の実測調査、写真撮影などを行った。

第③回調査（2018年8月）では、前二回の調査を踏まえ、未調査の三間仏殿を中心とし、仏教寺院14件（建物14棟）、道教寺院1件（建物1棟）、廟2件（建物2棟）、牌坊1棟の実測調査、写真撮影などを行った。

第④回調査（2019年8月）では、前三回の調査を踏まえ、裳階付仏殿を中心とし、仏教寺院8件（建物10棟）の実測調査、写真撮影などを行った。

表 1-1 四川省寺廟建築に関する調査概要（1999～2019年）

調査回数	調査期間	調査対象		対象所在地	宗教
第①回調査※	1999年 8月	華岩寺	大雄宝殿、天王殿	重慶市九龍坡区華岩鎮華岩村	仏
		北温泉寺	大雄宝殿、接引殿	重慶市北碚区滄南路北温泉公園	仏
		観音寺	毘廬殿、観音殿	四川省成都市新津区永商鎮宝橋村	仏
		武侯祠	劉備殿、前殿	四川省成都市武侯祠大街	祠
		文殊院	大雄殿、説法堂	四川省成都市青羊区文殊院街	仏
		開善寺	大雄殿	四川省雅安市榮經縣人民東路	仏
		太湖寺	大雄殿、観音殿	四川省雅安市榮經縣雲峰山	仏
		宝光寺	大雄殿、藏経楼、天王殿、塔	四川省成都市新都区宝光街	仏
		龍居寺	中殿	四川省広漢市新豊鎮龍居村	仏
		昭覚寺	大雄宝殿、圓覚殿、天王殿、金剛殿、説法堂	四川省成都市成華区昭青路	仏
		徳陽文廟	大成殿、戟門	四川省徳陽市旌陽区文廟街	廟
		報恩寺	大雄宝殿、華嚴殿、天王殿、万佛閣、鐘楼、碑亭、山門	四川省綿陽市平武縣龍安鎮東風路	仏
		雲岩寺	大雄殿、飛天藏殿、天王殿	四川省江油市武都鎮寶团山風景区	仏
		七曲山大廟	正殿、瘟祖殿、桂香殿、関帝廟	四川省綿陽市梓潼縣文昌鎮七曲村	道
		青羊宮	三清殿	四川省成都市青羊区一環路西二段	廟
		杜甫草堂	/	四川省成都市青羊区青華路	祠
		望江楼	/	四川省成都市武侯区望江路	/
		甘露寺	正殿	四川省内江市資中縣甘露古鎮	仏
		資中文廟	大成殿	四川省内江市資中縣重龍鎮文廟街	廟
		資中武廟	大殿、前殿		廟
第②回調査	2009年 9月～10月	万寿寺	大雄宝殿、観音殿	宜賓市屏山縣屏山鎮東新街	仏
		万寿觀	玄祖殿	宜賓市屏山縣屏山鎮東新街	仏
		斗姥宮	慈航殿	宜賓市翠屏区真武山	道
		元極宮	玄祖殿、無量殿		道
		三府宮	三清殿		道
		文昌宮	財神殿、中殿、葉王殿		道
		祖師殿	/		道
		望江楼	/		道
		鷲峰寺	天王殿、白塔	四川省遂寧市蓬溪縣赤城鎮	仏
		宝梵寺	大雄殿、観音殿、天王殿	四川省遂寧市蓬溪縣宝梵鎮宝梵村	仏
		永安寺	大殿	四川省閬中市水觀鎮永安寺村	仏
		五龍廟	文昌閣	四川省閬中市思依鎮河楼郷白虎村	廟
		華光楼	/	四川省閬中市上華街	/
		観音寺	天王殿、羅漢殿、大雄殿	四川省閬中市公園路	仏
		巴巴寺	大殿	四川省閬中市蟠龍路	イ

		清真寺	大殿	四川省閬中市礼拜寺街	イ
		大佛寺	大殿	四川省閬中市七里鎮状元村	仏
		天中楼	/	四川省閬中市武廟街	/
		漢桓侯祠	敵万楼	四川省閬中市西街	祠
		田家大院	/	四川省閬中市米粮市街	/
		華岩寺	大雄宝殿、天王殿	重慶市九龍坡区華岩鎮華岩村	仏
		上清宫	三清殿、老君殿、文武殿、玉皇殿、道德經堂	四川省都江堰市青城山	道
		報国寺	大雄宝殿、七佛宝殿	四川省峨眉山市峨眉山	仏
		万年寺	無梁殿		仏
		烏尤寺	大雄殿	四川省樂山市市中区凌雲路	仏
		凌雲寺	大雄宝殿	四川省樂山市市中区凌雲山	仏
		石経寺	大雄宝殿、祖師殿、三聖殿、天王殿	四川省成都市龍泉驛区茶店郷石経村	仏
第③回 調査	2018年 8月	青龍寺	大殿	四川省雅安市芦山県竜門郷青龍場	仏
		盤陀寺	大殿	四川省邛崃市臨邛鎮盤陀村	仏
		河沙寺	大雄宝殿	四川省成都市浦江県寿安鎮龍泉村	仏
		報恩寺	三清殿	四川省眉山市東坡区永寿鎮高豊村	仏
		梓潼宮	大殿	四川省眉山市彭山区江口鎮双江村	道
		檬子壩牌坊	/	四川省綿陽市塩亭県麻秧郷檬子村	/
		文星廟	正殿	四川省綿陽市塩亭県安家鎮鵝溪村	廟
		花林寺	大殿	四川省綿陽市塩亭県富驛鎮火星村	仏
		甘泉寺	大雄宝殿	四川省眉山市仁寿县禾加鎮楠林村	仏
		慧嚴寺	大雄宝殿	四川省遂寧市蓬溪県金橋郷過軍壩村	仏
		尊勝寺	大雄宝殿	四川省綿陽市三台県争勝郷	仏
		智果寺	大佛殿	陝西省漢中市洋泉城西謝村鎮智果村	仏
		豆叩寺	正殿	四川省綿陽市平武県豆叩鎮	仏
		百福院	前殿	四川省遂寧市船山区天上街百福巷	仏
		藍池廟	正殿	四川省綿陽市三台県塔山鎮藍池村	廟
		良馬寺	覺皇殿	陝西省漢中市洋泉城西渭水郷	仏
		饒益寺	大雄宝殿	四川省遂寧市射洪県柳樹鎮	仏
灵泉寺	大雄宝殿	四川省遂寧市河東新区灵泉山風景区	仏		
第④回 調査	2019年 8月	西林寺	大雄宝殿	四川省内江市東興区西林街道東桐路	仏
		圓通寺	中殿	四川省瀘州市瀘県喻寺鎮貢献村	仏
		宝輪寺	大雄宝殿	重慶市沙坪壩区磁器口白岩山	仏
		浄果寺	大雄宝殿	重慶市合川区古楼鎮浄果村	仏
		灵泉寺	大雄宝殿	四川省遂寧市河東新区灵泉山風景区	仏
		圓覺寺	大雄宝殿	四川省閬中市彭城鎮圓覺寺村	仏
		觀音寺	天王殿、羅漢殿、大雄殿	四川省閬中市公園路	仏
		觀音閣	正殿	四川省雅安市雨城区県前街	仏

※第①回調査は筆者が参加していないため、研究室の既往調査の資料を参考にさせて頂いた。

## 1-5. 論文構成

本論文は、第一章「序論」、第二章「四川省の寺廟建築の歴史的背景」、第三章「四川省の元・明代の三間仏殿」、第四章「四川省の明代の一間裳階付仏殿」、第五章「四川省の明代の三間裳階付仏殿」、第六章「結論」により構成されている。

**第一章「序論」**では、本研究の位置付け、研究目的、研究方法などについて述べている。

**第二章「四川省の寺廟建築の歴史的背景」**では、先ず、四川省の地理的位置付けを行い、省内の河川、山岳、気候等の自然環境について述べ、さらに、四川省古代から近世までの歴史的背景を述べている。次に、中国仏教の形成と四川省への伝播、省内での発展について説明し、道教の四川省内の状況についても述べている。また、四川省の寺廟建築について、中国の仏教・道教の歴史の中で、それらの発展消長と歴史的な遺構例について纏めている。

**第三章「四川省の元・明代の三間仏殿」**では、四川省の寺廟建築の現地調査に基づき、国指定の重点文物を中心に省・市指定文物、さらに保存状態の良い未指定の遺構を加え、文物局の聞き取り調査を行って残存状況を把握し、元・明代の三間仏殿 20 棟を抽出した。これらについて、由緒・沿革を検証し、実測調査を基に平面図と架構図を作成し、平面寸法と柱間配置、間架と架構システム、斗拱と中備、登梁と尾垂木尻について、比較表を基に、それらの特徴を述べている。

**第四章「四川省の明代の一間裳階付仏殿」**では、四川省の寺廟建築の現地調査に基づき、明代の国家・省・市等の重点文物と他の保存状態の良い一間裳階付仏殿遺構 12 棟を抽出し、既往研究の調査、文献調査を行い、これらの建立年代を検証した。実測調査を基に、平面、架構、斗拱、天井見上等の図面を作成し、平面寸法と柱間配置、間架と架構システム、斗拱の形態、天井の形態について、比較表を基に、それらの特徴を述べている。

**第五章「四川省の明代の三間裳階付仏殿」**では、四川省の寺廟建築の現地調査に基づき、国家・省・市の重点文物に認定された明代の三間裳階付仏殿 5 棟を取り上げ、それぞれの平面図と架構図を作成し、個別に由緒・沿革、外観、平面寸法、架構形式、意匠等について述べている。さらに、5 棟の架構図、寸法表、意匠に関する比較表を作成し、平面寸法と柱間配置、間架と架構システム、斗拱の形態について、それらの特徴を述べている。

**第六章「結論」**では、二章から五章までを総括し、本研究の成果と意義について論じている。

## 注釈

- 注 1) 劉叙傑:中国古代建築史—原始社会、夏、商、周、秦、漢建築,中国建築工業出版社,2003.7  
傅熹年:中国古代建築史—兩晋、南北朝、隋唐、五代建築,中国建築工業出版社,2001.12;  
郭黛姮:中国古代建築史—宋、遼、金、西夏建築,中国建築工業出版社,2003.9  
潘谷西:中国古代建築史—元、明建築,中国建築工業出版社,2001.3  
孫大章:中国古代建築史—清代建築,中国建築工業出版社,2002.11
- 注 2) 偃師二里头夏・殷代遺跡は、河南省偃師市の二里头村で発見された新石器時代末期から青銅器時代にかけての都市と宮殿の遺跡である。
- 注 3) 驪山秦始皇陵は、陝西省西安市北東の臨潼区の驪山北側にある秦始皇の陵墓とその周辺にある兵馬俑坑である。
- 注 4) 前漢皇帝十一陵は、陝西省西安市の周辺にある高祖劉邦の長陵、惠帝劉盈の安陵、文帝劉恒の霸陵、景帝劉啓の陽陵、武帝劉徹の茂陵、昭帝劉弗陵の平陵、宣帝劉詢の杜陵、元帝劉奭の渭陵、成帝劉驁の延陵などの前漢十一人の皇帝の陵墓である。
- 注 5) 三星堆遺跡は、中国四川省広漢市にある約 5000 年から 3000 年の歴史を持つ、長江文明に属する古代中国の遺跡の一つである。
- 注 6) 十二橋遺跡は、四川省成都市青羊区蜀都大道十二橋路に位置し、商代から西周(BC. 1700～BC. 771)の木造建築遺跡である。
- 注 7) 南禪寺は、山西省忻州市五台县五台山にある仏教寺院であり、唐代建中三年(782)に建てられた大殿は中国の現存最古の木造建築とされる。
- 注 8) 仏光寺は、山西省忻州市五台县豆村にある仏教寺院であり、大殿は唐代大中十一年(857)建立で、前掲の南禪寺大殿と共に、中国に現存する木造建築としては最古の遺構群に属する。
- 注 9) 鎮国寺は、山西省平遙古城の北東の洞村にある仏教寺院であり、主殿となる万仏殿は、唐代末期から五代の北漢天会七年(963)に建立された。
- 注 10) 正定文廟は、河北省正定県にある孔子とそれ以下の儒学者を祀る文廟であり、五代初期(907～)に建てられた大成殿は中国現存最古の文廟建築とされる。
- 注 11) 敦煌莫高窟は、甘肅省敦煌市の近郊にある南北朝から元代まで(4世紀～14世紀)に造られた仏教遺跡であり、この中から発見され「敦煌文書」は有名であり、1961年に中華人民共和国の全国重点文物保護単位、1987年にユネスコの世界遺産に登録された。
- 注 12) 麦積山石窟は、後秦時代(384～417)に造られた甘肅省天水市にある 194 の石窟群である。



- 注 13) 雲岡石窟は、山西省大同市の西方にある主に北魏興安二年(453)から太和十八年(494)に造られた石窟寺院である。
- 注 14) 龍門石窟は、河南省洛陽市の南方、伊河の両岸にある石窟寺院であり、北魏孝文帝が山西省大同から洛陽に遷都した太和十八年(494)に始まった。仏教彫刻史上、雲岡石窟の後を受けた龍門期(494～520)と呼ばれる時期の始まりである。
- 注 15) 巴中石窟は、四川省巴中市にある南朝梁(502～557)から、主に唐代(618～907)に造られた仏教遺跡である。
- 注 16) 大足石刻は、重慶市大足区にある主に唐代から宋代(9世紀～13世紀)に造られた石窟寺院である。1961年に中華人民共和国の全国重点文物保護單位に、1999年にユネスコの世界遺産に登録された。
- 注 17) 玄妙觀は、江蘇省蘇州城内に位置し、西晋咸寧二年(276)に創建された真慶道院であったが、その後数次の改名を経て、元代元貞元年(1295)に玄妙觀となった。現在、南宋淳熙六年(1179)に再建された三清殿が残されている。
- 注 18) 寒山寺は、江蘇省蘇州市姑蘇区にある臨濟宗の仏教寺院であり、南北朝の梁代天監年間(502-19)に創建されたが、現在の遺構は清末光緒三十二年(1906)に再建されたものである。
- 注 19) 明孝陵は、江蘇省南京市玄武区にある紫金山の南麓に位置する明代の太祖皇帝朱元璋(1328～98)と後妃の陵墓である。
- 注 20) 天童禪寺は、浙江省寧波市鄞州区にあり、太白山山麓に位置する禪宗の仏教寺院である。西晋永康元年(300)に創建されたが、唐代初年に現在の位置に移された。
- 注 21) 阿育王寺は、天童禪寺とならぶ同地の禪宗五山の仏教寺院であり、西晋太康三年(282)に創建されたが、現在の遺構は清末康熙元年(1622)以降再建されたものである。
- 注 22) 中国營造学社は 1930 年に朱啓鈴を中心として創設された中国の建築研究機構である。中国の伝統的な建築技術の振興と保存を主眼として、文献考証と現地調査の両面から研究活動を展開した。『營造法式』等の技術書古典の編纂・出版、各地に現存する古建築の調査を行い、その成果を単行本および機関誌『中国營造学社彙刊』1～7 卷(1930 - 45)に発表し、今日の中国建築史学の基礎を築いた。
- 注 23) 竹島卓一: 營造法式の研究<一>, 中央公論美術出版, 1997. 5  
竹島卓一: 營造法式の研究<二>, 中央公論美術出版, 1997. 7  
竹島卓一: 營造法式の研究<三>, 中央公論美術出版, 1997. 8
- 注 24) 田中淡: 中国建築史の研究, 弘文堂, 2014. 3

- 注 25) 関口欣也:中世禪宗様建築の研究, 中央公論美術出版, 2010. 9
- 注 26) 杉野丞, 他:福建省の宋代以前の仏塔について(上):中国華南地方の寺廟建築の研究(2), 学術講演梗概集. F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1992, pp. 1135-1136, 1992. 8  
杉野丞, 他:福建省の宋代以前の仏塔について(下):中国華南地方の寺廟建築の研究(3), 学術講演梗概集. F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1992, pp. 1137-1138, 1992. 8  
杉野丞, 他:広東省の木造建築について(下):明代の三間裳階付堂宇 中国華南地方の寺廟建築の研究(12), 学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 1997, pp. 447-448, 1997. 7  
杉野丞, 他:広東省の明・清代の三間堂について:中国華南地方の寺廟建築の研究(14), 学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 1998, pp. 149-150, 1998. 7  
杉野丞, 他:四川省の明代の裳階付仏殿について—甘露寺正殿・温泉寺大仏殿・同接引殿:中国西南地方の寺廟建築の研究(2), 学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 2000, pp. 329-330, 2000. 7  
杉野丞, 他:四川省宜賓市の明代の一間裳階付仏殿について:中国西南地方の寺廟建築の研究(6), 学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 2011, pp. 441-442, 2011. 7
- 注 27) 土田充義, 他:湖南省民家の漢族と少数民族の民家, 中央公論美術出版, 2003. 3
- 注 28) 『易経』は、中国古代の占筮の書であり、儒教経典の五経(『詩経』、『書経』、『易経』、『春秋』、『礼記』)の一つでもある。天文・地理・人事・物象を陰陽変化の原理によって説いた書で、元来、占いに用いられた。六十四卦およびそれぞれの爻に付けられた占いの文章(経)と、易全体および各卦について哲学的に解説した文章(十翼)とから成る。周代に流行したところから周易ともいう。
- 注 29) 『墨子』は、中国戦国時代に活動した諸子百家の墨家の開祖、墨翟(BC. 470 頃～BC. 390 頃)と門人や後学の墨家が著した書。兼愛・非戦・節儉などの墨家的主張を述べたもので、他に論理学・自然科学・戦争技術についての記述もみられる。
- 注 30) 唐招提寺は、奈良県奈良市五条町に位置し、南都六宗の一つである律宗の総本山である。唐僧鑑真(688～763)を開基として天平宝字三年(759)に創立され、金堂は宝亀年間(770～781)に建立されたと考えられ、1951年に国宝に指定された。
- 注 31) 『木経』は、北宋(960～1127)初期の建築家喻皓(出生不詳)が編纂した中国最初の木造建築技術のマニュアルであり、現在は残されていない。
- 注 32) 『夢溪筆談』は、北宋(960～1127)の科学者、政治家である沈括(1031～1095)による随筆集である。全書計 30 巻であり、その内『筆談』26 巻、『補筆談』3 巻、『続筆談』1 巻、天文

学、数学、物理学、化学、生物学等科学技術関係の記事が多いことで知られる。

注 33) 『爾雅』は、中国最古の類語辞典・語釈辞典・訓詁学の書である。著者が不明であり、春秋戦国時代(BC. 770～BC. 221)以降に行われた古典の語義解釈を漢初の学者が整理補充したものと考えられている。

注 34) 『魯班経』は、正式書名では『新鑄京板工師彫刻正式魯班経匠家鏡』であり、明代万暦年間(1573～1620)に編纂され、主に民居建築や外構工事、家具等、营造風水も含めた建築技術書である。

注 35) 「魯班尺」は、中国春秋時代に大工の神様と呼ばれる魯班(BC. 507～BC. 444)によって考案され、風水術で使われる専門の道具の一つであり、物の大きさ、長さの吉凶を判断する物差しである。長さの目盛りは上下 2 段となり、上段が「門公尺」、下段が「丁蘭尺」と呼ばれ、計る対象物によって使い分ける。

注 36) 梁思成: 薊縣独楽寺観音閣山門考, 中国营造学社彙刊(三), 中国营造学社彙刊, 1931 年, 第 3 卷, 第 2 期, pp. 7-92, 国際文化出版公司, 1997. 8

注 37) 梁思成, 劉敦楨: 華嚴寺, 大同古建築調査報告, 中国营造学社彙刊(六), 中国营造学社彙刊, 1934 年, 第 4 卷, 第 3, 4 期, pp. 7-76, 国際文化出版公司, 1997. 8

注 38) 梁思成, 劉敦楨: 善化寺, 大同古建築調査報告, 中国营造学社彙刊(六), 中国营造学社彙刊, 1934 年, 第 4 卷, 第 3, 4 期, pp. 77-136, 国際文化出版公司, 1997. 8

注 39) 杜仙洲: 義県奉国寺大雄殿調査報告, 文物, 1961 年, 第 2 期, pp. 5-16, 文物出版社, 1961. 2

注 40) 顔華: 山東広饒関帝廟正殿, 文物, 1995 年, 第 1 期, pp. 59-63, 文物出版社, 1995. 1

注 41) 陳紀中: 隆興寺, 文物, 1979 年, 第 1 期, pp. 92-94, 文物出版社, 1979. 1

注 42) 梁思成: 記五台山仏光寺的建築, 文物参考資料, 1953 年, 第 5, 6 期, pp. 76-121, 文物出版社, 1979. 1

注 43) 徐金星: 洛陽白馬寺, 文物, 1981 年, 第 6 期, pp. 88-90, 文物出版社, 1981. 6

注 44) 李俊: 武当山金殿, 文物, 1982 年, 第 1 期, pp. 83-84, 文物出版社, 1982. 1

注 45) 劉敦楨: 真如寺正殿, 文物参考資料, 1951 年, 第 8 期, pp. 91-97, 文物出版社, 1951. 8

注 46) 陳从周: 揚州大明寺, 文物, 1963 年, 第 9 期, pp. 21-23, 文物出版社, 1963. 9

注 47) 陳从周: 金華天寧寺元代正殿, 文物参考資料, 1954 年, 第 12 期, pp. 101-107, 文物出版社, 1954. 12

注 48) 林釗: 福州華林寺大雄宝殿調査簡報, 文物, 1956 年, 第 7 期, pp. 45-48, 文物出版社, 1956. 7

注 49) 徐續: 光孝寺大殿, 文物, 1956 年, 第 7 期, pp. 49-52, 文物出版社, 1956. 7

- 注 50) 熊正益:雲南建水指林寺正殿, 文物, 1986 年, 第 7 期, pp. 47-49, 文物出版社, 1986. 7
- 注 51) 中国文物研究所, 天津市文物管理中心, 天津市薊县文物保管所, 楊新:薊县独樂寺, 中国古代建築, 文物出版社, 2007. 11
- 注 52) 山西省古建築保護研究所, 柴澤俊:朔州崇福寺, 中国古代建築, 文物出版社, 1996. 5
- 注 53) 河北省正定县文物保管所, 張秀生, 劉友恒, 聶連順, 樊子林:正定隆興寺, 中国古代建築, 文物出版社, 2000. 6
- 注 54) 柴澤俊, 任毅敏:洪洞廣勝寺, 中国古代建築, 文物出版社, 2006. 1
- 注 55) 柴澤俊:解州關帝廟, 中国古代建築, 文物出版社, 2002. 9
- 注 56) 張興国, 馮棣, 羅強:梁平双桂堂, 重慶大学出版社, 2014. 10
- 注 57) 張十慶:寧波保国寺大殿勘測分析與基礎研究, 東南大学出版社, 2012. 12
- 注 58) 劉敦楨:西南古建築調查概況, 劉敦楨文集三, pp. 320-358, 中国建築工業出版社, 1987. 9
- 注 59) 莫宗江:宜賓舊州壩白塔宋墓, 中国营造学社彙刊(十一), 中国营造学社彙刊, 1944 年, 第 7 卷, 第 1 期, pp. 95-110, 國際文化出版公司, 1997. 8
- 注 60) 盧繩:旋螺殿, 中国营造学社彙刊(十一), 中国营造学社彙刊, 1944 年, 第 7 卷, 第 1 期, pp. 111-128, 國際文化出版公司, 1997. 8
- 注 61) 王世襄:四川南溪李莊宋墓, 中国营造学社彙刊(十一), 中国营造学社彙刊, 1944 年, 第 7 卷, 第 1 期, pp. 129-136, 國際文化出版公司, 1997. 8
- 注 62) 劉致平:成都清真寺, 中国营造学社彙刊(十一), 中国营造学社彙刊, 1945 年, 第 7 卷, 第 2 期, 國際文化出版公司, 1997. 8
- 注 63) 陳凡:富順文廟, 四川文物, 1984 年, 第 2 期, pp. 49-50, 四川文物編輯部, 1984. 4
- 注 64) 向遠木:記平武報恩寺, 四川文物, 1986 年, 第 3 期, pp. 18-21, 四川文物編輯部, 1986. 6
- 注 65) 王建緯:清代渠县文廟, 四川文物, 1986 年, 第 3 期, pp. 22-23, 四川文物編輯部, 1986. 6
- 注 66) 李頌文:劍閣覺苑寺大殿建築及大木結構初探, 四川文物, 1986 年, 第 4 期, pp. 14-17, 四川文物編輯部, 1986. 8
- 注 67) 彭高泉:遂寧廣德寺, 四川文物, 1989 年, 第 6 期, pp. 63-65, 四川文物編輯部, 1989. 12
- 注 68) 李江:什邡龍居寺, 四川文物, 1991 年, 第 2 期, pp. 62-63, 四川文物編輯部, 1991. 5
- 注 69) 趙義元:綿陽碧水寺, 四川文物, 1995 年, 第 1 期, pp. 61-63, 四川文物編輯部, 1995. 2
- 注 70) 范小平:德陽文廟的建築特色, 四川文物, 2002 年, 第 1 期, pp. 85-87, 四川文物編輯部, 2002. 2
- 注 71) 黃枝生:七曲山大廟建造史初考, 四川文物, 2005 年, 第 5 期, pp. 68-71, 四川文物編輯部, 2005. 10

- 注 72) 賴西蓉:四川蓬溪縣新發現元代建築金仙寺,四川文物,2012年,第5期,pp. 72-76,四川文物編輯部,2012. 10
- 注 73) 冷婕:四川元代漢地寺廟仏殿建築的間架特色分析,2015年中国建築史学会暨學術研討會論文集(上),pp. 114-122,中国建築学会建築史学分会,2015. 11
- 注 74) 馬曉,周学鷹:閬中永安寺建築技芸,古建園林技術,2016年,第4期,pp. 66-71,古建園林技術編輯部,2016. 12
- 注 75) 蔡宇琨,趙元祥,張宇:四川塩亭新發現的元代建築花林寺大殿,文物,2017年,第11期,pp. 75-90,文物出版社,2017. 11
- 注 76) 馬曉:四川眉山報恩寺元代大殿,文物,2018年,第7期,pp. 81-90,97,文物出版社,2018. 7
- 注 77) 湯詩偉,蔡宇琨,張宇:四川蓬溪縣金仙寺藏殿建築尺度探討論,四川文物,2018年,第6期,pp. 87-94,四川文物編輯部,2018. 12
- 注 78) 趙凡:四川広漢龍居寺中殿建築熱湿環境特征研究,文物保護与考古科学,2021年,第1期,pp. 110-117,文物保護与考古科学編輯委員会,2021. 2
- 注 79) 李林東:峨眉山万年寺磚殿復原研究,建築史,2019年,第1期,pp. 52-62,2019. 6
- 注 80) 陳穎,田凱,張先進,他(編):四川古建築,中国古建築從書,中国建築工業出版社,2015. 12
- 注 81) 青鋒,他(編):四川重慶古建築地図,清華大学出版社,2016. 12
- 注 82) 成都文物考古研究院編:四川古建築調查報告集(第一卷),文物出版社,2020. 12
- 注 83) 建築区分は、本論文では建築の形態で遺構を区分し、三間仏殿、一間裳階付仏殿と三間裳階仏殿で分けている。



## 第二章

### 四川省の寺廟建築の歴史的背景





## 第二章 四川省の寺廟建築の歴史的背景

### はじめに

本章では、四川省の寺廟建築の歴史的背景として、四川省の地勢と歴史、同省の宗教、同省の寺廟建築について概観した上で、同省の元・明代の建築遺構について検討することとする。その内容を以下の四節に沿って述べることとする。

第一節「四川省の地勢と歴史」では、四川省の中国の地理的な位置付けを述べ、省内の山岳、河川及び気候等の自然環境について述べる。また、古代、中世、近世における四川省の重要な政治及び社会状況を取り上げ、四川省の歴史的な背景について、総括している。

第二節「四川省の宗教」では、先ず、中国の仏教の源流について説明し、その背景と四川省への仏教の伝播と展開を述べる。また、四川省では道教の発祥地の一つであり、省内道教の形成及び発展について述べている。

第三節「四川省の寺廟建築」では、四川省に発見された古代の都市、陵墓、建築に関する遺跡を取り上げ、その保存状況、建築的な要素を述べる。また、各時代の寺廟建築遺構を取り上げ、さらに元・明代の寺廟建築遺構の概要について述べている。

第四節「結び」では、四川省の地勢と歴史、宗教、寺廟建築について総括している。

## 2-1. 四川省の地勢と歴史

四川省は、中国西南地方の長江の上流域にあり、北に青海省、甘肅省及び陝西省、東に重慶、南に貴州省及び雲南省、西にチベット自治区を擁し、省都は中心部に位置する成都市である。地勢は高低差が大きく複雑であり、周囲には3000m～5000m級の山岳地が聳え、中央部に平原と四つの高原がおかれる盆地を形成し、西北部の高原地形が標高平均3000m、東南部の盆地及丘陵が標高約500～2000mである。四川盆地は、四川省中東部と重慶からなり、西にチベット高原と横断山脈、北に秦嶺、東に湘鄂西山地、南に雲貴高原が接し、周辺には北に米倉山、南に大娄山、東に巫山、西に邛崃山、西北に龍門山、東北に大巴山、西南に大涼山、東南に武陵山が聳えている。また、四川盆地には河川が多く、長江水系を中心としており、長江上流の金沙江は四川省とチベット、雲南省の境界地域を源流とし、支流は雅砻江、岷江、大渡河、理塘河、沱江、嘉陵江、赤水河等に分散して流れる。また、四川盆地の気候は、亜熱帯湿潤気候、川西南山地半亜熱帯湿潤気候と川西北高山高原高寒冷気候の気候からなる。このように、四川省は周辺を高い山岳地により囲まれた盆地であり、周辺地域から険しい境界でありながら、北部で華北との境に漢中・安康（陝西省）が置かれ、東部では宜昌（湖北省）、常德（湖南省）、南部では畢節（貴州省）、昆明（雲南省）が置かれるなどして、様々な文化を受容していた点が注目される（図2-1）。

一方、四川省の歴史は古代の巴蜀にあたり、その起源は、前述の「三星堆遺跡」、「十二橋遺跡」が発見されたBC. 17世紀までに遡る。BC. 11世紀早期「巴」が成立し、BC. 17世紀早期「蜀」が成立し、「巴」は現在の重慶一帯、「蜀」は現在の成都一帯の地である。BC. 316に秦によって巴蜀が滅ぼされ、秦に編入されるが、その険しい山岳地帯が地理的な防ぎの壁となった。四川省西北部の松藩地区から流れる岷江は、山間から成都平野に入る灌県の地域で、古くから洪水を起こしたため、BC. 250年に「蜀郡」太守の李冰により水利施設「都江堰」が築造され、今なお成都の治水に効果を発揮し、この事業により「天府の国」といわれるほど豊かな農業を発展させた。

BC. 206年に秦が滅亡すると、楚の項羽から劉邦が漢中と巴蜀を与えられ、漢中王と号した劉邦は長安を基盤として勢力を増大し、やがて項羽を討ち負かして中国を統一し、中華王朝となる漢朝を建国した。三国時代（220～280）には、前漢の皇族劉勝の後裔を称する劉備により蜀漢がこの地に建てられ、魏呉と天下を争った。五胡十六国時代（304～439）には成漢、後蜀が晋に支配され、581年には隋朝に支配された。隋文帝時期（581～604）には、四川の西部高原と南部領域まで拡大され、618年に唐が建立されると、四川は社会安定、経済も全盛時期を迎えた。五代十国時代（902～979）には前蜀、後蜀が中原地方の支配を脱し、四川を中心に独自の政権を樹立している。965年には宋

代の支配を受け、咸平四年（1001）には前述のように北宋が益州路（現成都）・梓州路（現三台）・夔州路（現奉節）・利州路（現広元）の四地方を統合して四川路を設置したことで、この地方一帯を「四川」と称するようになった。元代至元二十三年（1286）に四川行中書省が設置され、四川独自の行政が始まった。明代に入り、四川は全国13の行政区の一つとなり、重慶を含む、貴州省の北西部、雲南省の東北部、川西高原と涼山地区が管理され、周辺地域との交流に伴って、経済の成長及び文化の交流が徐々に発展していた。明末から清初に張献忠の農民蜂起<sup>II-1)</sup>が勃発した際には、四川において300万人もの大虐殺が行われ、古代から続いた四川人はほぼ絶滅したとも云われる。その後、100年間を架けて、湖北省・湖南省・広東省からの移民を流入することで復興されることになる<sup>II-2)</sup>。1997年に内陸部振興政策のため、重慶市は四川省から分かれ、重慶直轄市に昇格した。

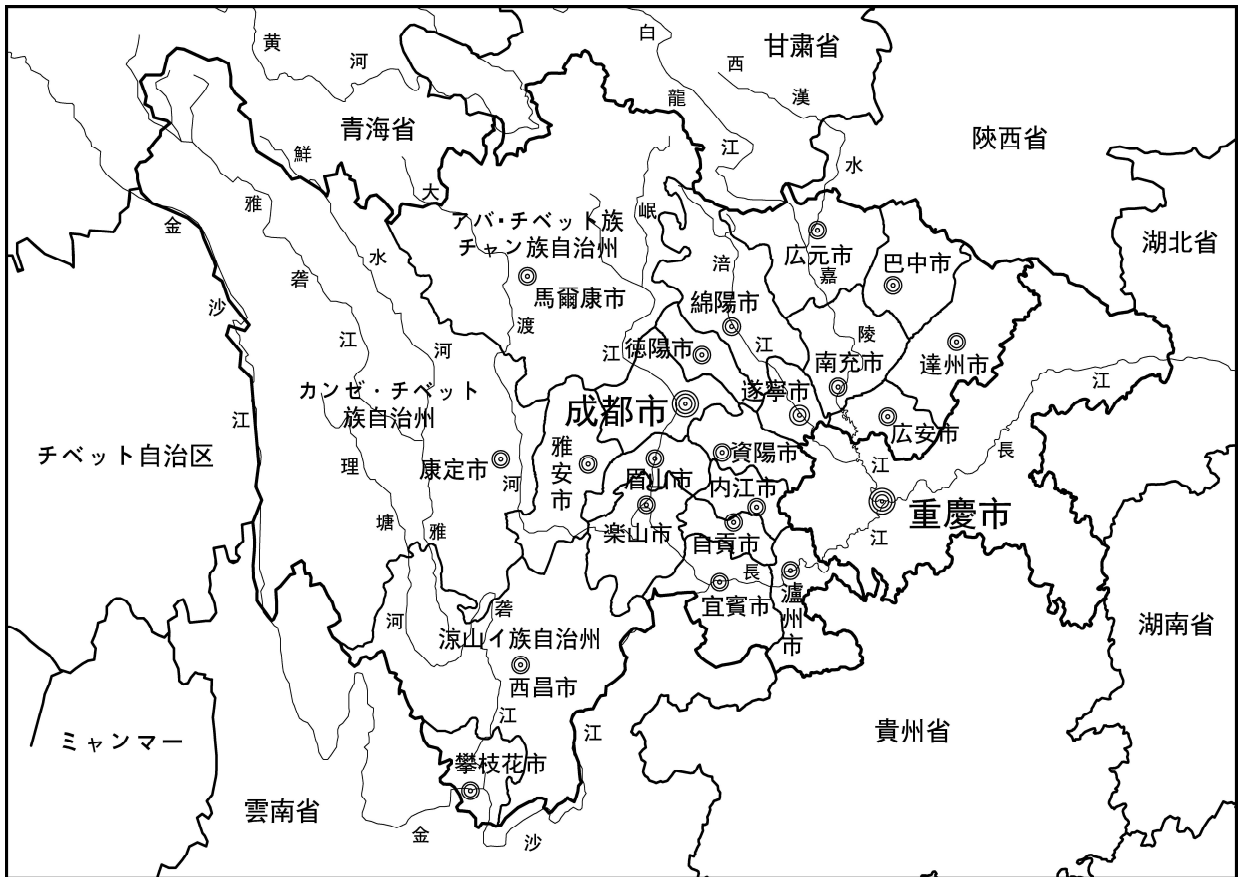


図2-1 四川省地図（現在）

## 2-2. 四川省の宗教

中国大陸には、東漢時代（25～220）に西域から伝来した「中国仏教」、唐代（618～907）にチベット地区において、現地の宗教と融合した「チベット仏教（ラマ教）」の2つの仏教がある。中国に最初に仏教が伝えられたのは、文献上では西漢（BC. 206～AD. 8）の哀帝の代（BC. 6～BC. 1）とされる。当時、仏教は皇帝からは認められなかったが、東漢時代（25～220）に入り、永平七年（64）後漢の明帝（57～75 年在位）が西域に使者を遣わし、永平十年（67）、迦葉摩騰と竺法蘭が仏教の経書を携えて洛陽の鴻臚寺に滞在したのに対し、明帝がこれに報いて鴻臚寺を白馬寺<sup>注1)</sup>と改めると、二人の僧侶は『四十二章経』<sup>注2)</sup>を翻訳したとされる。その後、白馬寺は中国の第一仏教寺院となり、『四十二章経』が中国最初の漢訳仏教經典となり、中国に仏教を本格的に伝播したとして、これを「漢伝仏教」と呼んでいる。

中国に仏教が本格的に導入されたのは魏・晋・南北朝時代（220～580）であり、隋唐時代（581～907）に入ると、朝廷による寺院建築などの保護により全盛期を迎え、三論・華嚴・法相・禪など多くの宗派が生まれた。その中で最も勢力を伸ばしたのは南宋禪であった。しかし、唐代後半になると異国の宗教として迫害を受けるようになり、845 年の唐の武宗の弾圧により、仏教は衰退に向かっている。しかし、10 世紀以降の宋代に入りと仏教は再び復興し、各派が隆盛を誇るようになった。中でも、禪宗は 12 世紀に臨濟宗や曹洞宗など多くの宗派に分かれ、同じ頃民間では阿弥陀信仰が盛んになり、念仏によって極楽浄土に往生するという浄土教が浸透した。また、宋代には木版印刷の普及により、膨大な經典を集大成した『大蔵経』が刊行されている。一方、13 世紀に元の皇帝はチベット仏教を国教としたが、中国在来の宗教に対しては寛容であった。しかし、異民族支配が続く中、宋代の阿弥陀信仰の結社である白蓮教<sup>注3)</sup>が民衆の反モンゴル感情と結びつき、しかも弥勒仏が現れて民衆を救済するとする下生信仰が生まれて、元に対する紅巾の乱<sup>注4)</sup>が起こった。13 世紀後半、明代に入ると白蓮教は邪教として弾圧され、清中期には白蓮教徒が反乱を起こした。しかし、これらは仏教と道教などの民間信仰が混合したものであり、仏教としては禪宗と浄土教の融合が進んだが、再び衰退を辿ることになる。

四川省に仏教が伝播した年代は不詳であるが、楽山の樂山麻浩崖墓では漢代の石窟仏像が発見され、『華陽県志・金石志』の「重修東山白塔寺碑記」（宋淳熙六年・1179）<sup>II-3)</sup>によると白塔寺は永平年間（東漢明帝年号）に創建され、また、『四川通志』（清・嘉慶本）<sup>II-4)</sup>にも、成都、峨眉、宜賓、遂寧、三台等に漢代創建の仏教寺院が記載されており、仏教が四川省に伝播した時期は遅くとも東漢（25～220）頃と考えられている<sup>II-5)</sup>。

東晋哀帝興寧二年（364）に法和（現河南省荊阳市人）、東晋隆安三年（399）に慧持（山西省寧武県人）が来訪すると、華北地方から大量の仏教書籍や文化が流入し、四川省内に仏教文化が広まった<sup>II-6)</sup>。隋・唐代から宋代までは中国各地で仏教が隆盛を極めた時期であり、四川省における仏教も同じ状況であった。唐代には馬祖道一、圭峰宗密などの名僧が現れ、『大唐西域記』<sup>II-7)</sup>の玄奘法師も唐代初期、仏教を学ぶために四川省に入り、唐武徳五年（622）成都で受戒している。その後、唐の玄宗により至徳二年（757）に成都大聖慈寺（現大慈寺）が建立され、中和元年（881）には僖宗により新都宝光寺及び舍利塔が建立された。また、開元元年（713）に樂山凌雲寺の海通法師により樂山大仏が彫られ、貞元十九年（803）に竣工した。峨眉山には東漢後期に道教寺院があったが、仏教文化の流入により、唐代には多くの仏教寺院が建立された。5世紀に創建された普賢寺は唐乾符三年（876）に白水寺と改められ、明万曆皇帝は母の七十大寿の祝に寺内に無梁殿を築き、恩賜扁額「聖寿万年寺」を授け、万年寺の名称が与えられた。また、寺内には宋代の普賢菩薩銅像があり、普賢道場と云われ、北宋代以降には全国に広がり中国四大仏教名山<sup>注5)</sup>に数えられるようになった。元・明代に入ると、四川省の仏教は全体的に衰弱の傾向にあったが、明末清初には忠県聚雲寺の吹万広真（1582～1639）が創立した聚雲禅派、梁山（現梁平県）双桂堂の破山海明（1597～1666）が創立した双桂禅派の二派が、四川仏教の禅宗の発揚に貢献した。

一方、道教は、中国の漢族固有の生活信条、民間信仰を基礎とした宗教であり、その思想、教理、教団、信仰の対象と儀礼は、様々な要素を含む複合体であった。それは漢時代以前の巫祝信仰や神仙方術的信仰ならびに民衆の信仰などを基盤としており、漢代に黄老信仰<sup>注6)</sup>が加わり、後漢末から六朝時代頃にかけて本格的に形成され、古代中国の政治、経済及び文化に深く影響を与えた。その後、後漢末（184～220）における、道教の教団である太平道と五斗米道の成立により、道教の宗教化が確立されたと云われる。太平道は、後漢末の華北一帯で民衆に信仰された道教の一派であり、『太平経』<sup>注7)</sup>を教典とし、教団組織は張角（～184）が創始し、黄巾の乱<sup>注8)</sup>の後、張角の死をもって教団が消滅した。五斗米道は、後漢末に太平道に少し遅れて、張陵（34～156）が蜀郡の成都近郊の鶴鳴山（現四川省成都市大邑県）で『老子』<sup>注9)</sup>を教主とする道教教団である。後漢時代から魏・晋・南北朝時代は道教の形成と確立の時期であり、隋・唐・北宋時代に、道教は極めて繁盛になり、南宋・金・元時代に全真道、太一道等の新しい門派が生まれた。しかし、明・清時代には、中国封建社会の末期に入り、道教の発展も止まり、低迷状態に入った。

### 2-3. 四川省の寺廟建築

紀元前 200～300 年頃、四川盆地では古蜀族を中心とした国家が成都に建国された。蜀国は長江上流域文化の源流地であり、長江文明の発祥地の一つでもある。中でも、広漢三星堆と成都金沙遺跡の地域は古蜀国の政治、経済と文化の中心であったとされる。

先秦時代（～BC. 221）、四川省の建築は穴居と干闌建築と考えられており、三星堆に発見した新石器時代の「木骨泥牆」建築遺跡、成都十二橋で発見された殷代の建築遺跡等により、先秦時代の四川建築の様相が明らかになった。殷周時代（BC. 17 世紀～BC. 256）の金沙遺跡の東北部では、大型宗廟また宮殿建築の八つの建物で構成された遺跡が発見され、建物は木造で土壁の茅葺であり、先秦時代の中国伝統木造建築は長江流域の発展状況に属するとみられる。秦漢時期（BC. 221～AD. 220）、秦の統一により四川地方の生産技術は進歩し、さらに中原文化の浸透により、四川省の建築は大きな変革期を迎えた。四川で発掘された大量の石、磚等の漢代画像には、建築群、単体建築、構造、装飾等が描かれており、ここには、木造軸組式の建物、柱、梁、斗栱、屋根等を描いた画像が残されている（図 2-2）。この時代の建築的な形態を研究する重要資料となっている。また、四川省内に残された大量の漢代崖墓と闕も重要資料であり、斗栱、中備等を詳細に描いている事例が残されている（図 2-3、図 2-4）。また、東漢時代（25～220）、仏教が中国へ流入したことより、前述のように多くの仏教寺院が創立されることになり、四川省には仏教寺院の宝光寺<sup>注10</sup>、峨眉山金頂普光殿<sup>注11</sup>等が創建され、さらに、道教の発祥地の一つとされた四川省では、道教聖地とされる青城山もこの時期に創建されている<sup>II-8</sup>）。

魏晉南北朝時代（220～589）には、覇権争いによる混乱により、建築の遺構・遺跡は極めて少ない。唐宋時代（581～1279）に入り、四川地方の政治は安定し、経済も発展したことで四川省の建築も繁栄期を迎えた。しかし、四川省は、多雨、多湿の気候であり、木造建築の保存と維持は磚造・石造と比べて不利であり、唐・宋時代の木造建築は皆無であり、宋淳熙八年（1181）に造られた小木作の江油市雲岩寺輪蔵（写真 2-1、写真 2-2）が唯一残されている。一方、この時期に仏教が広まったことから、寺院では文殊院<sup>注12</sup>、万年寺<sup>注13</sup>、青城山上清宮<sup>注14</sup>等、また、石窟寺院では樂山大仏<sup>注15</sup>、広元千仏崖<sup>注16</sup>、夾江千仏崖<sup>注17</sup>等が建立された<sup>II-8</sup>）。

元・明時代（1271～1911）には、四川省の寺廟建築は増加し、残存状況もよくなり、比較的によくの木造遺構が残されるようになる。元代に建立した寺廟建築は、五龍廟文昌閣<sup>注18</sup>、永安寺大殿<sup>注19</sup>、青龍寺大殿<sup>注20</sup>、平襄樓<sup>注21</sup>、醴峰觀<sup>注22</sup>、報恩寺大殿<sup>注23</sup>、大廟飛來殿<sup>注24</sup>、七曲山大廟盤陀殿<sup>注25</sup>、花林寺大殿<sup>注26</sup>、金仙寺大殿<sup>注27</sup>、永安廟大殿<sup>注28</sup>等がある。明清代は、明正統五年（1440）

から、明天順四年（1460）にかけて建設された平武縣報恩寺は代表的な寺院であり、境内に山門、天王殿、大雄宝殿等の建物が残されており、中国全土の遺構と比較しても、保存状況の良い明代の遺構群の一つといえる。また、明代の観音寺毘盧殿<sup>注29)</sup>、明教寺覺皇殿<sup>注30)</sup>、西充文廟大正殿<sup>注31)</sup>等、清代の石經寺大雄宝殿<sup>注32)</sup>、青羊宮三清殿<sup>注33)</sup>、徳陽文廟大正殿<sup>注34)</sup>等の寺廟建築が残されている。

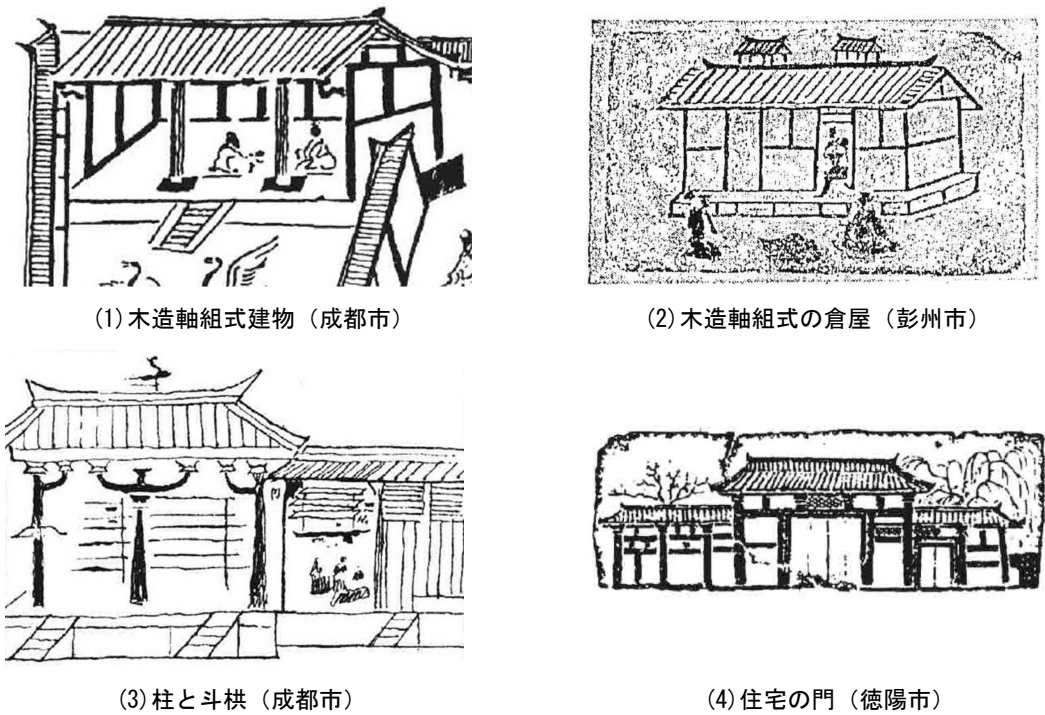


図2-2 四川省の漢代画像磚に描かれた建築要素

（出典：『中国古代建築史・第一卷(第二版)』中国建築工業出版社 2009 年刊）

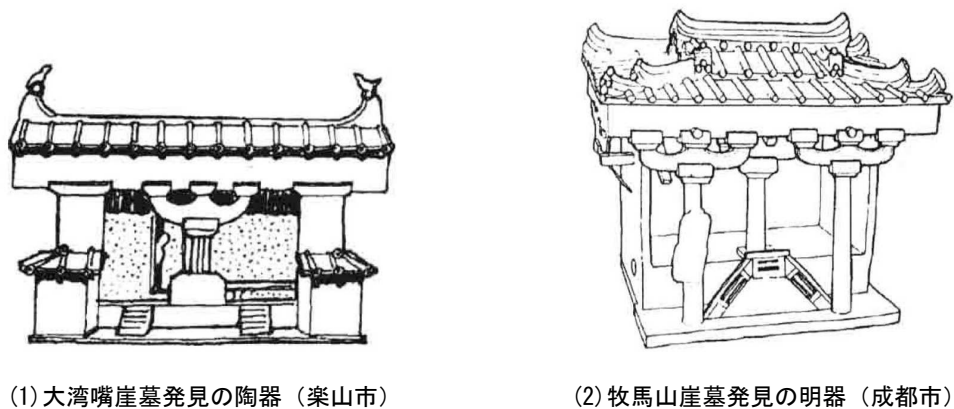
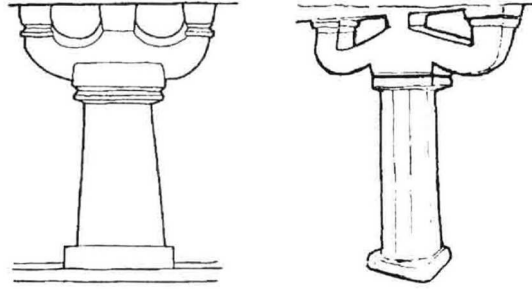


図2-3 四川省の漢代崖墓から発掘された建築明器

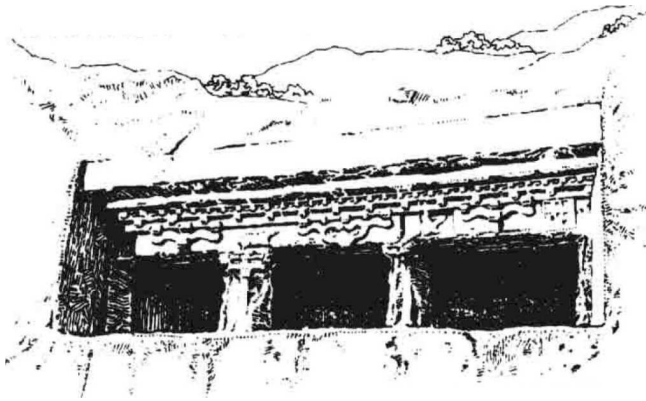
（出典：『中国古代建築史・第一卷(第二版)』中国建築工業出版社 2009 年刊）



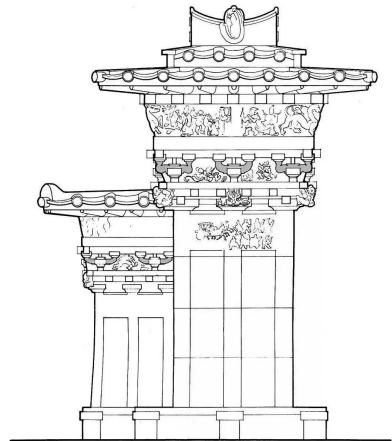
(1) 石柱と斗拱（樂山市柿子湾漢墓）



(2) 石柱と斗拱（眉山市彭山崖墓）



(3) 石柱と斗拱（宜賓市黃傘溪崖墓）



(4) 斗拱（雅安市高頤墓闕）

図2-4 四川省の漢代崖墓と闕の建築要素

（出典：『中国古代建築史・第一卷（第二版）』中国建築工業出版社 2009 年刊



写真2-1 四川省江油市雲岩寺輪藏

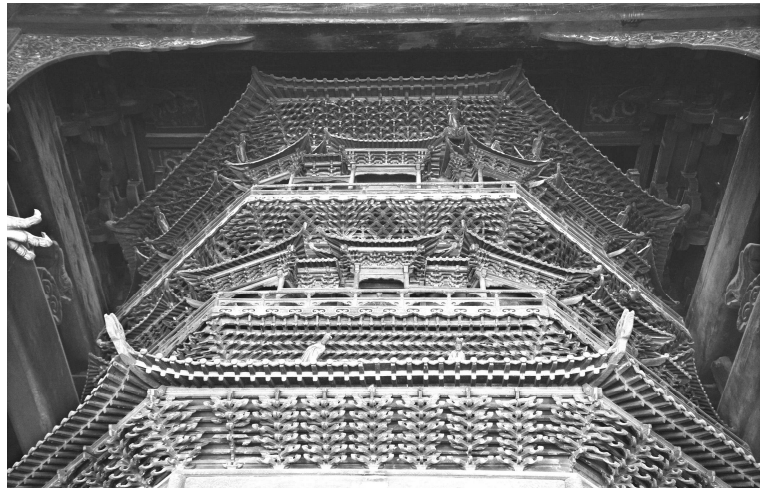


写真2-2 四川省江油市雲岩寺輪藏



## 2-4. 結び

四川省は中国の西南地方に位置し、周辺を山岳が取り囲む盆地であり、省内には多くの河川が流れている。省内に発掘された先秦時代、殷周時代の遺跡によると、新石器時代末期に人類文明がこの地に現れた。秦代の秦始皇帝の全国統一により、四川は政治、経済、文化の発展の軌道に載り、漢代には、仏教文化が中国大陸に伝播することで、四川各地に仏教文化が広まった。また、この地にはすでに民間信仰を基盤とした道教が浸透していた。隋唐時代（581～907）に入ると、経済、文化の発展により、仏教文化はさらに広がり、各地に数多くの石窟や仏教寺院が建立された。

殷周時代の遺跡や漢代の崖墓に発掘された画像磚や、陶器等から建物の素描や線刻が現れ、先秦時代の四川省の出土物には、中国伝統木造建築が描かれており、長江流域の発展状況を窺うことが出来る。ここには、木造の柱と梁による軸組、その上部の屋根の構成が描かれており、木造の楣式構造と屋根の垂木と瓦の仕組が成立し、柱上には斗栱が描かれており、すでに抬梁式の骨格が形成されていたことが分かる。これまで発見された最古の木造建築は、宋淳熙八年（1181）の雲岩寺輪藏であるが、この建築は同時代の『营造法式』に記される輪藏を凌ぐ、精緻な意匠を備えた大型輪藏であり、宋代には、華北・華中に匹敵する建築文化が存在していたことが想定される。その後の元・明代に建立された寺廟建築については、その数が増すため四川省の全地域を俯瞰することが求められる。そこで、三章、四章、五章において、これら四川省の元・明代の寺廟建築の遺構について分析・検討を行うこととする。

## 注釈

- 注 1) 白馬寺は、河南省洛陽市に位置し、東漢永平十一年(68)に建立された最初の官式仏教寺院である。
- 注 2) 『四十二章経』は、インド仏教僧侶の迦葉摩騰と竺法蘭が訳した、仏教最初の漢訳経典とされる書物である。
- 注 3) 白蓮教は、中国に南宋から清代まで(1127～1911)存在した宗教である。本来は東晋の廬山慧遠の白蓮社に淵源を持ち、浄土教結社(白蓮宗)であったが、弥勒下生を願う反体制集団へと変貌を遂げた。
- 注 4) 紅巾の乱は、中国の元至正十一年(1351)に起こった宗教的農民反乱。白蓮教を紐帯とし、目印として紅い布を付けた事から、この名がある。反乱軍は紅巾賊または白蓮教徒が弥勒に焼香をするため、香軍と呼ばれる。この大乱の中から明の太祖朱元璋が登場することとなる。
- 注 5) 中国四大仏教名山は、山西省五台県の五台山(文殊菩薩の霊場)、四川省楽山市の峨眉山(普賢菩薩の霊場)、安徽省池州市の九華山(地藏菩薩の霊場)と浙江省舟山市の普陀山(観音菩薩の霊場)である。
- 注 6) 黄老信仰は、古代中国の戦国時代(BC. 475～BC. 221)末期から漢代(BC. 206～220)初期に流行した、道家または法家・雑家の政治思想である。
- 注 7) 『太平経』は、別称『太平清領書』、計 170 巻、太平道が教典とした書物であり、于吉(～200、東漢末期の道士)が曲陽の泉水のほとりで得た神書と伝えられる。
- 注 8) 黄巾の乱は、後漢末期の中平元年(184)において、太平道の信者が教祖の張角を指導者として起こした組織的な農民反乱である。
- 注 9) 『老子』は、別称『道德経』、中国の春秋時代(BC. 770～BC. 476)の思想家老子が書いたと伝えられる書物である。
- 注 10) 宝光寺は、四川省成都市新都区に位置し、東漢(25～220)に創建されと云われ、隋代(581～618)に大石寺と称え、唐代(618～907)に宝光寺と改名した。
- 注 11) 峨眉山金頂普光殿は、四川省峨眉山市峨眉山の頂上に位置し、東漢(25～220)に創建され、唐代(618～907)に創建された華藏寺(金頂)の起源である。現存建物はすべて 1990 年に重建したものである。
- 注 12) 文殊院は、四川省成都市青羊区に位置し、隋代(605～617)に建立され、信相院、信相寺と称え、清康熙三十六年(1697)に文殊院と改名された。

- 注 13) 万年寺は、四川省峨眉山市峨眉山風景区に位置し、漢代の薬師蒲公の仏を拝むところと云われ、東晋隆安五年(401)に創建され、当時は普賢寺と呼ばれ、唐乾符三年(876)に創建され、白水寺と称し、明万曆二十八年に万年寺と改名された。
- 注 14) 青城山上清宮は、四川省都江堰市青城山に位置し、晋代(265～420)に創建され、その後廃れ、唐代玄宗の時期(712～756)に修繕し、五代の時期に重建され、明代末期(1582～1644)に火事で全焼し、現在の建物は清代同治年間(1862～1874)に建てられたものである。
- 注 15) 樂山大仏は、四川省樂山市にある唐開元元年(713)から貞元十九年(803)に弥勒菩薩を象(かたど)って彫られた巨大な磨崖仏(石仏)の石窟寺院である。1982年に中華人民共和国の全国重点文物保护单位に、1996年にユネスコの世界遺産に登録された。
- 注 16) 広元千仏崖は、四川省広元市にある北魏(386～834)末期にから主に唐代(618～907)に造られた石窟寺院である。
- 注 17) 夾江千仏崖は、四川省樂山市夾江縣にある隋代(581～618)から主に唐代(618～907)に造られた石窟寺院である。
- 注 18) 五龍廟文昌閣は、四川省閬中市思依鎮河樓郷白虎村に位置し、五龍廟では唐代(618～907)に創建され、当初は山門、戲樓、文昌閣等建物があつたが、現在では元至正三年(1343)に建立された文昌閣のみ残される。
- 注 19) 永安寺大殿は、四川省閬中市水觀鎮永安寺村に位置し、永安寺では唐代(618～907)に創建され、寺内に山門、觀音殿、大殿等建物があつて、大殿は元至順四年(1333)に建立された最も古い建物である。
- 注 20) 青龍寺大殿は、四川省雅安市蘆山縣龍門郷青龍場村に位置し、元至治三年(1323)に創建され、大殿屋根の瓦に書かれた「至元一年」(1264)、「至元六年」(1269)、「至正十二壬辰年」(1352)、「至正十三年」(1353)等銘記によると、大殿は元代に建立されたものである。
- 注 21) 平襄樓は、四川省雅安市蘆山縣蘆陽鎮南街に位置し、北宋(960～1127)に創建され、現在の建物は元代(1271～1368)に建立されたものと認定された。
- 注 22) 醴峰觀は、四川省南充市南部縣大坪鎮丘壩郷金星村に位置し、元大徳元年(1297)に創建され、境内正殿は虹梁の墨書によると、元大徳十一年(1307)に建立されたものである。
- 注 23) 報恩寺大殿は、四川省眉山市東坡区永寿鎮高丰村に位置し、報恩寺では唐代(618～907)に創建され、大殿は元泰定四年(1327)に重建されたものである。
- 注 24) 大廟飛來殿は、四川省峨眉山市大廟郷大廟村に位置し、宋代(960～1279)に創建され、建立年代は不詳であるが、1983年修理工事に発見された隅梁に「元大徳戊戌年」(1298)と書かれ

た鉄製の込み栓により、飛来殿は元代の建立であることが分かる。

- 注 25) 七曲山大廟盤陀殿は、綿陽市梓潼縣文昌鎮七曲村に位置し、元代(1271～1368)に建立され、大廟境内 23 の中で最も古い建物である。
- 注 26) 花林寺大殿は、四川省綿陽市塩亭縣富驛鎮火星村に位置し、元至大四年(1311)に建立されたものである。
- 注 27) 金仙寺大殿は、四川省遂寧市蓬溪縣赤脚鎮金仙村に位置し、虹梁の墨書によると、元泰定四年(1327)の建立である。
- 注 28) 永安廟大殿は、四川省南充市南部縣桐坪郷に位置し、永安廟では唐永徽二年(651)に創建され、大殿は建立年代が不明であるが、様式的に元代(1271～1368)の建立と考えられている。
- 注 29) 觀音寺毘盧殿は、四川省成都市新津区永商鎮宝橋村に位置し、觀音寺では南宋淳熙年間(1174～1188)に創建され、毘盧殿は明天順六年(1462)に建立されたものである。
- 注 30) 明教寺覺皇殿は、四川省成都市青白江区城廂鎮に位置し、明教寺は創建が不詳であるが、古記録により、唐咸通九年(868)に重建され、唐中和二年(882)に浄土寺と呼ばれ、北宋大中祥符四年(1011)に明教寺と改名された。覺皇殿は建立年代が不詳であり、遅くて明成化元年(1465)の建立と推測される。
- 注 31) 西充文廟大正殿は、四川省南充市西充縣晋城鎮蓮花湖に位置し、西充文廟では南宋淳祐年間(1241～1252)に創建され、大正殿は虹梁の墨書によると、明弘治十五年(1502)に建立されたものである。2002年に西充文廟全体が現在地に移築された。
- 注 32) 石経寺大雄宝殿は、四川省成都市龍泉驛区茶店郷石経村に位置し、唐代(618～907)に創建され、寺内に山門、天王殿、大雄宝殿、祖師殿等建物があり、大雄宝殿は清乾隆三十二年(1767)に重建されたものである。
- 注 33) 青羊宮三清殿は、四川省成都市青羊区一環路西二段に位置し、青羊宮は創建年代が不詳であるが、古称青羊肆、唐中和三年(883)に増築した後、青羊宮と呼ばれ、明代(1368～1644)に青羊万寿宮に改名され、清代(1644～1911)に青羊宮と戻った。境内には灵祖殿、混元殿、三清殿、玉皇殿等建物があり、三清殿は清同治八年(1869)に建立したものである。
- 注 34) 徳陽文廟大正殿は、四川省徳陽市旌陽区文廟街に位置し、徳陽文廟では南宋開禧二年(1206)に建立され、明洪武年間(1368～1398)に現在地に移築し、明代末期(1582～1644)に戦乱により破壊され、清順治から康熙年間(1644～1722)にかけて修理工事を行い、現在の伽藍配置の基礎を築いた。その後、増築工事を行い、現在の伽藍配置は清道光三十年(1850)の造営である。現在の大正殿は清道光三十年(1850)の建立である。

## 第三章

### 四川省の元・明代の三間仏殿



### 第三章 四川省の元・明代の三間仏殿

#### はじめに

本章では、四川省の寺廟建築の現地調査に基づき、国指定の重点文物を中心に省・市指定文物、さらに保存状態の良い未指定の遺構を加え、文物局の聞き取り調査を行って、元・明代三間仏殿 20 棟を抽出した。その内、元代が 5 棟、明代が 15 棟であり（表 3-1）、四川省東部に多く残存し、仏教寺院が 17 件、廟が 2 件、道観が 1 件あり、成都市の周辺地域に集中し、北東部の徳陽市、綿陽市、南充市、遂寧市に 12 棟、西南部の眉山市、雅安市、邛崃市に 6 棟、成都市に 2 棟ある（図 3-1）。次に、20 棟について、中国文物局の資料、中国側の論文、さらに現地調査の古記録（寺誌、石碑、棟木の墨書）から沿革・建立年代等を検証し、既往研究の調査、文献調査<sup>Ⅲ-1)~5)</sup>を行い、さらに、20 棟の図面を作成し、それらの沿革、平面寸法と柱間配置、間架と架構システム、斗栱と中備、登梁と尾垂木尻の特徴を明らかにした。その内容を以下の六節に沿って論ずることとする。

第一節「三間仏殿の沿革」では、三間仏殿 20 棟の所属する寺の歴史及び建物の建立年代について個々に紹介する。

第二節「平面寸法と柱間配置」では、三間仏殿 20 棟の桁行総長と梁行総長を比較し、全体規模を把握する。次に、桁行、梁行方向の柱配列状況をまとめ、それらの中間と両脇間寸法の比例を取り

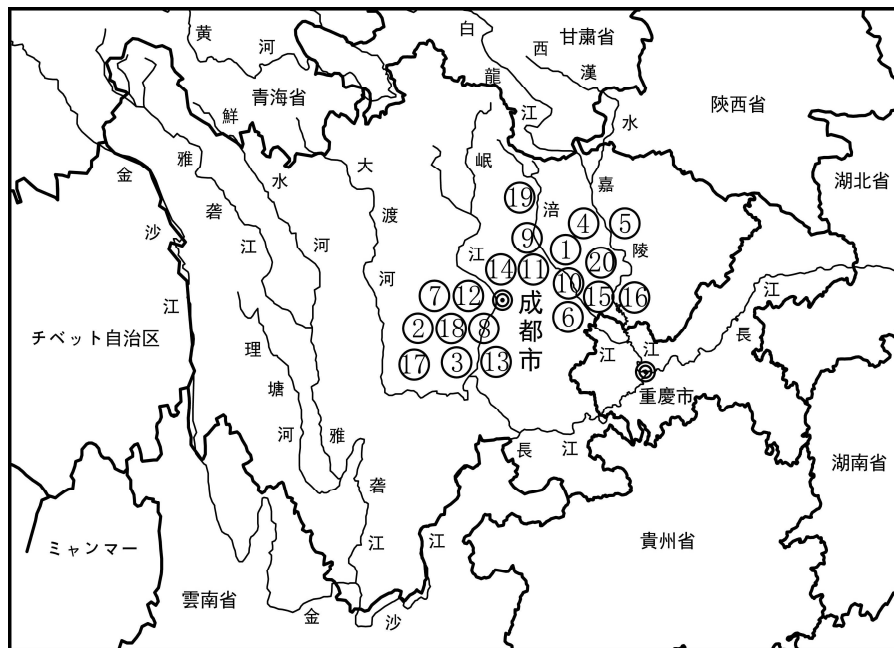


図 3-1 三間仏殿分布図

出し、各間口の寸法を検討する。さらに、各建物の外観について、屋根形状、屋根材、垂木形状等の特徴をまとめ、それらの共通点を取り出す。

第三節「間架と架構システム」では、建物全体の構造形式を把握し、庇部分と主屋部分を分けて検討し、それぞれの間架及び庇部分と主屋部分の構造上の仕組みについて分類し、さらに、それらの構造形式を『营造法式』の内容と比較し、両者の共通性について検討する。

第四節「斗栱と中備」では、三間仏殿 20 棟の正側背面の柱上斗栱と中備斗栱について、手先数、詰組数を分類し、それらの斗栱配列の傾向を纏め、さらに、斗栱の尾垂木、配列に関する特徴について検討する。

第五節「登梁と尾垂木尻」では、三間仏殿 20 棟の屋根裏の構造材である曲材（登梁）について検討し、庇部部分の屋根裏の構造材となる斗栱の尾垂木尻に着目し、それらの形状及び構造上の役割について検討する。

第六節「結び」では、四川省の元・明代の三間仏殿 20 棟について、平面、構造、意匠の特徴をまとめ、この地域の特質を指摘している。



### 3-1. 三間仏殿の沿革

本節では、20棟（表3-1）の寺廟と建物の沿革を一瞥しておきたい。

1. 花林寺は、唐代に創立され、明万暦年間（1573～1620）に修復が行われ、当初は敷地内に前殿、大殿と左右廂房で構成した四合院式の配置であったとされるが<sup>Ⅲ-6)</sup>、現在は大殿のみ残されている。「四川塩亭新發現の元代建築花林寺大殿」<sup>Ⅲ-7)</sup>によると、大殿は元至大四年（1311）の建立とされる。
2. 青龍寺は、寺内石鼓の銘文により元至正四年（1344）の創建とされるが、大殿大虹梁の墨書によると、唐龍朔癸亥年（663）に創立した可能性がある<sup>Ⅲ-8)</sup>。寺内に文昌宮、大殿、鐘樓、鼓樓等の建物があったが、現在では大殿のみ残される。大殿は大虹梁に「□□□□□年歳次癸亥二月仲春下刻朔二十六日明星黃道吉辰重新豎立青龍寺寶殿一所」と記され、大殿は元至治三年（1323）の建立とされる<sup>Ⅲ-9)</sup>。
3. 報恩寺は、唐代の創立とされ、元泰定四年（1327）に再建され、清乾隆二十六年（1761）に修復が行われ、現在は敷地内に三清殿と右廂房のみ残され、三清殿は虹梁の墨書によると、元泰定四年（1327）の建立である<sup>注1)</sup>。
4. 永安寺は、唐代の創立とされ、北宋治平年間（1064～67）、元至正年間（1341～67）、明嘉靖年間（1522～66）、清代に修復が行われている。現在、境内に山門、觀音殿、大殿、東西廂房等建物が残されており、大殿は大虹梁に「大元至順四年太歲癸酉九月壬辰朔二十八日乙未当院至盟比丘寶專專管修造小師悟一同師第□□□□□□囊資□改鼎新創」とあり、元至順四年（1333）の建立とされる<sup>Ⅲ-10)</sup>。
5. 五龍廟は、唐代の創立とされ、碑文に「五龍廟乃歷史悠久古老文物之寶庫始□於太元至正三年歲次癸未玉今已有八百多年也」とあり、元代の至正三年（1343）に再建された。境内には、山門、劇樓、左右廂房、文昌閣等の建物があったが、現在は、至正三年（1343）建立の文昌閣のみの残される<sup>注2)</sup>。
6. 百福院は、創立年代が不詳であり、境内には前殿、後殿、廂房等建物があったとされるが、現在は前殿のみ残される。前殿は、『中国文物地図集・四川分冊（中）』<sup>注3)</sup>によると明洪武年間（1368～1398）の建立である。
7. 磐陀寺は、唐代の創立、明洪武二十五年（1392）に再建され、正統二年（1437）に修復が行われ、現在は明洪武二十五年（1392）に建立された大殿が残される<sup>注4)</sup>。
8. 梓潼宮は、漢代に存在したと伝え、明永樂二年（1404）に再建され、明代の清嘉慶十一年（1806）に再建され、その後修復されたものである<sup>注5)</sup>。
9. 開禧寺は、明永樂年間（1403～1424）の創立<sup>Ⅲ-10)</sup>、清道光二十五年（1845）に修復され<sup>注6)</sup>、当初は文昌殿、接引殿、千手觀音殿等の建物があったが、現在は大雄殿のみ残される。大雄殿は虹梁の墨書によると、明永樂四年（1406）の建立である<sup>注7)</sup>。
10. 饒益寺は、明永樂九年（1411）の創立、現在は山門、大雄寶殿、觀音殿、眼光殿等の建物が残され、大雄寶殿は明永樂九年（1411）の建立である<sup>注8)</sup>。
11. 尊勝寺は、南宋嘉泰年間（1201～1024）の創立、明永樂十三年（1415）、清康熙二十六年（1687）に

再建され、現在は大雄宝殿、藏経楼、関爺殿等の建物が残され、大雄宝殿は明永楽十三年（1415）の建立である<sup>注9）</sup>。12. 甘泉寺は、明宣徳九年（1434）の創立、現在は同年に建立された大雄宝殿のみ残される<sup>注10）</sup>。13. 龍居寺は、創立年代が不祥であるが、明洪武十九年（1386）に再建され、現在

表3-1 三間仏殿平面寸法表（左）

No	寺院名	建築名	所在地	建立年代	桁行× 梁行	桁行 総長(m)	梁行 総長(m)	桁行(m)			前方	
								左脇間	中間	右脇間		
1	花林寺	大殿	綿陽市	元・1311	3×4	10.98	10.95	2.04	6.80	2.14	2.20	
						1.00	1.00	1.00	3.33	1.05	1.00	
2	青龍寺	大殿	雅安市	元・1323	3×4	15.10	14.95	3.65	7.77	3.68	3.59	
						1.00	0.99	1.00	2.13	1.01	1.00	
3	報恩寺	三清殿	眉山市	元・1327	3×4	12.65	13.52	2.96	6.70	2.99	4.28	
						1.00	1.07	1.00	2.26	1.01	1.00	
4	永安寺	大殿	南充市	元・1333	3×4	15.19	15.41	3.89	7.50	3.80	2.35	
						1.00	1.01	1.00	1.93	0.98	1.00	
5	五龍廟	文昌閣	南充市	元・1343	3×3	9.65	9.66	2.80	4.12	2.73	2.10	
						1.00	1.00	1.00	1.47	0.98	1.00	
6	百福院	前殿	遂寧市	明・1368	3×3	12.05	10.70	2.49	7.08	2.49	2.64	
						1.00	0.89	1.00	2.85	1.00	1.00	
7	磐陀寺	大殿	邛崃市	明・1392	3×3	10.08	10.05	2.08	5.92	2.08	3.46	
						1.00	1.00	1.00	2.85	1.00	1.00	
8	梓潼宮	大殿	眉山市	明・1404	3×4	12.39	12.50	2.63	7.13	2.63	2.63	
						1.00	1.01	1.00	2.71	1.00	1.00	
9	開禧寺	大雄殿	綿陽市	明・1406	3×4	13.07	13.53	2.63	7.81	2.63	4.81	
						1.00	1.04	1.00	2.97	1.00	1.00	
10	饒益寺	大雄宝殿	遂寧市	明・1411	3×3	12.87	11.74	3.15	6.48	3.24	3.24	
						1.00	0.91	1.00	2.06	1.03	1.00	
11	尊勝寺	大雄宝殿	綿陽市	明・1415	3×4	14.30	14.62	3.75	6.78	3.77	3.78	
						1.00	1.02	1.00	1.81	1.01	1.00	
12	甘泉寺	大雄宝殿	眉山市	明・1434	3×4	12.65	12.70	2.81	7.03	2.81	2.81	
						1.00	1.00	1.00	2.50	1.00	1.00	
13	龍居寺	中殿	広漢市	明・1447	3×3	10.52	10.50	2.65	5.22	2.65	2.65	
						1.00	1.00	1.00	1.97	1.00	1.00	
14	慧嚴寺	大雄宝殿	遂寧市	明・1447	3×3	11.38	10.77	2.63	6.04	2.71	2.72	
						1.00	0.95	1.00	2.30	1.03	1.00	
15	宝梵寺	大雄宝殿	遂寧市	明・1450	3×4	12.63	12.41	2.63	7.35	2.65	2.64	
						1.00	0.98	1.00	2.79	1.01	1.00	
16	河沙寺	大雄宝殿	成都市	明・1458	3×4	13.30	11.20	3.50	6.30	3.50	2.80	
						1.00	0.84	1.00	1.80	1.00	1.00	
17	観音寺	毘盧殿	成都市	明・1462	3×3	10.54	10.86	2.24	6.04	2.26	3.82	
						1.00	1.03	1.00	2.70	1.01	1.00	
18	開善寺	正殿	雅安市	明・1481	3×3	13.88	14.03	3.52	6.88	3.48	3.56	
						1.00	1.01	1.00	1.95	0.99	1.00	
19	豆叩寺	正殿	綿陽市	明・前期	3×3	12.20	12.28	3.00	6.20	3.00	3.09	
						1.00	1.01	1.00	2.07	1.00	1.00	
20	文星廟	正殿	綿陽市	明	3×5	12.94	12.90	3.94	5.09	3.91	2.18	1.79
						1.00	1.00	1.00	1.29	0.99	1.00	0.82

は山門、観音殿、中殿、蔵経楼等が残され、中殿は明正統十二年（1447）の建立である<sup>注11</sup>。14. 慧巖寺は、明正統十二年（1447）の創立、現在は大雄宝殿と左廂房が残され<sup>注12</sup>、大雄宝殿は、明正統十二年（1447）の建立である<sup>注13</sup>。15. 宝梵寺は、北宋の創立、北宋治平元年（1064）に宝梵寺と改

表3-1 三間仏殿平面寸法表（右）

梁行（側柱）(m)			梁行（内柱）(m)										架椽数	
中間		後方	前方			中間				後方				
3.30	3.28	2.18	2.20			1.65	1.65	1.64	1.64	2.18		6架		
1.50	1.49	0.99	1架			2架		2架		1架				
3.91	3.83	3.62	1.80	1.80	1.96	1.96	1.92	1.92	1.81	1.81	8架			
1.09	1.07	1.01	2架			2架		2架		2架				
3.09	3.09	3.06	1.43	1.43	1.43	1.25	1.25	1.23	1.23	1.23	1.53	1.53	10架	
0.72	0.72	0.71	3架			2架		3架		2架				
7.18	3.61	2.27	2.35			1.85	1.85	1.74	1.74	1.81	1.81	2.27		8架
3.06	1.54	0.97	1架			3架		3架		1架				
5.53		2.03	2.10			1.40	1.40	1.37	1.37	2.03		6架		
2.63		0.97	1架			2架		2架		1架				
5.47		2.59	1.32	1.32	0.90	0.90	0.90	0.90	1.87	2.59		8架		
2.07		0.98	2架			2架		3架		1架				
4.52		2.07	1.15	1.15	1.15	1.51		1.51	1.51	1.04	1.04	6架		
1.31		0.60	3架			1架		2架		2架				
3.62	3.62	2.63	1.32	1.32	1.81	1.81	0.90	0.90	1.32	1.32	8架			
1.38	1.38	1.00	2架			2架		2架		2架		6架		
3.06	3.11	2.55	2.55	2.26	1.96		1.96	2.26	2.55					
0.64	0.65	0.53	2架			1架		2架		1架		8架		
5.29		3.21	1.62	1.62	1.33	1.33	1.33	1.33	1.61	1.61				
1.63		0.99	2架			2架		2架		2架		8架		
3.59	3.53	3.72	1.89	1.89	1.80	1.80	1.77	1.77	1.86	1.86				
0.95	0.93	0.98	2架			2架		2架		2架		8架		
3.54	3.54	2.81	1.41	1.41	1.77	1.77	1.77	1.77	1.41	1.41				
1.26	1.26	1.00	2架			2架		2架		2架		8架		
5.20		2.65	1.45	1.20	1.30	1.30	1.30	1.30	1.20	1.45				
1.96		1.00	2架			2架		2架		2架		8架		
5.35		2.70	1.36	1.36	1.34	1.34	1.34	1.34	1.35	1.35				
1.97		0.99	2架			2架		2架		2架		6架		
3.63	3.63	2.52	2.64			1.81	1.81	1.81	1.81	2.52				
1.37	1.37	0.95	1架			2架		2架		1架		8架		
2.80	2.80	2.80	1.40	1.40	1.40	1.40	1.40	1.40	1.40	1.40				
1.00	1.00	1.00	2架			2架		2架		2架		6架		
4.80		2.24	1.91	1.91	1.60		1.60	1.60	2.24					
1.26		0.59	2架			1架		2架		1架		8架		
6.92	3.55	1.78	1.78	1.73	1.73	1.73	1.73	1.78	1.78					
1.94		1.00	2架			2架		2架		2架		8架		
6.10		3.09	1.88	1.21	1.60	1.45	1.45	1.60	1.21	1.88				
1.97		1.00	2架			2架		2架		2架		10架		
5.04		1.79	2.10	1.09	1.09	1.79	1.26	1.26	1.26	1.26	1.79		1.05	1.05
2.31		0.82	0.96	3架			2架		2架		3架			

称され、明正統二年（1437）に修復が行われ、景泰元年（1450）に増築された。現在は天王殿、大雄宝殿、毘廬殿と左右廂房が残され、大雄宝殿では明景泰元年（1450）の建立である<sup>注14</sup>。16. 河沙寺は、南宋淳熙十六年（1198）の創立、明洪武三十一年に修復が行われ、現在は明天順二年（1458）に再建された大雄宝殿のみ残される<sup>注15</sup>。17. 観音寺は、南宋淳熙年間（1174～1188）の創立、明代に再建され、現在は山門、接引殿、弥勒殿、毘廬殿、観音殿等建物が残され、毘廬殿は明天順六年（1462）の建立である<sup>注16</sup>。18. 開善寺は、創立年代が不祥、現在は明成化十七年（1481）に建立された正殿のみ残される<sup>注17</sup>。19. 豆叩寺は、宋代の創立、明代に再建され、現在は明代前期に建立された正殿のみ残される<sup>注18</sup>、<sup>注19</sup>。20. 文星廟は、創立年代が不祥であり、当初は正殿、偏殿、前殿、後殿等の建物があったが、現在は明代の建立とされる正殿のみ残される<sup>注20</sup>、<sup>注21</sup>。

### 3-2. 平面寸法と柱間配置

三間仏殿 20 棟の平面は、桁行 3 間、梁行 3 間のものが 9 棟、桁行 3 間、梁行 4 間のものが 10 棟、桁行 3 間、梁行 5 間のものが 1 棟ある (図 3-2)。規模についてみると、最大規模の 4. 永安寺大殿<sup>Ⅲ-10)</sup>は桁行 3 間 (15.19m)、梁行 4 間 (15.41m) であり、最小規模の 5. 五龍廟文昌閣は桁行 3 間 (9.65m)、梁行 3 間 (9.66m) であり、全体の平均的な規模は、桁行総長 12.42m、梁行総長 12.26m 程となる。一方、桁行総長と梁行総長の分布図 (図 3-3) から見ると、三間仏殿の規模は 1 辺を 12m~15m とするものが一般的であり、平面はほぼ正方形であることが分かる。但し、6. 百福院前殿、10. 饒益寺大雄宝殿、16. 河沙寺大雄宝殿は桁行と梁行の総長比が 1 : 0.9 程であり、桁行が梁行より若干広くなっている。

柱間寸法<sup>注22)</sup>についてみると (表 3-1)<sup>注23)</sup>、正面柱間 (桁行) では脇間 (左脇間) と中間の比率<sup>注24)</sup>が 1 : 1.29 (20. 文星廟正殿) から 1 : 3.25 (1. 花林寺大殿<sup>Ⅲ-7)</sup>) まであり、平均は 1 : 2.28 である。20 棟の正面柱間についてみると、脇間 : 中間の比は、文星廟正殿と五龍廟文昌閣の 2 棟では 1 : (1.29~1.47)、河沙寺大雄宝殿、3. 報恩寺三清殿他の 9 棟では 1 : (1.80~2.26)、12. 甘泉寺大雄宝殿、8. 梓潼宮大殿他の 3 棟では 1 : (2.50~2.71)、15. 宝梵寺大雄宝殿、花林寺大殿他の 5 棟では 1 : (2.79~3.25) であり、中間寸法は脇間寸法の約 1.38 倍 (2 棟)、約 2.0 倍 (10 棟)、約 2.6 倍 (3 棟)、約 3.0 倍 (5 棟) となっており<sup>注25)</sup>、中間を脇間の 2.0 倍から 3.0 倍程と広くとるものが多い点が大きな特徴になっている<sup>注26)</sup>、<sup>注27)</sup>。

側面柱間 (梁行) は、3 間が 9 棟、4 間が 10 棟、5 間が 1 棟あり、3 間乃至 4 間とするものが一般的である。まず、側面柱間 3 間では、正面柱間と同様にとるものが五龍文昌閣、百福院前殿他の 7 棟あり、側面前方柱間を広めたものに 7. 磐陀寺大殿、17. 観音寺毘盧殿の 2 棟がある。これらの前方間 : 中間 (2 間分) : 後方間の比率は、前者では 1 : (1.63~2.63) : 1 であり、後者では 1 : (1.26~1.31) : (0.59~0.60) であり、正面柱間と比べて中間が狭くなっている。次に、側面柱間 4 間では、正面柱間と同様に中間を広くとって 2 等分するものが花林寺大殿、2. 青龍寺大殿<sup>Ⅲ-9)</sup>他の 7 棟あり、側面前方間を広く取り、中間を 2 等分したものが報恩寺三清殿、9. 開禧寺大雄殿の 2 棟ある。これらの前方間 : 中間 (2 間分) : 後方間の比率は、前者では 1 : (1.88~2.99) : (0.98~1.01) であり、後者では 1 : (1.29~1.44) : (0.53~0.71) である。その他、永安寺大殿の側面は 1 : 4.60 : 0.97 である。このように、側面柱間においては中間を 3 間のものでは 2.0 倍から 2.5 倍程、4 間のものでは 1.5 倍から 3.0 倍程とするものが多いことが分かる。

一方、三間仏殿の正面柱間に着目して (図 3-2) を見ると、元代の花林寺大殿、永安寺大殿、五龍

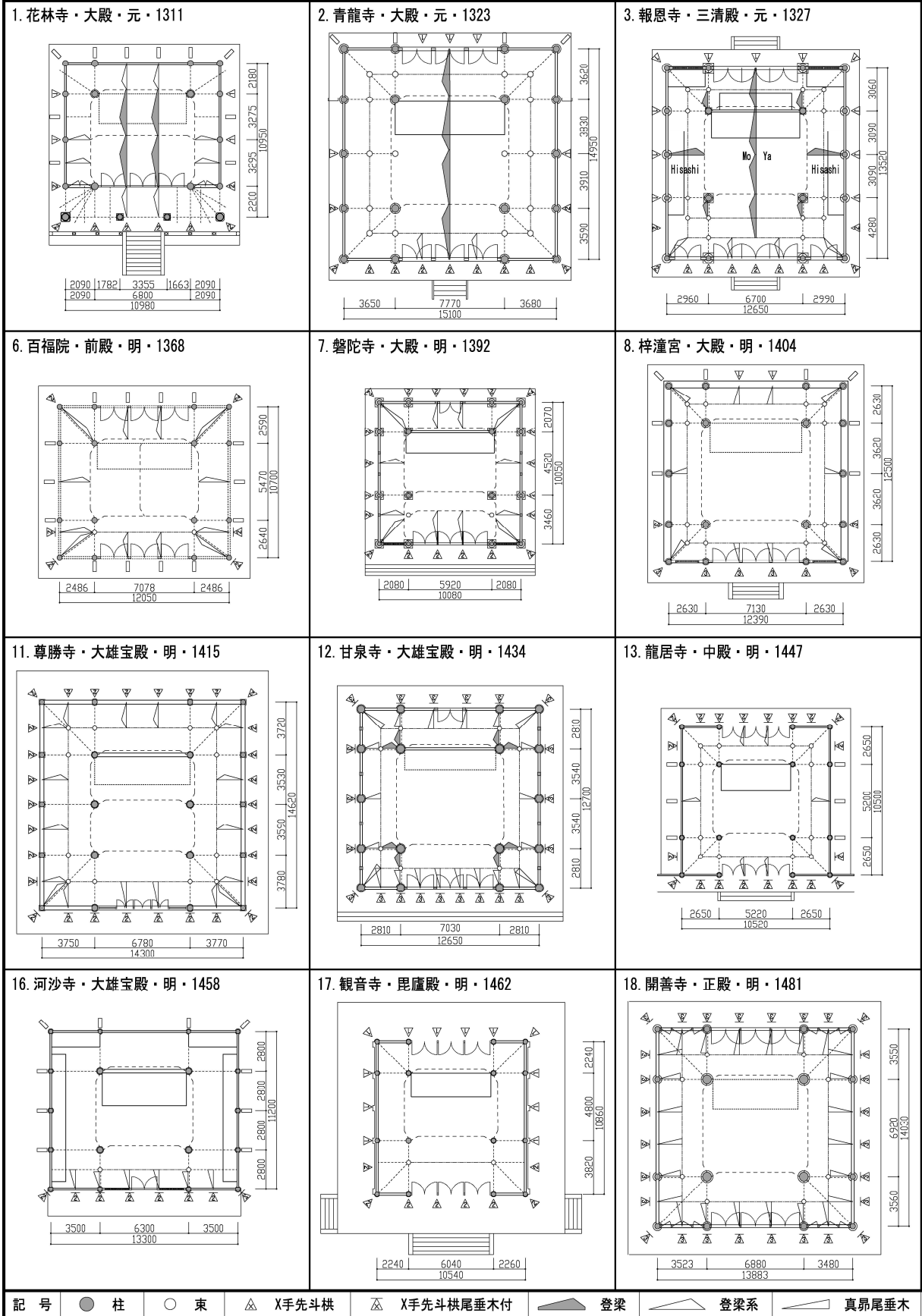


图 3-2 三間仏殿平面図 (左)

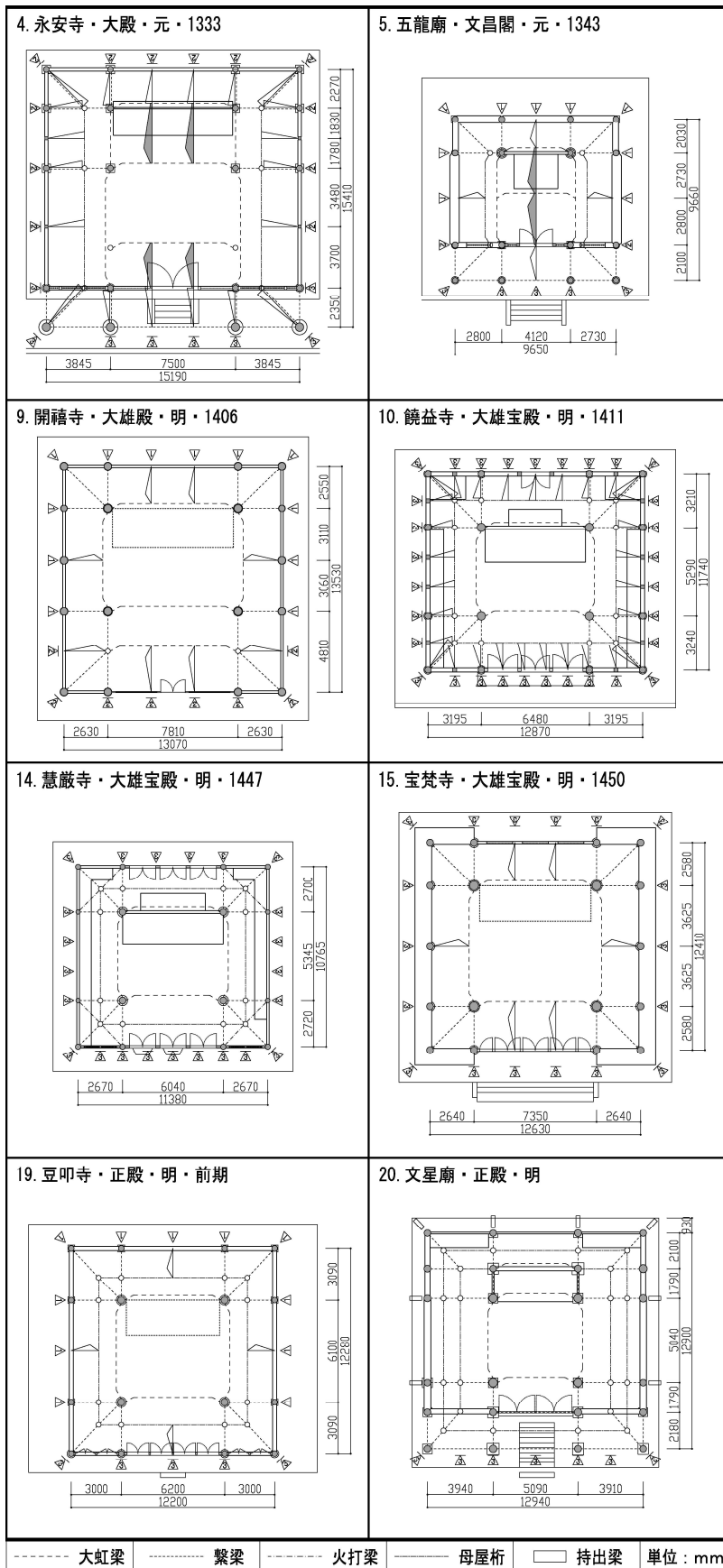


図3-2 三間仏殿平面図(右)

廟文昌閣の3棟と明代の文星廟正殿1棟では正面柱間をいづれも吹放しとしており、元代の遺構では、正面柱間を吹放す傾向が認められ、三間仏殿の正面を開放させた点に特徴がある。

ここで、三間仏殿20棟の外観について眺めておきたい(表3-2, 図3-2)。屋根は、入母屋造・本瓦葺が19棟あり(河沙寺大雄宝殿のみ単層切妻造)、正面隅部の軒反りは緩やかである(写真3-1, 写真3-2)。垂木は現状で見る限り、一軒の場合、地垂木を平行垂木とし、隅のみ扇垂木とするものが3棟ある(写真3-3)。二軒の場合、地垂木と飛縁垂木のいずれも平行垂木とするものが10棟(写真3-4)、地垂木と飛縁垂木の隅を扇垂木とするものが5棟あり、開善寺正殿と甘泉寺大雄宝殿が地垂木の隅部を扇垂木、飛縁垂木を平行垂木とする。垂木の断面形状は、厚板状の長方形とするものが15棟あり、正方形とするものが3棟、丸形とするものが2棟ある。鼻隠板

については、飛縁垂木先端に設置するものが14棟、設置しないものが6棟あり、地垂木先端に設置するものが13棟、設置しないものが7棟ある。壁についてみると、大壁式<sup>注28)</sup>が3棟、真壁式<sup>注29)</sup>が17棟であり、基壇と礎石についても、基壇をもつものが18棟あるが、いずれも2尺以下と低く、礎盤も石製の円形型とするものが19棟あるが、0.5尺弱の高さで彫刻も少なく簡素なものである。なお、内部では、一つ空間とされ、床は土間式とし、上部空間を化粧屋根裏とするが、中央に格天井を張るものが半数近くある。

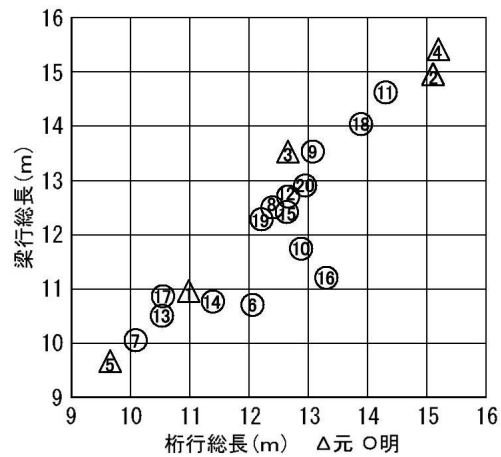


図3-3 三間仏殿桁行・梁行総長分布図



写真3-1 2. 青龍寺大殿・正面外観



写真3-2 7. 磬陀寺大殿・正面外観



写真3-3 5. 五龍廟文昌閣・扇垂木



写真3-4 11. 尊勝寺大雄宝殿・平行垂木



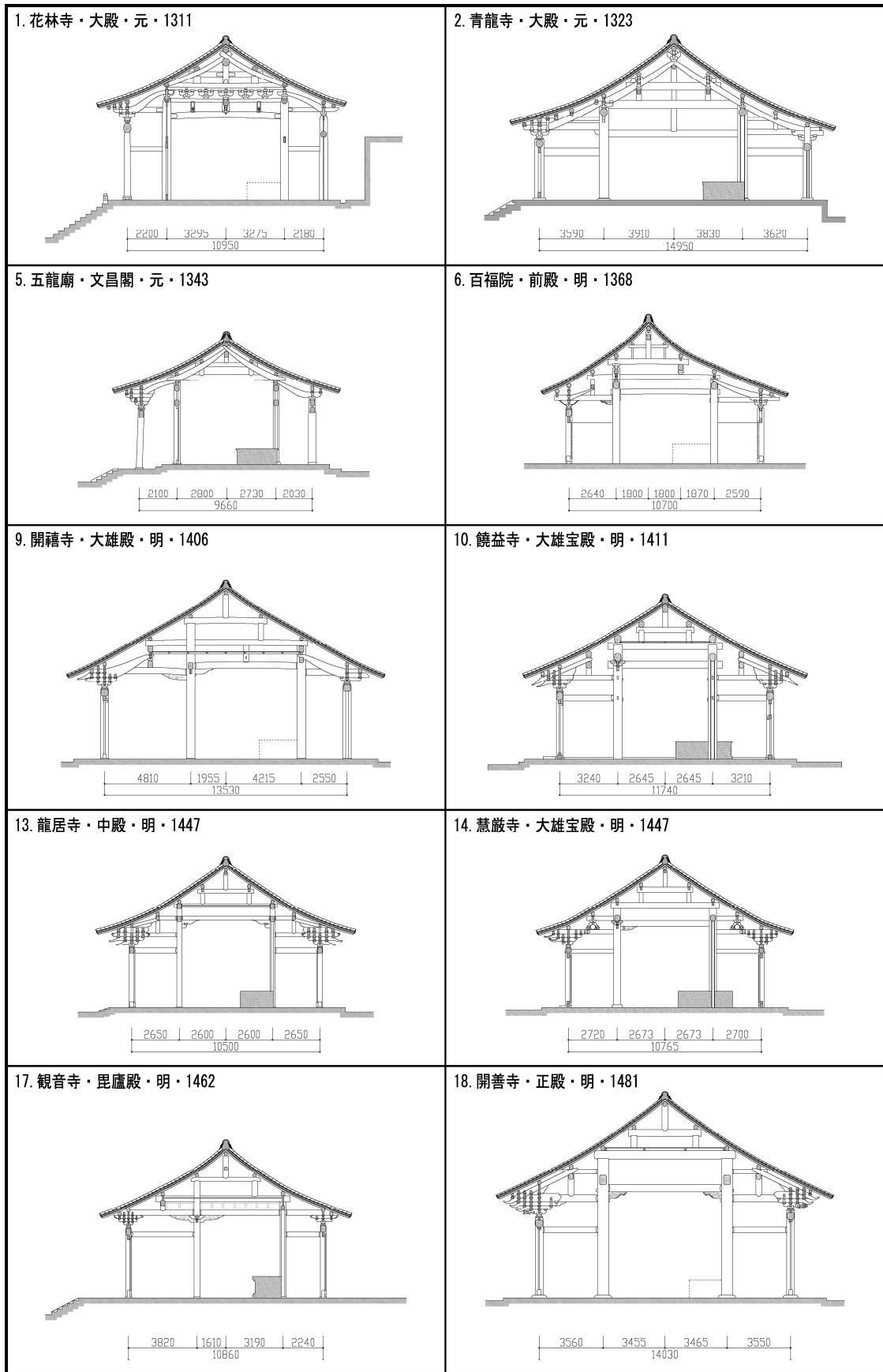
### 3-3. 間架と架構システム

中国の寺廟建築の構造形式には、「抬梁式」と「穿闘式」の二種類があり、「抬梁式」は華北・華中地方に多く、柱上に斗栱をおき、梁と束を交互に積み上げ、梁の両端に母屋桁を置いて屋根を支える構造であり、「穿闘式」は華南地方に多く、柱に穴を穿って貫を通して横方向を固め、斗栱も差肘木斗栱として梁を用いず、柱頂に母屋桁を載せて屋根を支える構造である。そこで、三間仏殿 20 棟の平面図に斗栱、虹梁、梁組等を表示すると（図 3-2）のようになる。これを見ると、20 棟の遺構は穿闘式の影響が認められるものの基本的に抬梁式であり、華北・華中地方の架構形式に属していることが分かる。さらに、この中から内部空間の特徴を探ってみると、20 棟の内 18 棟は主屋中央に主屋柱 4 本を立て（4. 永安寺大殿、11. 尊勝寺大雄宝殿<sup>III-12</sup>は 6 本）、周囲に柱間 1 間の庇を巡らしている。そこで、主屋と庇の架構形式を把握するため、堂内を庇部分と主屋部分に分け、「間架（母屋桁の間隔）」と側柱の斗栱上部に渡される繫梁の架構システムについて検討してみたい<sup>注 30</sup>。

#### 1) 庇部分について

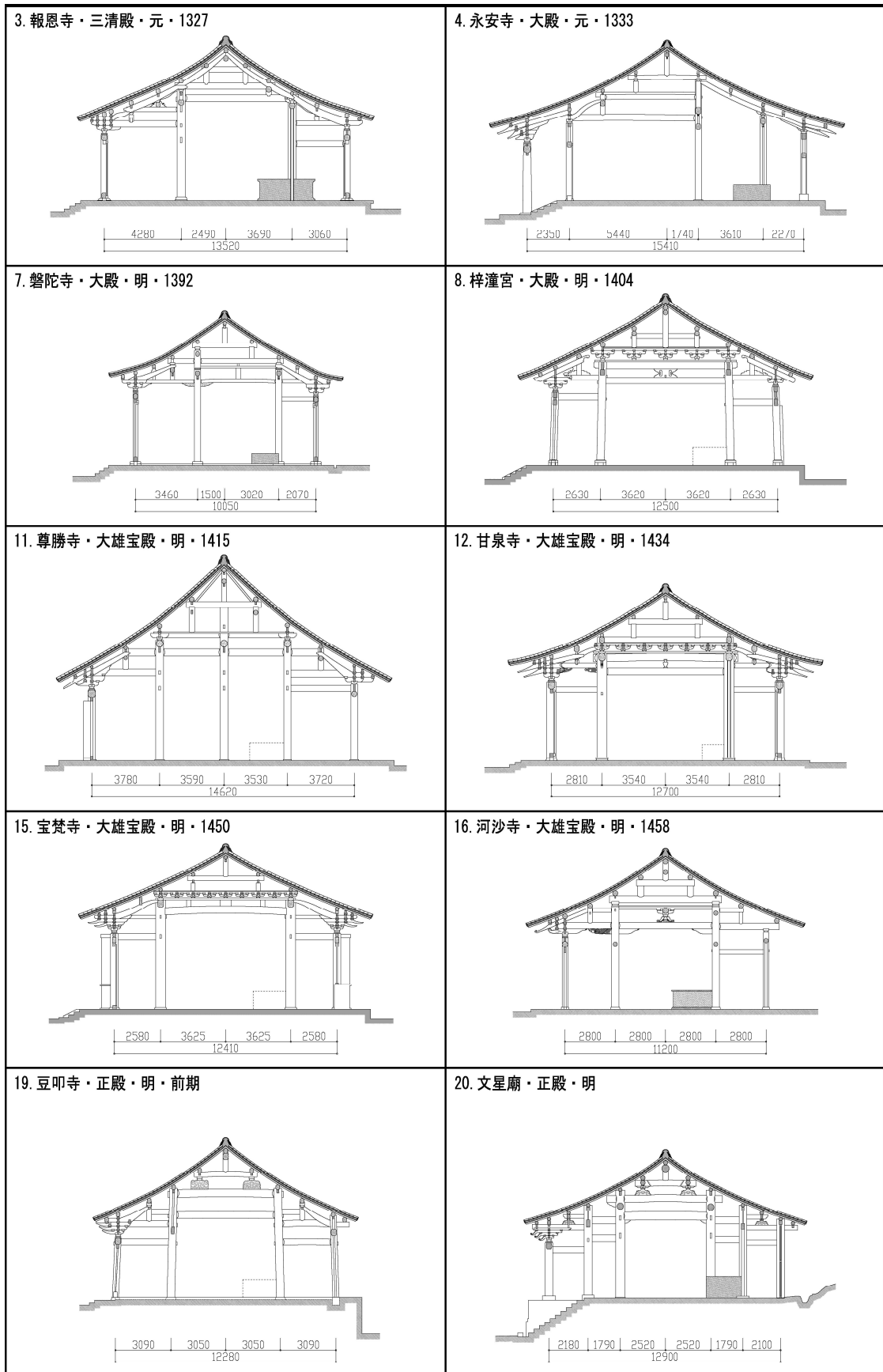
庇屋根を支える「間架」を基準とし、母屋桁の一つの間隔を一架として、母屋桁を支える架構システムを検討することとし、それらの規模を分類してみると、庇一架系（四面一架、正背面一架・両側面二架、正面二架・両側背面一架）、庇二架系（四面二架、正面三架・両側背面二架）と庇三架系（四面三架）の 3 種に分けられる<sup>注 31</sup>。

(1) 庇一架系には 3 パターンある。四面一架では、主屋柱と隅側柱が真隅（45° 方向）となるため、主屋柱から側柱に桁行、梁行、隅行の 3 方向（写真 3-5）に繫梁を架けており（1. 花林寺大殿、15. 宝梵寺大雄宝殿）、正背面一架・両側面二架では、振れ隅となるため、主屋柱から側柱に桁行と梁行方向に繫梁を架け、桁行繫梁の内側三分の一程の位置に束を立て、側柱に隅行方向の繫梁を架け、束上に梁行方向の母屋桁を通し、屋根を支えている（4. 永安寺大殿、5. 五龍廟文昌宮）（写真 3-6）。正面二架・両側背面一架とするものは 5 棟ある（6. 百福院前殿、7. 磐陀寺大殿、9. 開禧寺大雄殿、16. 河沙寺大雄宝殿、17. 観音寺毘盧殿）。これらは、後方主屋柱では側柱に桁行、梁行、隅行の 3 方向に繫梁を架け（磐陀寺大殿・河沙寺大雄宝殿は桁行、梁行の 2 方向）、前方主屋柱では側柱に桁行、梁行の 2 方向に繫梁を架けており、梁行の繫梁の内方に桁行方向の大虹梁を架けるもの（磐陀寺大殿、開禧寺大雄殿）と無いもの（百福院前殿、河沙寺大雄宝殿、観音寺毘盧殿）がある。さらに、梁行の繫梁の略中央に束を立て、桁行、隅行の 2 方向に繫梁を渡すもの（観音寺毘盧殿）、隅行方向のみなもの（百福院前殿、開禧寺大雄殿）、梁行方向のみなもの（河沙寺大雄宝殿）があり、いずれもその交点に束を立て、その上に桁行方向の母屋桁を通し、屋根を支えている。



單位：mm

圖 3-4 三間仏殿梁行断面図（左）



單位：mm

图 3-4 三間仏殿梁行断面图（右）

(2) 庇二架系には2パターンある。四面二架では主屋柱から側柱の桁行、梁行、隅行方向に繫梁を架け、3方向の繫梁の中央に束を立て、上に母屋桁を通し、屋根を支えている(2. 青龍寺大殿、8. 梓潼宮大殿、10. 饒益寺大雄宝殿、11. 尊勝寺大雄宝殿、12. 甘泉寺大雄宝殿<隅行方向繫梁無し>、13. 龍居寺中殿、14. 慧巖寺大雄宝殿、18. 開善寺正殿<隅行方向繫梁無し>、19. 豆叩寺正殿)(写真3-7)。正面三架・両側背面二架では、後方主屋柱から側柱の桁行、梁行、隅行の3方向に繫梁を架け、繫梁の中央に束を立て、その上に母屋桁を通し、屋根を支え、前方主屋柱から側柱の桁行、梁行に繫梁を架け、桁行方向の繫梁中央に束を一具、梁行方向の繫梁三等分の位置に束一具を立て、



写真3-5 15. 宝梵寺大雄宝殿・柱上繫梁  
(庇一架系：四面一架)



写真3-6 4. 永安寺大殿・柱上繫梁  
(庇一架系：正背面一架・両側面二架)



写真3-7 2. 青龍寺大殿・柱上繫梁  
(庇二架系：四面二架)



写真3-8 20. 文星廟正殿・柱上繫梁  
(庇三架系：四面三架)



写真3-9 7. 磐陀寺大殿・主屋三架



写真3-10 3. 報恩寺三清殿・主屋五架

上に母屋桁を通し、屋根を支えるものである（3. 報恩寺三清殿）。

(3) 庇三架系には1パターンある。四面三架では、主屋柱から両外側の桁行方向に繫梁を架け、繫梁中央及び内から外側四分の三程の位置に束を立て、外側梁行方向の柱に繫梁を架け、更にこの柱から桁行、梁行方向に繫梁を架け、繫梁の中央に彫刻材を入れ、その束上に母屋桁を通し、屋根を支えるものが1棟ある（20. 文星廟正殿）（写真3-8）。なお、これらの架構システムにおける繫梁上の束には、安定を計るための小梁が主屋柱から渡されている。

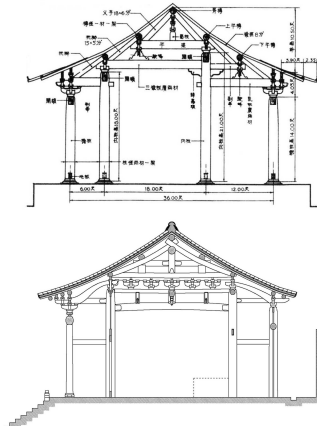
## 2) 主屋部分について

20棟の梁行の断面図を一覧すると（図3-4）のようになる。これを基に、庇部分と同様に間架による分類を行うと、主屋では三架系、四架系、五架系の3種に分けられる。主屋三架系は3棟（7. 磐陀寺大殿、9. 開禧寺大雄殿、17. 観音寺毘盧殿）あり（写真3-9）、これらの断面構成について（図3-2）と（図3-4）を眺めると、いずれも主屋中央の棟木を中心とし、前方一架・後方二架の構成となるため、前後の主屋柱が建物の中央軸に対し、前後対称とはならない。主屋四架系は15棟（1. 花林寺大殿、2. 青龍寺大殿、5. 五龍廟文昌閣他）あり、この内前方二架・後方二架の構成とするものが14棟と最も多く、4. 永安寺大殿のみが前方三架・後方一架の構成とする。主屋五架系は前方二架・後方三架とするもので2棟（3. 報恩寺三清殿、6. 百福院前殿）ある（写真3-10）。このように、四川省の三間仏殿の間架と架構は、庇二架系、主屋四架系のものが多く、主屋の主屋柱から側柱に架けて、桁・梁・隅行3方向の繫梁を渡し、振れ隅となるものでは、繫梁上に束を立てて母屋桁を支える架構形式が一般的であることが分かる。

一方、三間仏殿20棟の構造について、『营造法式』<sup>III-13</sup>大木作の側様図と対比させ（図3-5）、主屋と庇から見た断面図を基に間架と柱の本数を示すと、「六架椽屋・四柱」が5棟（花林寺大殿、五龍廟文昌閣、開禧寺大雄殿、宝梵寺大雄宝殿と観音寺毘盧殿）、「八架椽屋・四柱」が11棟（青龍寺大殿、百福院前殿、磐陀寺大殿、梓潼宮大殿、饒益寺大雄宝殿、甘泉寺大雄宝殿、龍居寺中殿、慧嚴寺大雄宝殿、河沙寺大雄宝殿、開善寺正殿、豆叩寺正殿）、「八架椽屋・五柱」が1棟（尊勝寺大雄宝殿）、「八架椽屋・六柱」が1棟（永安寺大殿）、「十架椽屋・四柱」が1棟（報恩寺三清殿）、「十架椽屋・六柱」が1棟（文星廟正殿）ある。このように「六架椽屋・四柱」と「八架椽屋・四柱」が一般的であるが、断面寸法を見ると（図3-4）、堂内の一架椽の寸法が統一されておらず、庇部分では、大木作の六架椽屋側様図に見られる二重梁（筈牽・乳栿）と斜材（拖脚）を用いる方式は姿を消し、大瓶束で母屋桁を支えるもの、斗栱から内方に延びる尾垂木尻で母屋桁を支える方式が主流になっており、四川省の三間仏殿の架構システムは宋代の木造の伝統を保ちつつ、元・明代にはその姿を変えて、固有の構造形式を形成したとみられる。

六架椽屋

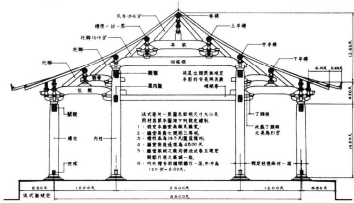
四柱



1. 花林寺大殿

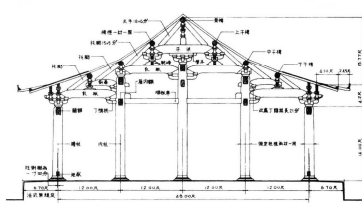
八架椽屋

四柱



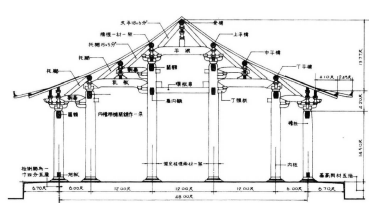
2. 青龍寺大殿

六柱



1. 尊勝寺大雄宝殿

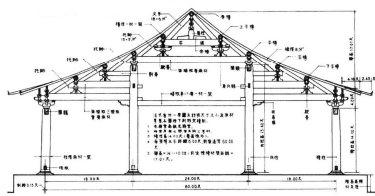
八柱



4. 永安寺大殿

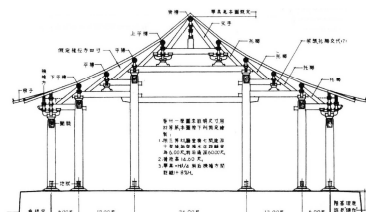
十架椽屋

四柱



3. 報恩寺三清殿

十柱



20. 文星廟正殿

图 3-5 大木作側様图对比图

(出典：『营造法式注积(卷上)』明文書局 1984 年刊)

### 3-4. 斗栱と中備

斗栱は斗と栱（肘木）によって構成されるものであり、中国伝統的な木造建築の重要な要素である。三間仏殿 20 棟の斗栱を眺めると、大きな特徴が認められる。中国の寺廟建築において、華北・華中地方の抬梁式の伝統を引き継ぐ三間仏殿では、正側背 4 面に同一の斗栱を巡らすのが正統的な形式である。しかし、四川省の三間仏殿では三手先・二手先・一手先（出三斗を含む）・持出梁の 4 種類の斗栱を使い分けており、半数以上の遺構が斗栱配列を変えている点に特徴がある。そこで、全 20 棟の斗栱配列を一覧すると、次の 4 タイプに分類される（図 3-2, 表 3-2）。

1) のタイプは、正面柱上斗栱（付中備）に三手先、両側背面に三手先・二手先・一手先（出三斗を含む）・持出梁等を用いるもの（4. 永安寺大殿、8. 梓潼宮大殿、19. 豆叩寺正殿、20. 文星廟正殿）。2) のタイプは、正面柱上斗栱（付中備）に二手先、両側背面に二手先・一手先・持出梁等を用いるもの（1. 花林寺大殿、2. 青龍寺大殿、3. 報恩寺三清殿、5. 五龍廟文昌閣、6. 百福院前殿、9. 開禧寺大雄殿、16. 河沙寺大雄宝殿、17. 観音寺毘盧殿）。3) のタイプは、正側背 4 面の柱上斗栱（付中備）に三手先を用いるもの（10. 饒益寺大雄宝殿、12. 甘泉寺大雄宝殿、14. 慧巖寺大雄宝殿、15. 宝梵寺大雄宝殿、18. 開善寺正殿）。4) のタイプは、正側背 4 面柱上斗栱（付中備）に二手先を用いるもの（7. 磐陀寺大殿、11. 尊勝寺大雄宝殿）である。

このように、三間仏殿の斗栱配列には 4 面の斗栱を統一させるものと不統一とするものがあるが、後者は正面柱上斗栱に三手先・二手先を用い、両側背面の斗栱の手先を減じることで、正面性を高めている点では一致している。また、中備の配列についてみると、前述のように正面柱間では中間を脇間の 2 倍～3 倍と広くとるものが多いため、タイプ 1) では、両側背面の斗栱の手先を減じながらも、正面柱列中備には中間に 2 具乃至 1 具の詰組を入れるのが一般的であり、タイプ 2)・3)・4) では詰組を中間 4 具、脇間 1 具とするもの（饒益寺大雄宝殿、甘泉寺大雄宝殿）、中間 3 具、脇間 1 具とするもの（青龍寺大殿、報恩寺三清殿、慧巖寺大雄宝殿）などがあり、正面柱間に詰組斗栱を多用することで、正面性を一層高めている。

一方、尾垂木の使用についてみると、三手先では大半が擬似尾垂木<sup>注 32)</sup>を用い、前方に渦形の尾垂木端を突出させており（饒益寺大雄宝殿、甘泉寺大雄宝殿、慧巖寺大雄宝殿、宝梵寺大雄宝殿、開善寺正殿、豆叩寺正殿、文星廟正殿）、二手先でも半数程が擬似尾垂木を用い、渦形の尾垂木端を出している（開禧寺大雄殿、尊勝寺大雄宝殿、龍居寺中殿、河沙寺大雄宝殿）。しかし、元代の永安寺大殿では前面斗栱の尾垂木の先端を鋭角に切り出し、三段に連ねて前方に出すなど古式な真昂尾垂木<sup>注 33)</sup>を用いている点が注目される。

ここで、斗栱配列に三手先・二手先・一手先（出三斗を含む）・持出梁を採用したことで生じた2つの問題点について指摘しておきたい。1つ目は、斗栱を水平方向から眺めた場合、軒の出を支える斗栱の肘木の長さを調整する必要がある。三手先では柱真から軒の出を3列外に差し出すが、二手先・一手先では2列・1列となり、肘木が短くなるため、手先を減じた斗栱では肘木を長く延して、軒先の通し肘木を支える工夫を行っている（図3-6）。2つ目は、斗栱を垂直方向から眺めた場合、三手先・二手先・一手先・持出梁の斗栱の高さを調整する必要がある。そこで、三間仏殿の側面を眺めることとし、4つの事例（饒益寺大雄宝殿、五龍廟文昌閣、花林寺大殿、龍居寺中殿）を取り上げてみると（図3-7～10）、饒益寺大雄宝殿は、三手先を柱上と中備（中間2具、脇間1具）に等間隔に配しており、抬梁式の架構の一般的な斗栱配列としている（図3-7）。しかし、五龍廟文昌

3-2 三間仏殿意匠表（左）

No	寺院名	建築名	建立年代	屋根形状	屋根材	垂木								正面低柱
						地垂木			飛縁垂木			鼻隠板		
						断面型	隅部	平部	断面型	隅部	平部	地垂木	飛縁垂木	
1	花林寺	大殿	元・1311	入母屋	本瓦葺	正方形	平行	平行	正方形	平行	平行	—	○	○
2	青龍寺	大殿	元・1323	入母屋	本瓦葺	正方形	平行	平行	正方形	平行	平行	○	○	○
3	報恩寺	三清殿	元・1327	入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	○
4	永安寺	大殿	元・1333	入母屋	平瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	—	—	○
5	五龍廟	文昌閣	元・1343	入母屋	本瓦葺	丸棒形	扇形	平行	—	—	—	○	—	○
6	百福院	前殿	明・1368	入母屋	平瓦葺	正方形	扇形	平行	—	—	—	○	—	○
7	磐陀寺	大殿	明・1392	入母屋	平瓦葺	薄板形	平行	平行	薄板形	平行	平行	○	○	—
8	梓潼宮	大殿	明・1404	入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	○
9	開禧寺	大雄殿	明・1406	入母屋	平瓦葺	厚板形	扇形	平行	薄板形	扇形	平行	○	○	○
10	饒益寺	大雄宝殿	明・1411	入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	—
11	尊勝寺	大雄宝殿	明・1415	入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	—
12	甘泉寺	大雄宝殿	明・1434	入母屋	本瓦葺	薄板形	扇形	平行	薄板形	平行	平行	○	○	—
13	龍居寺	中殿	明・1447	入母屋	本瓦葺	厚板形	扇形	平行	厚板形	扇形	平行	—	○	○
14	慧巖寺	大雄宝殿	明・1447	入母屋	本瓦葺	薄板形	平行	平行	薄板形	平行	平行	—	○	—
15	宝梵寺	大雄宝殿	明・1450	入母屋	平瓦葺	厚板形	扇形	平行	薄板形	扇形	平行	—	○	—
16	河沙寺	大雄宝殿	明・1458	切妻	平瓦葺	薄板形	平行	平行	薄板形	平行	平行	—	—	○
17	観音寺	毘盧殿	明・1462	入母屋	本瓦葺	薄板形	扇形	平行	薄板形	扇形	平行	○	○	○
18	開善寺	正殿	明・1481	入母屋	平瓦葺	厚板形	扇形	平行	薄板形	平行	平行	○	○	—
19	豆叩寺	正殿	明・前期	入母屋	平瓦葺	丸棒形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	—	○
20	文星廟	正殿	明	入母屋	平瓦葺	薄板形	扇形	平行	—	—	—	○	—	○

※ 2T:二手先斗栱; 2T-1:二手先斗栱一個; 2TR:尾垂木付二手先斗栱; 2TR-1:尾垂木付二手先斗栱一個; OB:持送梁; OB-1:持  
# 文星廟正殿の側面5列目柱上は斗栱無し、6列目柱上は持送梁を入れ、その中備には組物がない。



閣は、前方1列目柱上に三手先、2列目に二手先、3・4・5列目に一手先（出三斗）を用いており、これらの事例では斗栱の高さの違いを柱高によって調整しており（図3-6）、柱間に通る飛貫、頭貫などを段違いに渡している（図3-8）。花林寺大殿<sup>注34)</sup>では、前方1列目と2列目の柱上に二手先を用い、3・4・5列目に一手先（出三斗）を用いており、柱間の頭貫を段違いに渡している（図3-9）。龍居寺中殿でも、前方1列目柱上と中備ならびに4列目と中備に三手先を用い、2・3列目では柱高を高く、柱上と中備に一手先（出三斗）を用い、両脇間の頭貫・台輪と中間の大梁を段違いに渡している（図3-10）。このように、四川省の三間仏殿では斗栱配列の不統一に対し、軒の出の違いを肘木の長さにより、斗栱の高さの違いを柱の高さにより調整していることが分かる。

なお、斗栱の構造については、外側では各手先肘木の先端に秤肘木を置いて上方の肘木を支え、

3-2 三間仏殿意匠表（右）

斗栱															A&C
正面			両側面									背面			
柱上	中間中備	両脇間中備	1列目柱上	1-2中備	2列目柱上	2-3中備	3列目柱上	3-4中備	4列目柱上	4-5中備	5列目柱上	柱上	中間中備	両脇間中備	
形状	形状及個数	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状	形状及個数	形状及個数	
2T	2T-2	2T-1	2T	—	2T	OB-1	1T	OB-1	1T	—	OB	OB	OB-2	—	PCR
2T	2T-3	2T-1	2T	—	2T	—	1T	—	OB	—	OB	OB	1T-3	—	NCR
2T	2T-3	2T-1	2T	2T-1	1T	—	1T	—	1T	—	1T	1T	1T-1	—	NCR
2TR	2TR-2	—	3TR	—	3TR	2TR-1	2T	—	2T	—	2TR	2TR	2TR-2	—	NCR
2T	2T-2	—	2T	—	1T	1T-1	1T	—	1T	—	—	1T	1T-1	—	NCR
2TR	OB-2	—	2TR	2TR-1	OB	OB-1	OB	—	2T	—	—	2T/OB	OB-2	—	PCR
2T	2T-2	—	2T	2T-1	2T	2T-1	2T	—	2T	—	—	2T	2T-2	—	NCR
3T	3T-2	—	3T	—	3T	—	OB	—	OB	—	OB	OB	1T-2	—	NCR
2TR	2TR-2	—	2TR	2TR-1	1T	—	1T	—	1T	—	1T	1T	1T-2	—	NCR
3TR	3TR-4	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	3TR-2	3TR	3TR-1	3TR	—	—	3TR	3TR-3	3TR-1	NCR
2TR	2TR-2	2TR-1	2TR	2TR-1	2T	2T-1	2T	2T-1	2T	2T-1	2T	2T	2T-2	2T-1	NCR
3TR	3TR-4	3TR-1	3TR	—	3TR	—	3TR	—	3TR	—	3TR	3TR	3TR-2	—	NCR
2TR	2TR-2	2TR-1	2TR	2TR-1	OB	OB-1	OB	2TR-1	2TR	—	—	2TR	2TR-2	2TR-1	NCR
3TR	3TR-3	3TR-1	3TR	—	3T	3T-2	3T	—	3T	—	—	3T	3T-2	—	NCR
3TR	3TR-2	—	3TR	—	3T	—	3T	—	3T	—	3TR	3TR	3TR-2	—	NCR
2TR	2TR-2	2TR-1	2TR	—	OB	—	OB	—	OB	—	OB	OB	—	—	PCR
2T	2T-2	—	2T	2T-1	1T	1T-1	1T	—	1T	—	—	1T	1T-2	—	NCR
3TR	3TR-2	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	3TR-2	3T	3TR-1	3TR	—	—	3TR	3TR-2	3TR-1	NCR
3TR	3TR-1	—	3TR	1T-1	1T	—	1T	—	1T	—	—	1T	1T-1	—	PCR
3TR	3TR-1	3TR-1	3TR	—	—	—	OB	—	OB	—	#	OB	—	—	PCR

送梁一個；S&Q:形状及個数；A&C:評価認定；NCR:国文物；PCR:省文物

一手・二手・三手先目にも同様の組物を重ねるのが本格的な形式であり、『営造法式』では「計心造」と呼ばれる。手先肘木端の秤肘木を用いず、手先肘木が直接上方の手先肘木を支えて縦一列に組むものを「偷心造」と呼んでいる。また、斗栱の一手目、二手目等の秤肘木を省略するもの、秤肘木の代わりに装飾材を加え、三手目等に秤肘木を置いて軒桁を支え、計心造と偷心造を併用した複合式の斗栱がある。三間仏殿の斗栱を見ると、計心造と偷心造とするものが少なく、複合式とするものが半数以上ある。

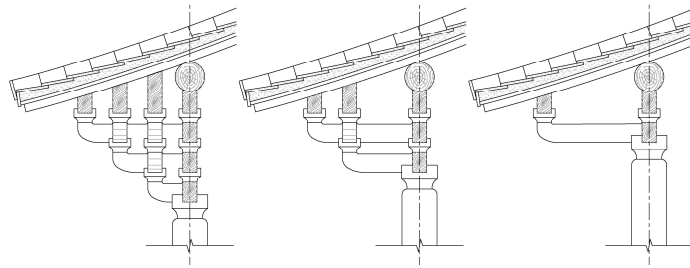


図3-6 側面斗栱モデル断面図

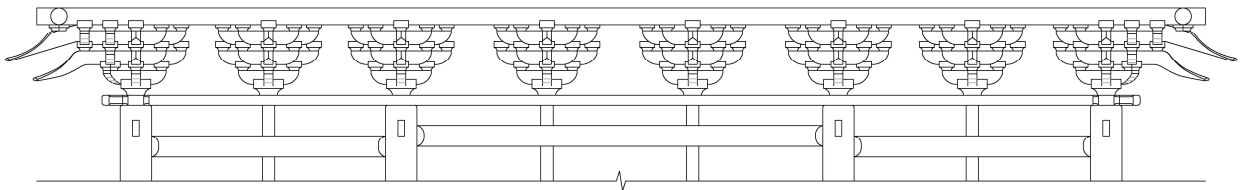


図3-7 10. 饒益寺大雄宝殿・側面斗栱立面図

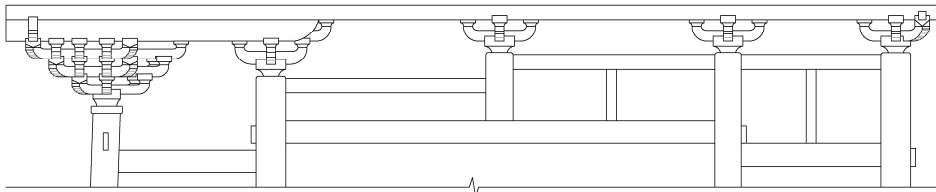


図3-8 5. 五龍廟文昌閣・側面斗栱立面図

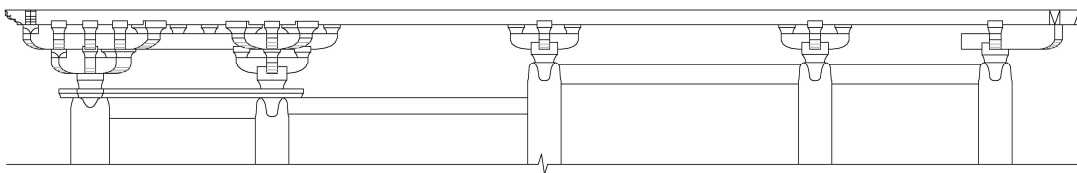


図3-9 1. 花林寺大殿・側面斗栱立面図

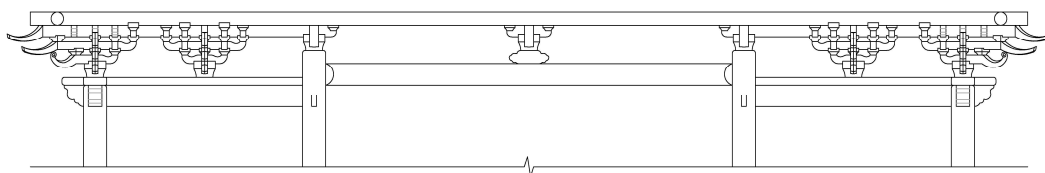


図3-10 13. 龍居寺中殿・側面斗栱立面図

### 3-5. 登梁と尾垂木尻

四川省の三間仏殿の中には、屋根裏に構造材として曲材（登梁）を用いるものがある。一つ目は、主屋の屋根裏中央の梁行方向に合掌型に組む太い斜材（仮称：大型登梁）を用いるもので、前方の主屋柱上の桁行の大虹梁中央から上方の棟木に架け、主屋の母屋桁の荷重を受け、これを主屋中央部に1挺（図3-11～13、写真3-11～13）乃至2挺（図3-14～15、写真3-14～15）架け渡すものである。これは、前述のように三間仏殿の正面中央柱間を広く取ったため、大型登梁が主屋屋根の桁行中央部を支持する「中備」の役割を担っていることが分かる。二つ目は、庇の屋根裏において、側柱上の斗栱の尾垂木尻を直材とするのではなく、湾曲材（仮称：小型登梁）を用いるものである。この小型登梁は、尾垂木尻が変化したものと考えられる。本来、尾垂木は軒先の荷重を支える挺子の役割を果たす部材であり、尾垂木尻はその後半部分にあたるが、ここでは尾垂木尻の取付き部分の幅を広げて斗栱と一体化し、構造的な強化を計り、さらに尾垂木尻の後端を支持する母屋桁との接合部の高さに対応させるために湾曲材としている。そのため、尾垂木尻は軒の桁を支える挺子の機能を残しつつ、高さの異なる部材を繋ぐ登梁の形状へと変化したものと考えられる。この小型登梁には2種類があり、前述の庇二架系の遺構では母屋桁2架を支えるもの（図3-16、写真3-16）、庇一架系の遺構では母屋桁1架を支えるもの（図3-17、写真3-17）がある。

一方、中国の元代以前の遺構の中から、登梁状の部材を眺めると、管見では山西省の広勝上寺前殿（図3-18）<sup>注35)</sup>、下寺後大殿（洪洞県、元・AD.1309年）（図3-19）<sup>注36)</sup>に見られ<sup>Ⅲ-14)</sup>、<sup>注37)</sup>、下寺後大殿では堂背面の斗栱の手先を一手減ずるなどの点を合わせてみると、華北地方の元代の構法が四川省に流入した可能性があり、華北中西部から四川地方に見られる地域的な特性を示すものと考えられる。

そこで、20棟の中から、先ず登梁の構法を用いたものについて眺めてみよう。一つ目の大型登梁は元代の遺構5棟に見られ、この中には1挺用いるもの（2.青龍寺大殿、3.報恩寺三清殿、5.五龍廟文昌閣）、2挺用いるもの（1.花林寺大殿）、さらに大型登梁の上端を棟木でなく、その下方の母屋桁に架けて、主屋屋根の2架を支えるために1挺用いるもの（4.永安寺大殿）がある。これらは、主屋の両妻に二重虹梁・大瓶束を用いながら、中央部に登梁を用いたことで、構造的な補強を行うとともに、主屋の内部空間に開放感・上昇感を生み出している。二つ目の小型登梁は三間仏殿の庇部分において、側柱上と中備の斗栱に用いられており、二架系のものでは2棟（2.青龍寺大殿、3.報恩寺三清殿）、一架系のものでは9棟（1.花林寺大殿、5.五龍廟文昌閣、6.百福院前殿、7.磐陀寺大殿、9.開禧寺大雄殿、11.尊勝寺大雄宝殿、13.龍居寺中殿、15.宝梵寺大雄宝殿、19.豆叩寺正殿）

に見られ、いずれも斗栱の最上段に尾垂木前方を折り曲げて組み入れ、前端を持出梁のように差し出し、軒の出を支えている。しかも、庇部分に湾曲材を用いたことで、主屋部分の空間全体の上昇感を高める効果を生んでいる。

さらに、直線的な尾垂木尻について眺めると7棟に見られ、いずれも三間仏殿の庇部分の柱上斗栱と中備斗栱に用いられ、側柱上の斗栱から1架延すのが一般的である（永安寺大殿、饒益寺大雄宝殿、開善寺正殿、梓潼宮大殿は一部省略）（図3-20、写真3-18）。中には、三間仏殿の前面のみ用いるもの（尊勝寺大雄宝殿、河沙寺大雄宝殿）（図3-21、写真3-19）、庇部分を2架として、側柱上の斗栱から1架目に直材の尾垂木尻、2架目に小型登梁を用いるものもある（甘泉寺大雄宝殿）（図3-22、写真3-20）。このように、直材の尾垂木尻も一部残され、古来の尾垂木の伝統が継承されていることが分かる。

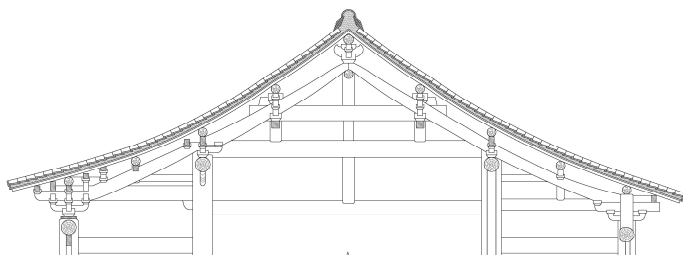


図3-11 2. 青龍寺大殿・屋根裏梁行断面図



写真3-11 2. 青龍寺大殿・屋根裏大型登梁

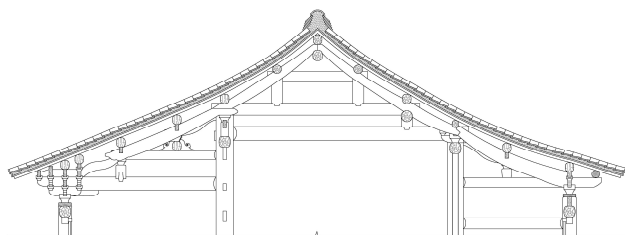


図3-12 3. 報恩寺三清殿・屋根裏梁行断面図



写真3-12 3. 報恩寺三清殿・屋根裏大型登梁

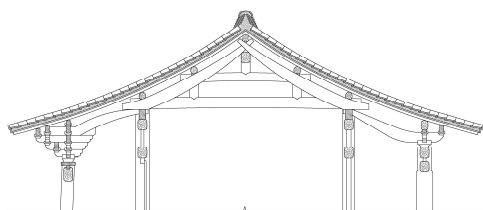


図3-13 5. 五龍廟文昌閣・屋根裏梁行断面図



写真3-13 5. 五龍廟文昌閣・屋根裏大型登梁

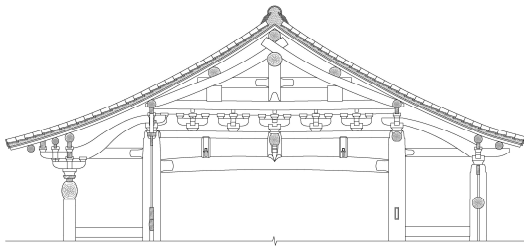


图 3-14 1. 花林寺大殿·屋根裏梁行断面图



写真 3-14 1. 花林寺大殿·屋根裏大型登梁

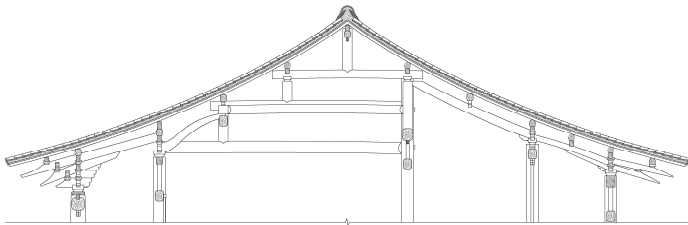


图 3-15 4. 永安寺大殿·屋根裏梁行断面图



写真 3-15 4. 永安寺大殿·屋根裏大型登梁

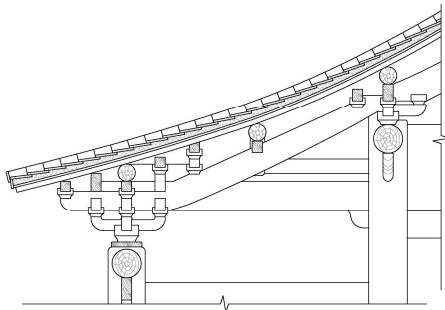


图 3-16 2. 青龍寺大殿·庇梁行断面图



写真 3-16 2. 青龍寺大殿·庇小型登梁

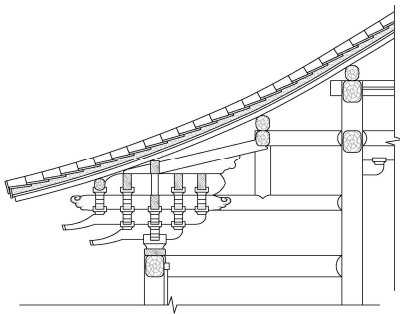


图 3-17 13. 龍居寺中殿·庇梁行断面图



写真 3-17 13. 龍居寺中殿·庇小型登梁

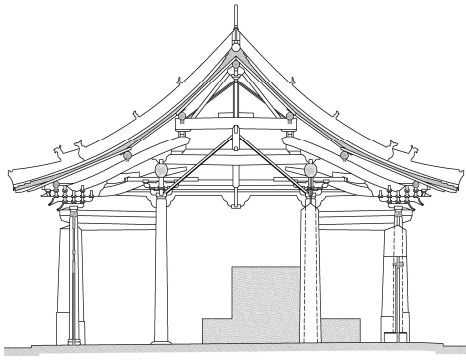


图 3-18 广胜上寺·前殿梁行断面图

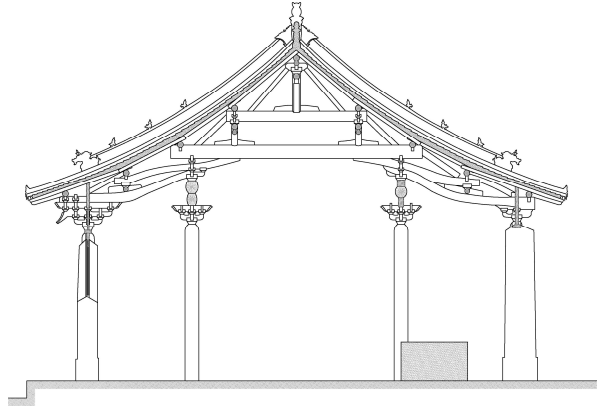


图 3-19 广胜下寺·后大殿梁行断面图

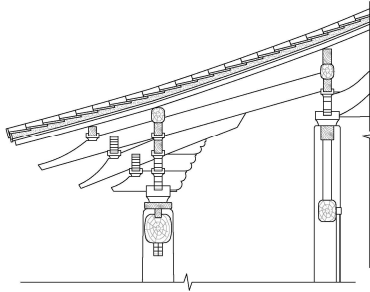


图 3-20 4. 永安寺大殿·庇梁行断面图



写真 3-18 4. 永安寺大殿·尾垂木尻

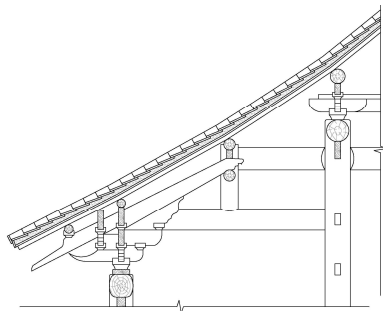


图 3-21 11. 尊胜寺大雄宝殿·庇梁行断面图



写真 3-19 11. 尊胜寺大雄宝殿·尾垂木尻

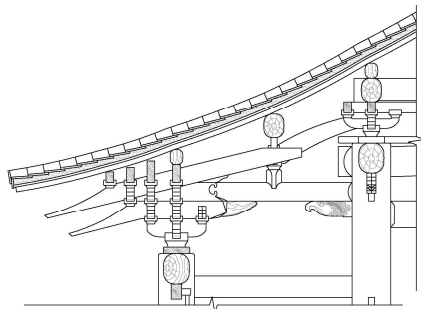


图 3-22 12. 甘泉寺大雄宝殿·庇梁行断面图



写真 3-20 12. 甘泉寺大雄宝殿·尾垂木尻

### 3-6. 結び

本章では、四川省の元・明代の三間仏殿 20 棟を取り上げ、それらの平面寸法、構造システム、斗栱、登梁などの建築的な特質について検討した。その特徴は、次のように纏められる。

#### 1) 外観・平面寸法と柱間配置

三間仏殿の外観は、入母屋造・本瓦葺として正面に緩やかな軒反りを見せ、正面では中央間に両開き扉を入れる。両側背面では大壁式（3 棟）のもの、真壁式（17 棟）とするものがある。平面は、桁行 3 間、梁行 3 間乃至 4 間とし、1 辺を 12m～15m 程の正方形とするのが一般的である。柱間寸法は、正面（桁行）では中間を脇間の 2.0 倍～3.0 倍程にとるものが多く、側面（梁行）では、3 間のものは正面柱間とほぼ同様にとり、4 間のものは正側面の中間を広くとり、側面中間の中央に柱を立てて中間 2 間とし、堂内の主屋に広い内部空間を生み出している。また、三間仏殿の側面 3 間と 4 間の中には、前方柱間を広くとるものがあり、元代の三間仏殿では、正面の 1 列目柱間を吹放す傾向が認められる。

#### 2) 間架と架構システム

三間仏殿の構造は、柱上に斗栱を置き、柱間に繫梁と束を用いて小屋を組む拾梁式を基本とし、華北・華中地方の架構形式に属している。内部空間は主屋に主屋柱 4 本を立て、周囲に柱間 1 間の庇を巡らしており、庇部分では母屋桁の「間架」を基準に分類すると一架系、二架系と三架系の 3 種に分かれ、主屋柱 4 本から桁・梁・隅行 3 方向に繫梁を渡し、二架、三架系では 2 重、3 重に繫梁を渡し、大瓶束を立てて母屋桁を支える。主屋部分では、棟木の前後を合わせた間架を分類すると、三架系、四架系、五架系 3 種に分けられ、三間仏殿の間架と架構は、庇が二架系、主屋が四架系とするのが一般的である。但し、建物の間架寸法は必ずしも統一されていない。

#### 3) 斗栱と中備

三間仏殿には、三手先・二手先・一手先・持出梁の 4 種類の斗栱が側柱に用いられ、三間仏殿の大半が正側背面に載る斗栱を異にしている。斗栱配列は (1) 正面に三手先、両側背面に三手先・二手先・一手先・持出梁を用いるもの、(2) 正面に二手先、両側背面に二手先・一手先・持出梁を用いるもの、(3) 三手先を 4 面用いるもの、(4) 二手先を 4 面用いるものがある。これらの斗栱配列の内、(3)、(4) では、一つ建物の正側背面に同じ手先の斗栱を使うため、斗栱を支える側柱高は均一であるが、(1)、(2) では三間仏殿の側面において斗栱の種類により、高さ、手先の違いを補正する必要があり、高さの違いは柱高、手先の違いは肘木の長さを変えることで対応している。また、正面柱間では、中間を脇間の 2 倍～3 倍にとるため、中間に詰組を 3 具～4 具入れることで正面性

を高めている。

#### 4) 登梁と尾垂木尻

三間仏殿の中には、主屋と庇に湾曲材（登梁）を構造材として用いるものがある。一つは、主屋の屋根裏中央の梁行方向に合掌形に組む太い斜材（仮称：大型登梁）を用いるもので、前方の主屋柱上の桁行の大虹梁中央から上方の棟木に架けられ、主屋の母屋桁の荷重を受け、これを主屋中央の前後に架け渡すものであり、元代の遺構に用いられている点が注目される。また一つは、庇の屋根裏において、側柱上の斗栱の尾垂木尻を角材とするのではなく、湾曲材（仮称：小型登梁）を用い、斗栱と母屋桁を繋いでいる。このように、主屋部分と庇部分に大型・小型の登梁を用いた点が注目され、構造的な強化とともに、高く、上昇感のある内部空間を生み出している。



## 注釈

- 注 1) 参考文献Ⅲ-6), pp. 582 を参照。
- 注 2) 参考文献Ⅲ-6), pp. 651 を参照。
- 注 3) 参考文献Ⅲ-6), pp. 415 を参照。
- 注 4) 参考文献Ⅲ-6), pp. 106 を参照。
- 注 5) 参考文献Ⅲ-6), pp. 621 を参照。
- 注 6) 参考文献Ⅲ-6), pp. 315 を参照。
- 注 7) 参考文献Ⅲ-11), pp. 308 を参照。
- 注 8) 参考文献Ⅲ-6), pp. 435 を参照。
- 注 9) 参考文献Ⅲ-6), pp. 345 を参照。
- 注 10) 参考文献Ⅲ-11), pp. 152 を参照。
- 注 11) 参考文献Ⅲ-6), pp. 255 を参照。
- 注 12) 参考文献Ⅲ-6), pp. 423 を参照。
- 注 13) 参考文献Ⅲ-11), pp. 315 を参照。
- 注 14) 参考文献Ⅲ-6), pp. 423 を参照。
- 注 15) 参考文献Ⅲ-6), pp. 151 を参照。
- 注 16) 参考文献Ⅲ-6), pp. 162 を参照。
- 注 17) 参考文献Ⅲ-6)に同じ、但し、四川分冊・下, pp. 1014 を参照。
- 注 18) 参考文献Ⅲ-6), pp. 328 を参照。
- 注 19) 参考文献Ⅲ-11), pp. 280 を参照。
- 注 20) 参考文献Ⅲ-6), pp. 357 を参照。
- 注 21) 参考文献Ⅲ-11), pp. 300 を参照。
- 注 22) 柱間寸法については、四川省の元～明代の寸法が用いられたと考えられるが、寸法の地域差、施工誤差、経年誤差等を勘案し、実測寸法を尺換算とせず、メートル法を用いることとした。
- 注 23) 各建物の上下二段の記載は、上段に実測寸法・下段に寸法比率を示し、柱間寸法の比率は桁行では左脇間、梁行は前方の寸法を基準(1.0)とした。なお梁行の下段には間架(母屋桁の間隔数を示した)。
- 注 24) 脇間は、左右両脇間があるが、ここでは左脇間を基準とした。これは、実測寸法を扱ったためである。

- 注 25) 注 24) で述べたように右脇間：中間の比率を求めると、約 1.4 倍(2 棟)、約 2.0 倍(10 棟)、約 2.6 倍(3 棟)、約 3.0 倍(5 棟)となり、左脇間：中間の比と同等の結果が得られた。
- 注 26) 20 棟の主屋柱と側柱の柱径について、平均値を求めると、主屋柱約 440mm、側柱約 370mm となる。但し、同一建物内でも不揃いで不一致のものが多いため柱間との関連を求めてない。
- 注 27) 四川省の三間仏殿の正面柱間の脇間：中間：脇間の比率の特徴を検証するために、華北・華中・華南地方の事例を取り上げることとし、宋代から明代の三間仏殿 11 棟についてみると、華北地方では、少林寺初祖庵大殿(宋・河南省登封)1 : 1.34 : 1、青蓮寺大殿(北宋・山西省晉城)1 : 1.31 : 1、龍門寺大殿(宋・山西省平順)1 : 1.38 : 1、永壽寺雨花宮(宋・山西省榆次)1 : 1.14 : 1、広勝寺前殿(元・山西省洪洞)1 : 1.71 : 1 である(出典：「中国古代建築史—宋・遼・金・西夏建築—」中国建築工業出版社、2003 年刊、「中国古代建築技術史」科学出版社、1985 刊)。華中地方では、保国寺大殿(宋・浙江省寧波)1 : 1.93 : 1、天寧寺大殿(元・浙江省金華)1 : 1.88 : 1、真如寺正殿(元・上海市真如)1 : 1.61 : 1、楊湾廟正殿(元・蘇州吳県)1 : 1.35 : 1 である(出典：「中国古代建築技術史」中国科学院自然科学史研究所編、科学出版、1985 年刊、関口欣也「中国兩浙の宋元古建築(1)(2)」仏教芸術、昭和 59 年 7 月、同年 11 月刊)。華南地方では、華林寺大殿(宋・福建省福州)1 : 1.41 : 1、陳太尉宮大殿(宋・福建省羅源)1 : 1.69 : 1、方広岩寺大雄宝殿(明・福建省永泰)1 : 2.00 : 1 である(出典：杉野丞・沢田多喜二「中国華南地方の建築の研究(1)～(15)」：(1)日本建築学会東海支部研究報告・1992 年 2 月、(10)日本建築学会東海支部研究報告集 35 号・1997 年 2 月、(14)日本建築学会大会学術講演梗概集・1998 年 9 月)。以上のように、管見では、華北・華中・華南の宋代から明代の三間仏殿の正面柱間の比率は 1 : 1.14～2 : 00 : 1 となり、中間が 2 : 00 以上のものは少ないことが分かる。
- 注 28) 中国の寺廟建築の大壁式は、木造軸組の柱列を包むように煉瓦(磚)の厚い壁で柱上まで覆うもので、柱頂の斗栱は外に見せる。
- 注 29) 中国の寺廟建築の真壁式は、日本の真壁のように貫・竹木舞の土壁とせず、木造軸組の柱間に煉瓦(磚)を充填させ、外に柱を見せている。
- 注 30) 20 棟の大半が主屋柱と側柱(頭貫位置)を繫梁で結び、その上部でも主屋柱と側柱上の斗栱とを結び固有の架構形式をみせているため、ここでは上部の繫虹梁を扱っている。
- 注 31) 一架・二架・三架系の分類については、20 棟の中には正側背面の間架数が異なるものがある(正背面一架・両側面二架、正面二架・両側背面一架、正面三架・両側背面二架)。それらは、

主屋柱の柱列を前後、左右に移したことで狭い間架を生じさせたものが多いため、それらについては、正側背4面の内、2面或いは3面に用いられた間架数を分類の規準とした。

注 32) 擬似尾垂木は、本来の尾垂木の力学的な役割をもつことなく、斗栱の先端に尾垂木端に似せた突出材を差し出すもので、肘木先端に取り付け、意匠的な豪華さを得ようとしたものである。

注 33) 真昂尾垂木は、屋根の軒を支えるために、斗栱の上段に堂内部から外部に向けて差し出された直材(尾垂木)であり、斗栱を支点として前端で軒先を押し上げ、後端を梁・母屋桁等で受けるものである。これに対し、元・明代には堂内部から外部に延された直材の後半部分を尾垂木尻として残し、前半部分は斗栱を支点とし、直材を折り曲げて梃子状に扱うことで軒先を支えるものが仮昂尾垂木である。

注 34) 花林寺大殿側面の斗栱立面図は復元図面である。

注 35) 図 3-18 は、参考文献Ⅲ-15, pp. 115, 図 5-7-17, 「山西洪洞広勝上寺前殿横断面図」と現地調査を基に筆者が図面を作成した。

注 36) 図 3-19 は、参考文献Ⅲ-15, pp. 112, 図 5-7-8, 「山西洪洞広勝下寺後大殿東稍間横断面図」と現地調査を基に筆者が図面を作成した。

注 37) 田中淡博士は「中国建築史の研究」(弘文堂, 平成元年7月10月刊)の中で、華北地方の建物に用いられた登梁状の材を取り上げられている。また、河北正定隆興寺轉輪藏殿の内部では柱間を繋ぐ斜材が用いられるが、これは柱間の梁材であり、本稿で扱う登梁とは部材の役割が異なる。



## 第四章

### 四川省の明代の間裳階付仏殿



## 第四章 四川省の明代の一間裳階付仏殿

### はじめに

本章では、四川省の寺廟建築の現地調査に基づき、明代の国家・省・市等の重点文物と他の保存状態の良い一間裳階付仏殿遺構 12 棟を抽出した。その中、仏教寺院が 8 棟、道観が 3 棟、廟が 1 棟であり（表 4-1）、成都市と重慶市の西南地域に集中し、成都北東の綿陽市、遂寧市に 3 棟、南部の雅安市、内江市、瀘州市、宜賓市に 8 棟、重慶市に 1 棟ある（図 4-1）。12 棟について、中国文物局の資料と中国側の史料・文献から建立年代を検証し、既往研究の調査、文献調査を行い、さらに、当初の姿をよく留める軸部、組物、小屋組を対象とし、各々の平面、架構、斗栱、意匠の資料を図化して比較検討し<sup>注1)</sup>、それらの沿革、平面寸法と柱間配置、間架と架構システム、斗栱の形態、天井の形態の特徴を明らかにする。それらの内容について、以下の五節にそって論ずることとする。

第一節「一間裳階付仏殿の沿革」では、一間裳階付仏殿 12 棟の所属する寺院の歴史及び建物の建立年代について個別に取り上げる。

第二節「平面寸法と柱間配置」では、一間裳階付仏殿 12 棟の桁行総長と梁行総長を統計し、全体規模を把握する。また、桁行、梁行方向の柱配列状況をまとめ、それらの中間と両脇間寸法の比例を取り出し、各間口の寸法を決める傾向を検討する。また、各建物の外観について、屋根形状、屋根材、垂木形状等の点をまとめ、それらの共通点を取り出す。

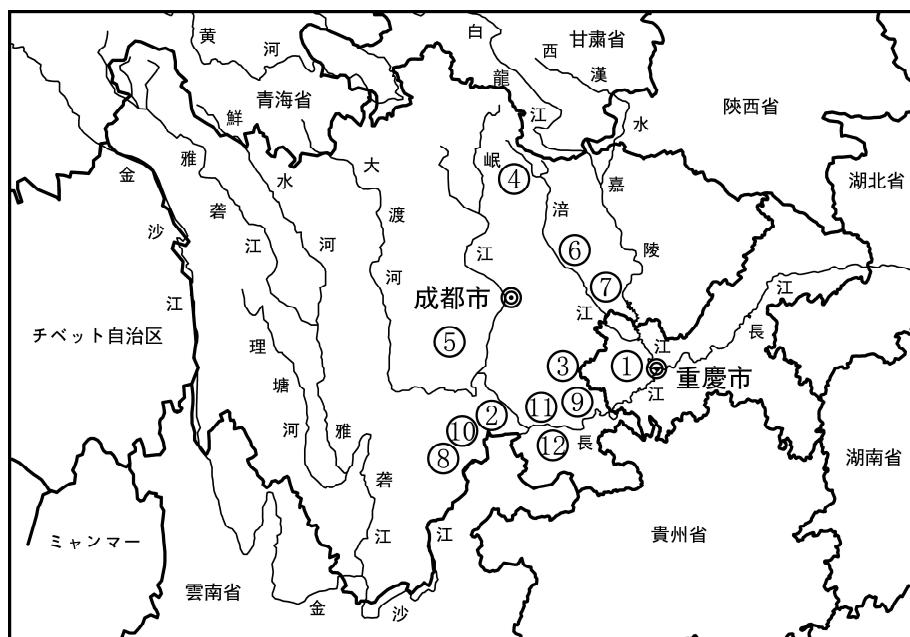


図 4-1 一間裳階付仏殿分布図

第三節「間架と架構システム」では、建物全体の構造形式を把握し、主屋部分と裳階部分を分かれて検討し、それぞれの間架及び裳階部分と主屋部分の構造上の繋ぐ仕組みについて分類し、さらに、裳階部分について、内側裳階と外側裳階に分かれ、その間架数及び主屋柱との構造上の繋がりを分析し、それらの構造形式が『营造法式』と比べ、全体的な架構システムについて検討する。

第四節「斗栱の形態」では、一間裳階付仏殿 12 棟の裳階と主屋の正側背面の柱上及び中備斗栱について、斗栱手先数、斗栱個数を分類し、それらの斗栱使用の傾向を纏め、さらに、斗栱の形状、尾垂木、配列に関する特徴がある点を取り出して検討する。

第五節「天井の形態」では、一間裳階付仏殿 12 棟の屋根裏天井の様式を纏め、それらの取り付く仕組みと役割について検討する。

第六節「結び」では、四川省の明代の一間裳階付仏殿 20 棟にみられる、平面、構造、意匠の特徴をまとめ、この地域固有の特質を指摘している。



#### 4-1. 一間裳階付仏殿の沿革

本節では、取り上げる12棟（表4-1）の建物の沿革を一瞥しておきたい<sup>注2)</sup>。1. 宝輪寺<sup>注3)</sup>は唐代に創立、宋咸平年間（998～1003）に再建され、寺内に大雄宝殿、薬王殿、観音閣等の建物が残され、大雄宝殿は大虹梁に「大明宣徳七年歳次壬子十一月十九日甲戌修造」とあり、宣徳七年（1432）の建立とされる<sup>IV-1)</sup>。2. 万寿寺は宋代の創立、明正徳十年（1515）に増築して寺名を改め<sup>IV-2)</sup>、寺内に2. 観音殿と10. 大雄宝殿が残され、「屏山縣万寿寺与万寿観」<sup>IV-3)</sup>によると、二棟は明代の建立とされる。3. 甘露寺は唐代に創立、清の乾隆と嘉慶年間（1796～1820）に修復が行われているが、正殿は棟木に「大明正統十二歳次鑿修」とあり、正統十二年（1447）の建立とされる<sup>IV-4)</sup>。4. 報恩寺は明正統五年（1440）の創立、寺内に大雄宝殿、大悲殿、華嚴殿等が残され、碑文に「奉 聖旨既是土官不爲例准他這遭欽此欽遵脩理報……恩外大明正統拾壹年拾壹月吉旦土官僉事王璽 建立」とあり、華嚴殿は正統十一年（1446）に主要工事を終え、古記録によると天順四年（1460）に竣工している<sup>IV-5)</sup>。5. 観音閣正殿は、文物論考「四川雅安市雨城区観音閣調査簡報」<sup>IV-6)</sup>によると明天順五年（1461）の建立である。6. 藍池廟は宋代に創建、明弘治二年（1489）に重建、清乾隆年間（1736～95）に修復が行われ、敷地内に前殿、正殿（岱岳殿）、後殿等が残され、岱岳殿は大虹梁に「大明弘治二年」とあり、弘治二年（1489）の建立である<sup>注4)</sup>。7. 灵泉寺は隋代の創立、寺内には大雄宝殿、地藏殿、文昌殿等が残され、寺史の「遂寧灵泉寺」<sup>IV-7)</sup>によると、大雄宝殿は弘治三年（1490）に建立されている。8. 万寿観は『中国文物地図集・四川分冊（下）』によると、明成化年間（1465～87）、弘治年間（1488～1505）に重建され、玄祖殿のみ残される。玄祖殿は前掲の「屏山縣万寿寺与万寿観」によると、母屋桁に「大明弘治四年培修」とあり、弘治四年（1491）の建立とされる。9. 圓通寺中殿は、『四川重慶古建築地図』<sup>IV-8)</sup>によると、明正徳元年（1506）の建立である。11. 元極宮と12. 斗姆宮は真武山古建築群の中にあり、明万暦年間（1573～1620）に創建され、敷地内に元極宮玄祖殿、斗姆宮慈航殿、望江楼等が残される<sup>注5)</sup>。『四川古建築』<sup>IV-9)</sup>によると、元極宮玄祖殿は、明万暦二年（1574）の建立であり、斗姆宮慈航殿は、明万暦四十六年（1618）の建立である。

#### 4-2. 平面寸法と柱間配置

12棟の平面は、桁行3間、梁行3間のものが9棟、桁行3間、梁行4間が2棟、桁行3間、梁行7間が1棟である（表4-1、図4-2）。規模についてみると、最大は4.報恩寺華嚴殿の桁行3間（17.44m）、梁行4間（14.39m）、最小は12.斗姆宮慈航殿の桁行3間（11.06m）、梁行7間（10.82m）であり、平均は桁行総長13.33m、梁行総長12.41mである。桁行総長と梁行総長の分布図（図4-3）をみると、規模は1辺を11m～13m程とするものが多いことが分かる。平面形態は、桁行と梁行の総長比率をみると、2.万寿寺観音殿、6.藍池廟岱岳殿、11.元極宮玄祖殿のように1:1の正方形とするもの（3棟）、1:0.91～0.98として僅かに横長の長方形とするもの（7棟）、さらに、1.宝輪寺大雄宝殿、報恩寺華嚴殿のように桁行と梁行の総長比を1:0.79、1:0.83として、やや横長の長方形とするもの（2棟）があり、桁行と梁行の総間寸法には多少のばらつきがある。

次に、柱間寸法<sup>注6)</sup>についてみると（表4-1）、裳階正面では脇間と中間の比率が1:1.30（報恩寺

表4-1 一間裳階付仏殿平面寸法表（左）

No	寺院名	建築名	所在地	建立年代	桁行× 梁行	桁行 総長(m)	梁行 総長(m)	桁行(m)			前方
								左脇間	中間	右脇間	
1	宝輪寺	大雄宝殿	重慶市	明・1432	3×3	17.50	13.90	5.12	7.26	5.12	3.31
						1.00	0.79	1.00	1.42	1.00	1.00
2	万寿寺	観音殿	宜賓市	明	3×3	11.94	11.89	3.12	5.76	3.06	3.07
						1.00	1.00	1.00	1.85	0.98	1.00
3	甘露寺	正殿	内江市	明・1447	3×4	13.68	13.05	3.14	7.40	3.14	3.20
						1.00	0.95	1.00	2.36	1.00	1.00
4	報恩寺	華嚴殿	綿陽市	明・1460	3×3	17.44	14.39	5.29	6.86	5.29	5.15
						1.00	0.83	1.00	1.30	1.00	1.00
5	観音閣	正殿	雅安市	明・1461	3×3	12.35	11.67	2.93	6.49	2.93	2.90
						1.00	0.94	1.00	2.22	1.00	1.00
6	藍池廟	岱岳殿	綿陽市	明・1489	3×3	12.16	12.10	3.28	5.60	3.28	3.20
						1.00	1.00	1.00	1.71	1.00	1.00
7	灵泉寺	大雄宝殿	遂寧市	明・1490	3×3	15.89	15.53	4.33	7.23	4.33	4.23
						1.00	0.98	1.00	1.67	1.00	1.00
8	万寿観	玄祖殿	宜賓市	明・1505	3×3	12.04	11.45	3.00	6.07	2.97	3.00
						1.00	0.95	1.00	2.02	0.99	1.00
9	圓通寺	中殿	瀘州市	明・1506	3×3	11.51	10.51	2.83	5.85	2.83	2.83
						1.00	0.91	1.00	2.07	1.00	1.00
10	万寿寺	大雄宝殿	宜賓市	明	3×3	12.52	11.72	3.13	6.28	3.11	3.03
						1.00	0.94	1.00	2.01	0.99	1.00
11	元極宮	玄祖殿	宜賓市	明・1574	3×4	11.91	11.89	3.06	5.88	2.97	3.00
						1.00	1.00	1.00	1.92	0.97	1.00
12	斗姆宮	慈航殿	宜賓市	明・1618	3×7	11.06	10.82	2.79	5.51	2.76	2.79
						1.00	0.98	1.00	1.97	0.99	1.00

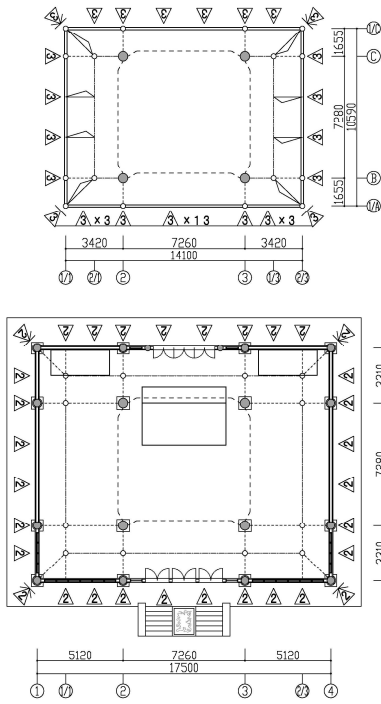
華嚴殿) から 1 : 2.36 (3. 甘露寺正殿) まであり、平均値は 1 : 1.81 である。12 棟の脇間 : 中間の比は、報恩寺華嚴殿 1 棟では 1 : 1.30、宝輪寺大雄宝殿他の 3 棟では 1 : (1.42~1.71)、万寿寺観音殿他の 6 棟では 1 : (1.85~2.07)、5. 観音閣正殿他の 2 棟では 1 : (2.22~2.36) であり、中間は脇間の約 1.3 倍 (1 棟)、約 1.5 倍 (3 棟)、約 2.0 倍 (6 棟)、約 2.3 倍 (2 棟) となり、中間を脇間の 1.5 倍から 2.0 倍程と広くとる点に大きな特徴がある<sup>注7)</sup>。また、側面柱間では 3 間が 9 棟、4 間が 2 棟、7 間が 1 棟ある。この内、柱間 3 間の脇間 : 中間の比をみると、1 : 1.36 とするものが 1 棟、1 : (1.67~1.78) のものが 3 棟、1 : (1.83~1.89) のものが 3 棟、1 : (2.02~2.20) のものが 2 棟となり、側面中間は正面中間に比べ、脇間に対する比率が小さいことが分かる。

一方、中国の寺廟建築は、『営造法式』<sup>IV-10)</sup>にみられるように、木造の軸組断面を基に計画され、母屋桁間の寸法を基準とするため、12 棟の断面寸法について、主屋と裳階の母屋桁間の寸法を眺めると、『営造法式』に見られるような母屋桁間寸法の統一性は認められない。また、各建物の裳階正面では、柱上斗栱と中備斗栱が配置されるため、脇間と中間の斗栱間の寸法を眺めると、日本の中

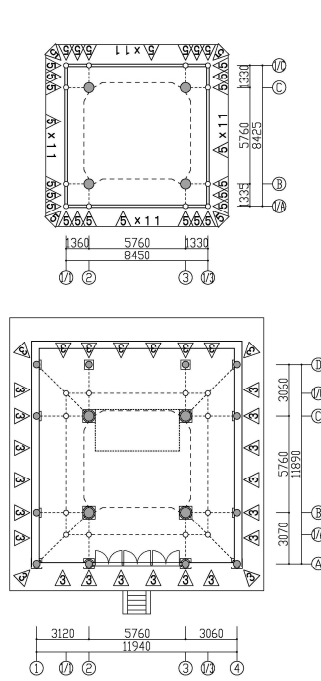
表 4-1 一間裳階付仏殿平面寸法表 (右)

梁行 (側柱) (m)		梁行 (間架) (m)											架椽数	
中間	後方	前方			中間				後方					
7.28	3.31	1.66	1.66	1.82	1.82	1.82	1.82	1.66	1.66			8架		
2.20	1.00	2架		2架		2架		2架						
5.76	3.06	1.74	1.34	1.44	1.44	1.44	1.44	1.33	1.73			8架		
1.88	1.00	2架		2架		2架		2架						
3.38	3.38	3.10	1.60	1.60	1.69	1.69	1.69	1.69	1.55	1.55			8架	
1.05	1.05	0.97	2架		2架		2架		2架					
6.98	2.26	2.26	1.23	1.23	1.23	1.23	1.23	1.23	1.23	1.23	1.23	10架		
1.36	0.44	3架		2架		4架				1架				
5.87	2.90	1.45	1.45	1.47	1.47	1.47	1.47	1.45	1.45			8架		
2.02	1.00	2架		2架		2架		2架						
5.70	3.20	1.60	1.60	1.43	1.43	1.43	1.43	1.60	1.60			8架		
1.78	1.00	2架		2架		2架		2架						
7.07	4.23	1.41	2.82	1.77	1.77	1.77	1.77	2.82	1.41			8架		
1.67	1.00	2架		2架		2架		2架						
5.50	2.95	1.50	1.50	1.38	1.38	1.38	1.38	1.48	1.48			8架		
1.83	0.98	2架		2架		2架		2架						
4.85	2.83	0.95	0.94	0.94	1.21	1.21	1.21	1.21	0.94	0.94	0.95	10架		
1.71	1.00	3架		2架		2架		3架						
5.55	3.14	1.52	1.52	1.39	1.39	1.39	1.39	1.57	1.57			8架		
1.83	1.04	2架		2架		2架		2架						
2.90	2.89	3.10	1.80	1.20	1.45	1.45	1.45	1.45	1.24	1.86			8架	
0.97	0.96	1.03	2架		2架		2架		2架					
5.26	2.77	0.93	0.93	0.93	0.88	0.88	0.88	0.88	0.88	0.88	0.92	0.93	0.92	12架
1.89	0.99	3架		3架		3架		3架		3架				

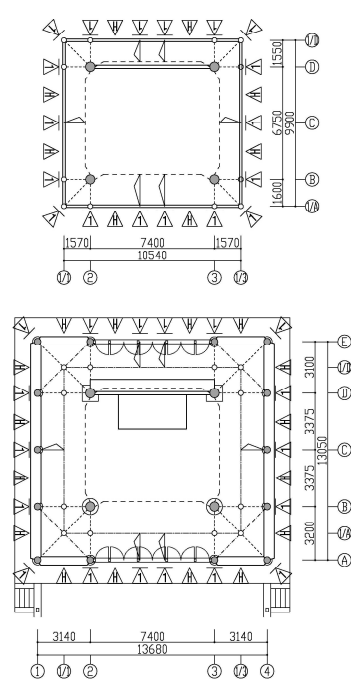
1. 宝輪寺・大雄宝殿・明・1432



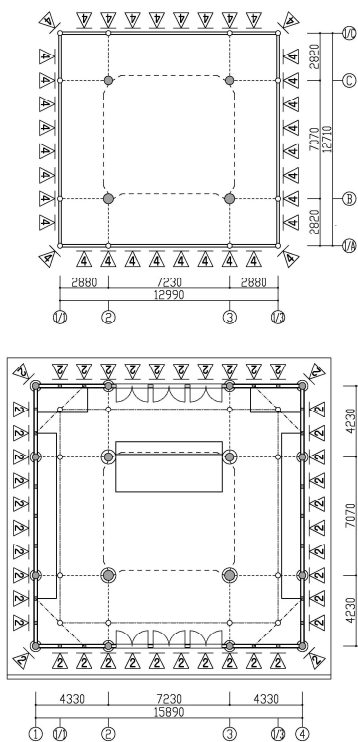
2. 万寿寺・観音殿・明



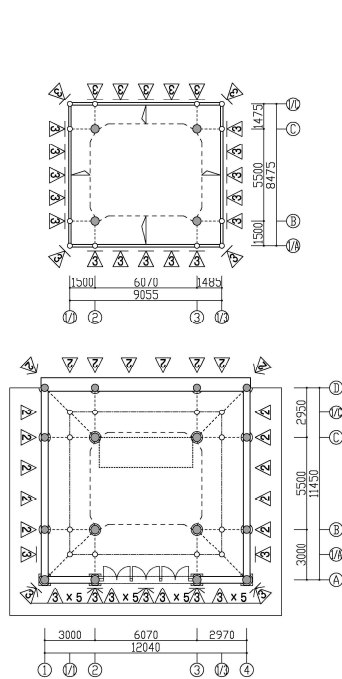
3. 甘露寺・正殿・明・1447



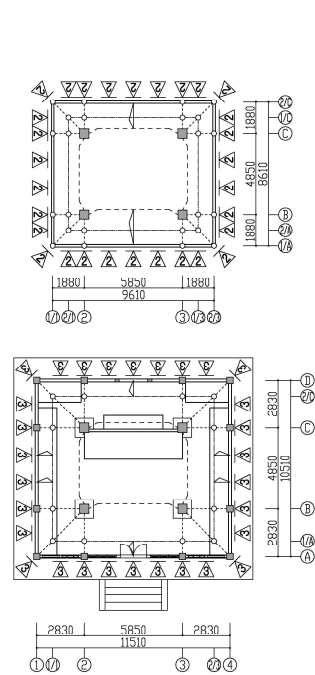
7. 灵泉寺・大雄宝殿・明・1490



8. 万寿寺・玄祖殿・明・1505



9. 圓通寺・中殿・明・1506



記号 ● 柱 ○ 束 △ X手先斗拱 △ X手先斗拱尾垂木付 ▲ 平三斗 ▲ 斜拱 △△ 如意斗拱

图 4-2 一間裳階付仏殿平面図 (左)

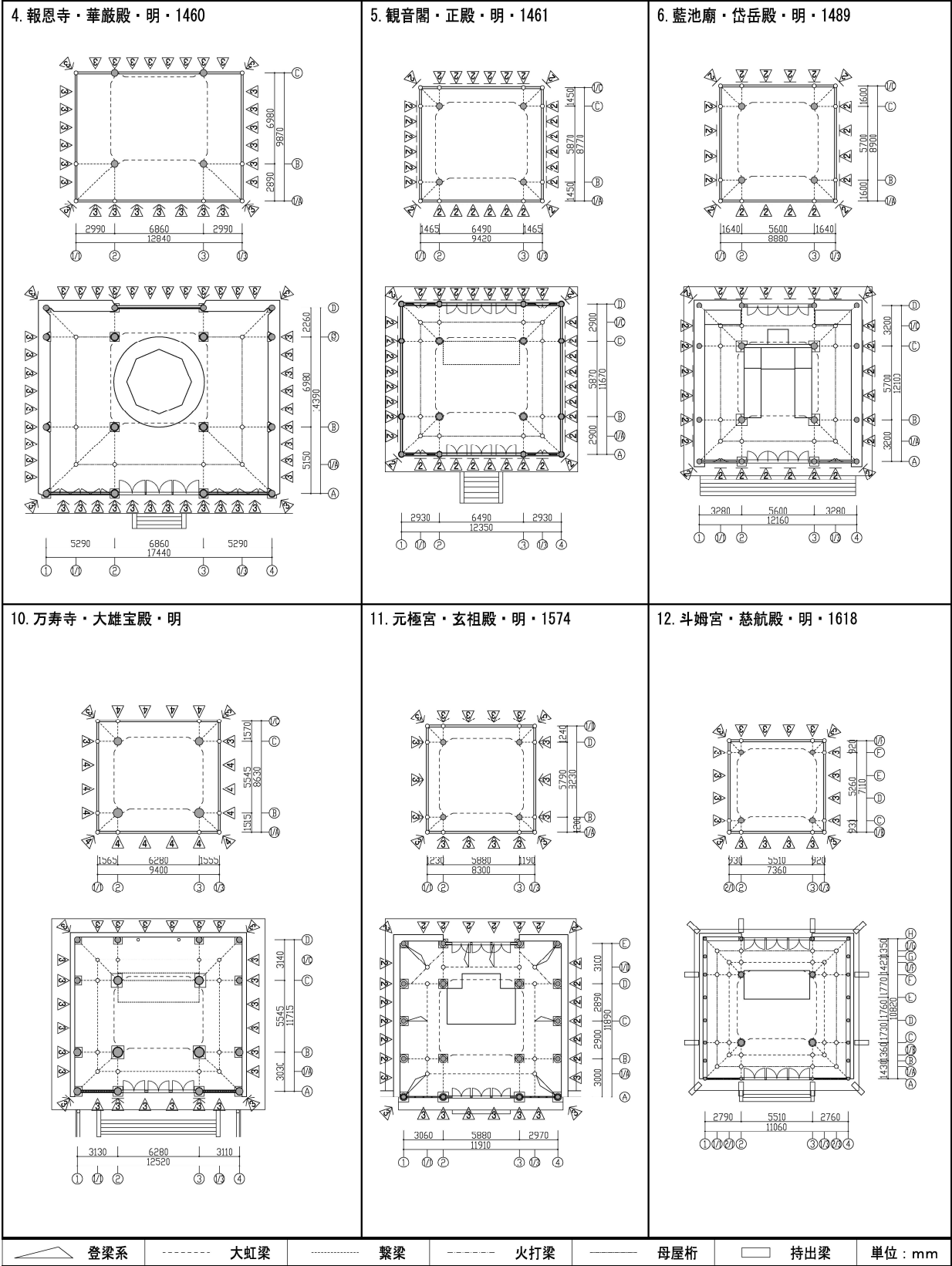


圖 4-2 一間裳階付仏殿平面圖 (右)

世禅宗様仏殿の「アイタ」の制<sup>注8)</sup>のように脇間：中間：脇間の中備斗拱数を1：2：1とし、斗拱間隔を2：3：2とし、柱間寸法を1：1.5：1とするような斗拱配列はみられず、アイタのような統一的な斗拱間寸法も認められない。

そこで、裳階正面の柱上斗拱と中備斗拱に着目し、斗拱の配列について眺めてみたい(図4-2)。先ず、12棟の正面柱間について、脇間：中間：脇間の中備斗拱(詰組)の数を見ると、1：4：1とするものが2棟あり、それらの柱間寸法比率(柱間比)は甘露寺正殿では1：2.36：1、観音閣正殿では1：2.22：1である。詰組比率(詰組比)を1：3：1とする9.圓通寺中殿では柱間比は1：2.07：1としている。また、詰組比を1：2：1とするものは万寿寺観音殿、藍池廟岱岳殿、8.万寿観玄祖殿<sup>注9)</sup>等4棟と最も多く、これらの柱間比は1：1.71～2.02：1とする。さらに、詰組比を2：4：2とする7.灵泉寺大雄宝殿では柱間比を1：1.67：1とし、詰組比を2：2：2とする宝輪寺大雄宝殿では柱間比を1：1.42：1としており、詰組比を3：4：3とする報恩寺華嚴殿では柱間比を1：1.30：1としている。このように、12棟の詰組比は1：2：1が最も多く(4棟)、次に1：4：1が続き(2棟)、この他は1：3：1、2：4：2、3：4：3、2：2：2が各1棟、詰組の無いものが2棟あり、中間に多くの詰組を配し、詰組の総数が増加する傾向にある。また、柱間比は、詰組数に応じて柱間寸法を広めているが、斗拱間隔は中間と脇間で異なり、詰組比と柱間比の関係は明確でなく、今後の検討課題としたい。

ここで、12棟の外観について眺めると(表4-2：主屋・裳階の表記を上下段に記した)、屋根は、単層裳階付、入母屋造、本瓦葺とし、主屋・裳階の軒反りは緩やかである(写真4-1、写真4-2)。垂木は現状で見る限り、主屋・裳階に地垂木と飛檐垂木を出すものが9棟(二軒)、その内、主屋・裳階の地垂木と飛檐垂木を平行垂木とし、隅も平行垂木とするもの4棟(写真4-3)、隅のみ扇垂木とするものが5棟ある(写真4-4)。甘露寺正殿、万寿観玄祖殿と斗姆宮慈航殿の3棟(一軒)は地垂木のみで、いずれも平行垂木とするが、甘露寺正殿の隅のみ扇垂木とする。垂木の断面形状は、主屋・裳階共にほぼ正方形とするものが5棟、厚板形すなわち幅が高さよりも広い長方形とするものが4棟、主屋・裳階の地垂木を丸形、飛檐垂木を正方形とするものが報恩寺華嚴殿1棟である。鼻隠板は、主屋・裳階の地垂木と飛檐垂木の先端に共に設けるものが5棟(二軒)、地垂木先端のみが3棟(一軒)、飛檐垂木先端のみが2棟(二軒)、全く設けないものが2棟(二軒)ある。柱間装置は、大壁式<sup>注10)</sup>が6棟、真壁式<sup>注11)</sup>が6棟あり、正背面の建具は、正面中間に3連の両開き扉、脇間に窓を設けるもの5棟、正面のみ3連の両開き扉を設けるものが5棟ある。基壇と礎石は簡素な扱いとされ、いずれも基壇は3尺以下とし、礎石は正方形と円形の礎盤を合わせたものである。

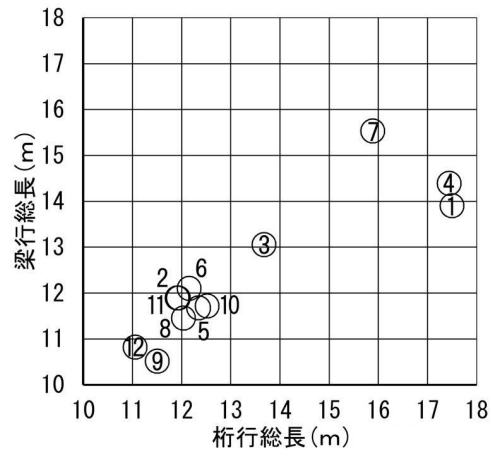


図4-3 一間裳階付仏殿桁行・梁行総長分布図



写真4-1 9. 圓通寺中殿・正面外観



写真4-2 7. 灵泉寺大雄宝殿・正面外観



写真4-3 5. 観音閣正殿・平行垂木



写真4-4 1. 宝輪寺大雄宝殿・扇垂木

### 4-3. 間架と架構システム

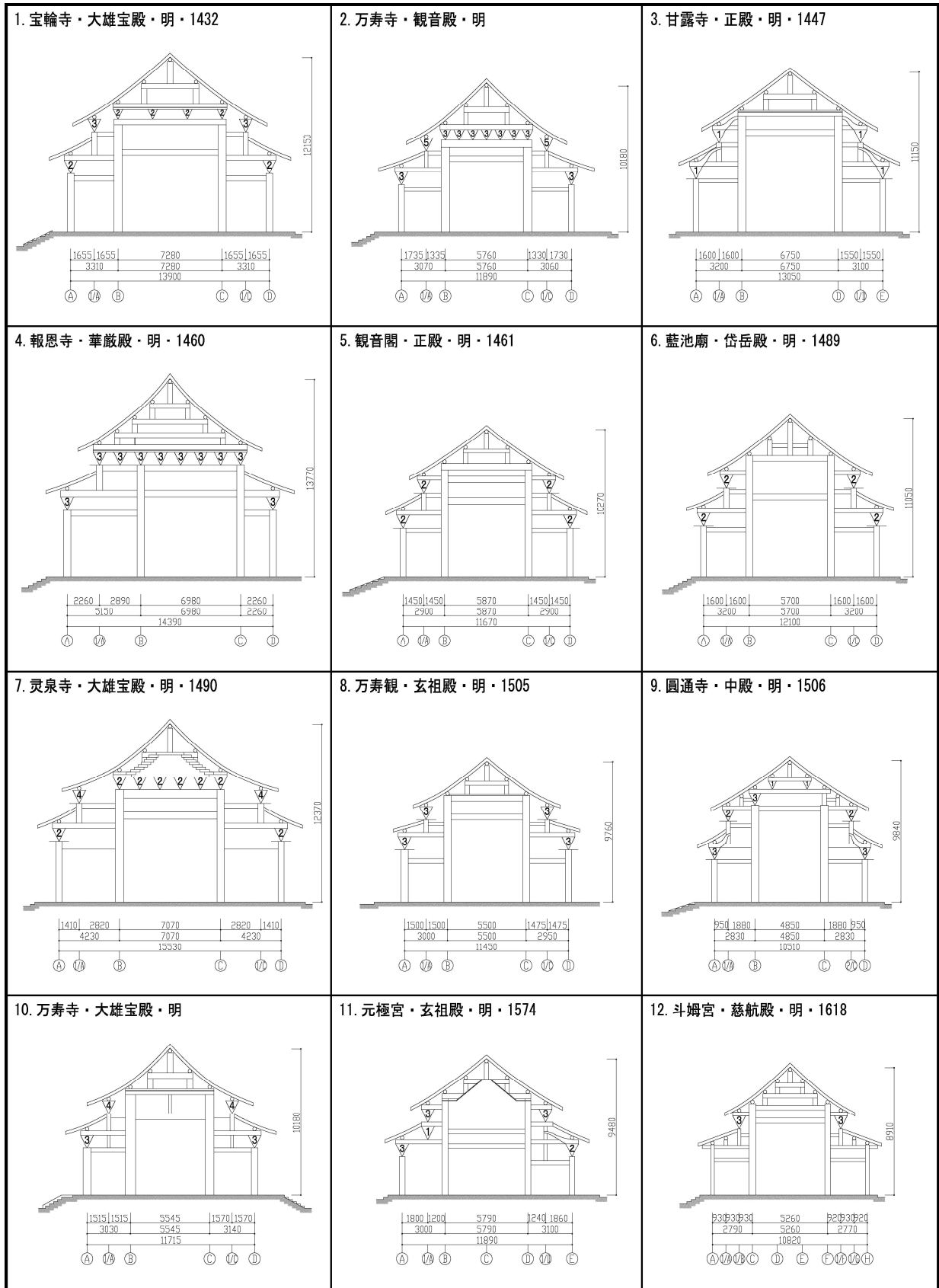
中国の寺廟建築の構造形式には、「抬梁式」と「穿闘式」の二種類がある。柱上に斗拱をおき、梁と束を交互に積上げ、梁の両端に母屋桁を載せて屋根を支えるものを抬梁式と呼び、華北・華中地方に多く用いられている。また、柱に穴を穿って貫を通し、横方向の柱間を固め、柱上に挿肘木斗拱を組み、柱頂に母屋桁を載せて屋根を支えるものを穿闘式と呼び、華南地方に多く用いられている。そこで、12棟の構造形式を把握するため、主屋・裳階の平面図に斗拱、虹梁、梁組を表記すると(図4-2)のようになる。これによると、いずれも抬梁式であり、華北・華中地方の構造形式に属していることが分かる。また、12棟の内部空間をみると、いずれも中央に太い主屋柱4本(柱径平均:約52.5cm)を立て、周囲に12~14本(1棟は20本)の裳階柱(柱径平均:約40.8cm)を立てている。そこで、内部空間について、主屋部分と裳階部分に分け、主屋柱と裳階柱を結ぶ繫梁による架構と屋根構造について検討してみたい。12棟の主屋・裳階について、梁行の架構図を一覧すると(図4-4)のようになる。各建物は、屋根を支える母屋桁の一つの間隔を1架とする「間架」を基準とするため、間架と架構を検討してみよう。

#### 1) 間架について

主屋部分では、4架とするものが10棟(1.宝輪寺大雄宝殿、2.万寿寺観音殿、3.甘露寺正殿、5.観音閣正殿、6.藍池廟岱岳殿、7.灵泉寺大雄宝殿、8.万寿観玄祖殿、9.圓通寺中殿、10.万寿寺大雄宝殿、11.元極宮玄祖殿)あり、6架(12.斗姆宮慈航殿)と8架(4.報恩寺華嚴殿)とするものが各1棟ある。主屋4架のものは、主屋柱間の棟木を中心に柱間を2架ずつ分けて計4架とし、6架のものは棟木と主屋柱との間を3架ずつに分けて計6架とする。また、8架のものは棟木と後方主屋柱との間を4架とし、ここでは、前方の主屋柱を内方に2架を移動させる移柱式を採用したため、前の主屋柱の外方に2架が残るが、本来、主屋部分では前方4架・後方4架の計8架となる。

また、裳階部分では、本来主屋柱に取り付く裳階屋根が、ここでは主屋柱と裳階柱を結ぶ繫梁上に立てた大瓶束上部に取り付いている。そのため、裳階は大瓶束を境にして内側裳階(仮称)と外側裳階(仮称)に分けられ、裳階の間架数は、内側裳階と外側裳階を合わせたものとなる。12棟の裳階は、裳階2架のものが9棟で主流となり、3架が2棟、1架が1棟となる。裳階2架は、外側1架、内側1架である。裳階3架のものには圓通寺中殿と斗姆宮慈航殿があり、圓通寺中殿では裳階の内側を2架、外側を1架としており、斗姆宮慈航殿では裳階の内側を1架、外側を2架としている。裳階1架のものには報恩寺華嚴殿がある。なお、報恩寺華嚴殿では『营造法式』にある主屋柱に直接裳階を取り付ける手法を用いており、本格的な裳階付仏殿の形式といえる(図4-5)。





記号：△：X手先斗拱；▽：X手先斗拱尾垂木付；単位：mm；

图 4-4 一間裳階付仏殿梁行架構図

表 4-2 一間裳階付仏殿意匠表 (左)

No	寺院名	建築名	建立年代	屋根形状	屋根材	垂木								天井
						地垂木			飛檐垂木			鼻隠板		
						断面型	隅部	平部	断面型	隅部	平部	地垂木	飛檐垂木	
1	宝輪寺	大雄宝殿	明・1432	単層裳階付入母屋	本瓦葺	正方形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	—	L
					本瓦葺	正方形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	—	
2	万寿寺	観音殿	明	単層裳階付入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	C
					本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	
3	甘露寺	正殿	明・1447	単層裳階付入母屋	本瓦葺	正方形	扇形	平行	—	—	—	○	—	L
					本瓦葺	正方形	扇形	平行	—	—	—	○	—	
4	報恩寺	華嚴殿	明・1460	単層裳階付入母屋	本瓦葺	丸棒形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	—	L
					本瓦葺	丸棒形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	—	
5	観音閣	正殿	明・1461	単層裳階付入母屋	本瓦葺	正方形	平行	平行	正方形	平行	平行	○	○	—
					本瓦葺	正方形	平行	平行	正方形	平行	平行	○	○	
6	藍池廟	岱岳殿	明・1489	単層裳階付入母屋	本瓦葺	正方形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	○	—
					本瓦葺	正方形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	○	
7	灵泉寺	大雄宝殿	明・1490	単層裳階付入母屋	本瓦葺	正方形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	○	C
					本瓦葺	正方形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	—	○	
8	万寿観	玄祖殿	明・1505	単層裳階付入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	—	—	—	○	—	L
					平瓦葺	厚板形	平行	平行	—	—	—	○	—	
9	圓通寺	中殿	明・1506	単層裳階付入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	—
					平瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	
10	万寿寺	大雄宝殿	明	単層裳階付入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	L
					本瓦葺	厚板形	平行	平行	厚板形	平行	平行	○	○	
11	元極宮	玄祖殿	明・1574	単層裳階付入母屋	本瓦葺	厚板形	扇形	平行	厚板形	扇形	平行	○	○	C
					本瓦葺	厚板形	扇形	平行	厚板形	扇形	平行	○	○	
12	斗姆宮	慈航殿	明・1618	単層裳階付入母屋	本瓦葺	厚板形	平行	平行	—	—	—	○	—	—
					本瓦葺	厚板形	平行	平行	—	—	—	○	—	

※ 各建物の行中は、上の行が主屋、下の行が裳階を示している。斗姆宮慈航殿の側面は7間であり、両側面下層斗拱では左2T:二手先斗拱; 2T-1:二手先斗拱一具; 2TR:擬似尾垂木付二手先斗拱; 2TR-1:擬似尾垂木付二手先斗拱一具; OB:持送梁; S&Q:形状及個数; A&C:評価認定; NCR:国文物; PCR:省文物; CCR:市文物

表 4-2 一間裳階付仏殿意匠表 (右)

斗拱															A&C
正面			両側面									背面			
柱上	中間中備	両脇間中備	1列目柱上	1-2中備	2列目柱上	2-3中備	3列目柱上	3-4中備	4列目柱上	4-5中備	5列目柱上	柱上	中間中備	両脇間中備	
形状	形状及個数	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状	形状及個数	形状及個数	
3T	3T-13	3T-5	3TR	—	3T	3T-2	3T	—	3TR	—	—	3T	3T-2	3T-1	
N	N	N	N	—	F	K	F	—	A/F	—	—	K	K	K	
2T	2T-2	2T-2	2TR	2T-1	2T	2T-2	2T	2T-1	2TR	—	—	2T	2T-2	2T-2	
F	F	F	A/F	F	F	F	F	F	A/F	—	—	F	F	F	
5T	5T-11	5T-1	5T	5T-2	5T	5T-11	5T	5T-2	5T	—	—	5T	5T-11	5T-2	
N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	—	—	N	N	N	
3T	3T-2	3T-1	3T	3T-1	3T	3T-2	3T	3T-1	3T	—	—	3T	3T-2	3T-1	
F	F	F	F	T	T	T	T	T	F	—	—	T	T	T	
1TR	1TR-2 HM-2	—	1TR	—	1TR	1TR-1 HM-2	1TR	—	1TR	—	—	1TR	1TR-2 HM-2	—	
T	T	—	T	—	T	T	T	—	T	—	—	T	T	—	
1TR	1TR-2 HM-2	HM-1	1TR	HM-1	1TR	HM-1	1TR	HM-1	1TR	HM-1	1TR	1TR	1TR-2 HM-2	HM-1	
T	T	—	T	—	T	—	T	—	T	—	T	T	T	T	
3TR	3TR-3	3TR-1	3TR	3T-1	3T	3T-4	3T	—	—	—	—	3T	3T-4	3T-1	
A/K	A/K	A/K	A/K	K	K	K	A/K	—	—	—	—	K	K	K	
3T	3T-4	3T-3	3T	3T-3	3T	3T-4	3T	—	3T	—	—	3T	3T-4	3T-3	
A/K	A/K	A/K	A/K	K	K	K	K	—	A/K	—	—	A/K	K	K	
2TR	2TR-4	—	2TR	—	2TR	2TR-4	2TR	—	2TR	—	—	2TR	2TR-4	—	
K	K	—	K	—	K	K	K	—	K	—	—	K	K	—	
2TR	2TR-4	2TR-1	2TR	2TR-1	2TR	2TR-4	2TR	2TR-1	2TR	—	—	2TR	2TR-4	2TR-1	
F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	—	—	F	F	F	
2TR	2TR-2	—	2TR	—	2TR	2TR-2	2TR	—	2TR	—	—	2TR	2TR-2	—	
K	K	—	K	—	K	K	K	—	K	—	—	K	K	—	
2TR	2TR-2	2TR-1	2TR	2TR-1	2TR	2TR-2	2TR	2TR-1	2TR	—	—	2TR	2TR-2	2TR-1	
K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	—	—	K	K	K	
4TR	4TR-4	4TR-1	4TR	4TR-1	4TR	4TR-4	4TR	4TR-1	4TR	—	—	4TR	4TR-4	4TR-1	
K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	—	—	K	K	K	
2TR	2TR-4	2TR-2	2TR	2TR-2	2TR	2TR-4	2TR	2TR-2	2TR	—	—	2TR	2TR-4	2TR-2	
K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	—	—	K	K	K	
3TR	3TR-3	—	3TR	—	3TR	3TR-3	3TR	—	3TR	—	—	3TR	3TR-3	—	
K	K	—	K	—	K	K	K	—	K	—	—	K	K	—	
3TR	3TR-1 3T-10	3T-5	3TR	3TR-1	2T	2T-2	2T	2T-1	2T	—	—	2T	2T-2	2T-1	
N/A	N/A N	N	N/A	F	F	F	F	F	A/F	—	—	F	F	F	
2TR	2TR-3	2TR-1	2TR	2TR-1	2TR	2TR-2	2TR	2TR-1	2TR	—	—	2TR	2TR-3	2TR-1	
F	K	K	K	K	F	K	F	K	K	—	—	F	K	K	
3TR	3TR-3	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	3TR-2	3TR	3TR-1	3TR	—	—	3TR	3TR-3	3TR-1	
F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	—	—	F	F	F	
4T	4T-2	—	4T	—	4T	4T-2	4T	—	4T	—	—	4T	4T-2	—	
T	T	—	A/F	—	T	T	T	—	A/F	—	—	T	T	—	
3TR	3T-2	3T-1	3TR	3T-1	3T	3T-2	3T	3T-1	3T	—	—	3T	3T-2	3T-1	
A/F	F	F	A/F	T	T	T	T	T	A/F	—	—	F	F	F	
3T	3T-2	—	3T	—	3T	3T-1	3T	—	3T	—	—	3T	3T-2	—	
A/T	A/T	—	A/T	A/T	A/T	A/T	A/T	—	A/T	—	—	A/T	A/T	—	
3T	3T-2	3T-1	3T	3T-1	2T	2T-1	2T	2T-1	2T	2T-1	2T	2T	2T-2	2T-1	
F	F	F	A/F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	
3T	3T-2	—	3T	—	3T	3T-2	3T	—	3T	—	—	3T	3T-2	—	
T	T	—	A/T	—	T	T	T	—	A/T	—	—	T	T	—	
OB	—	—	OB	—	—	—	—	—	—	—	—	OB	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

から柱上、中備また柱上の順位で表している。

HM:平三斗; A:斜拱; N:如意斗拱; K:計心造; T:偷心造; F:計心造と偷心造の複合造; L:格天井; C:藻井天井;

## 2) 架構について

一間裳階付仏殿平面図(図4-2)を眺めてみると、12棟は、いずれも主屋柱と裳階柱の間に桁行、梁行の2方向の繫梁(下段)を渡している。また、主屋柱から裳階柱の斗拱上部に桁行、梁行、隅行の3方向に繫梁3挺(上段)を架け(灵泉寺大雄宝殿は隅行の繫梁でなく火打梁を4挺用い、元極宮玄祖殿は背面両隅に火打梁2挺を用い、梁上に大瓶束を各1本立てる)、上段の3挺の繫梁上に大瓶束3本を立て、裳階屋根の母屋桁と隅木を支えるものが一般的である(写真4-5)。

一方、12棟の平面の隅部分をみると、主屋柱1本と裳階柱3本をほぼ正方形の位置に立てており、これは対角線上に渡す裳階の隅木を真隅とするためとみられる(写真4-6)。宝輪寺大雄宝殿、報恩寺華嚴殿背面のように振れ隅を生じる場合には、裳階隅柱から45°の隅木を内方に延し、主屋柱から桁行に延びる繫梁或いはこれに直交する繫梁との交点を求め、裳階の真隅となる位置に大瓶束を立てており、いずれも裳階の屋根勾配を一致させるためと考えられる(写真4-7)。また、全架構を眺めると、火打梁を用いるものが前述の2棟を含めて3棟(甘露寺正殿、灵泉寺大雄宝殿、元極宮玄祖殿)あり、甘露寺正殿では、裳階の4隅に4挺の火打梁を渡し、主屋柱と裳階隅柱の間に隅行の繫梁を併用することで、より堅固なシステムとしている(写真4-8)。

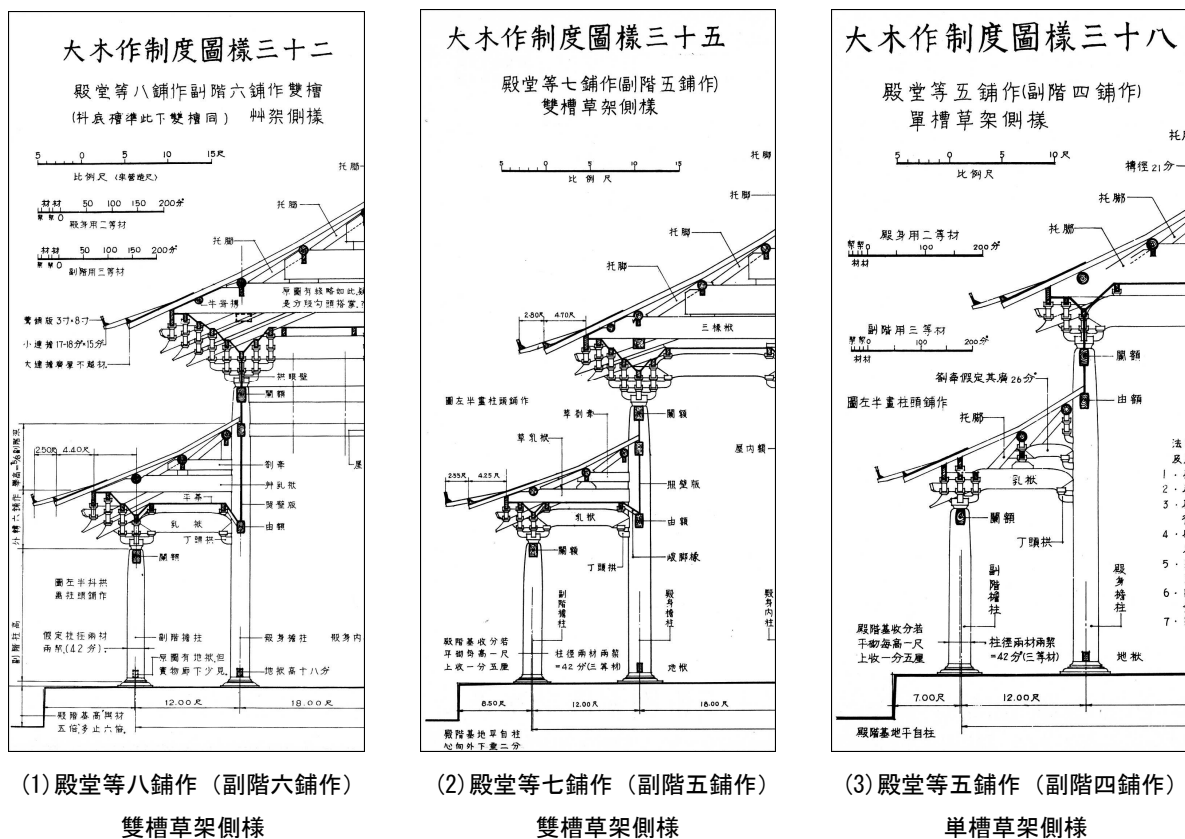


図4-5 『営造法式』 殿堂草架側様図(梁行断面図)

(出典: 『営造法式注釋(巻上)』 明文書局 1984 年刊)



写真4-5 5. 観音閣正殿・主屋柱と裳階柱間の架構



写真4-6 2. 万寿寺観音殿・真隅



写真4-7 1. 宝輪寺大雄宝殿・振隅



写真4-8 3. 甘露寺正殿・火打梁

#### 4-4. 斗拱の形態

斗拱は、中国伝統木造建築の重要な構成要素の一つである。屋根荷重を桁から受ける卷斗、その荷重を伝達する肘木、それらの荷重を集約して柱に伝える大斗から成り、これに尾垂木等を加えて様々な様式を生み出している。12棟の建物は、前述のように華北・華中地方の抬梁式の伝統を継承し、主屋・裳階では各々同様の斗拱を四周に配することを基本とする。しかし、各建物の斗拱は、手先、組手、「斜拱」（桁行、梁行と45°振れる肘木）の有無等による違いを見せているので、先ず、裳階・主屋の斗拱の外観（外側）について取り上げ（表4-2）、柱上斗拱の見上げ図・正面図・断面図を示し、その隣に中備斗拱の断面図を加えた（図4-6、図4-7）。次に、隅斗拱の内、斜拱を用いるものについて、正面図・見上げ図を（図4-8）を示し、模式図を（図4-9）に取り上げた。さらに、斜拱を横一列に並べた「如意斗拱」と呼ばれる組物を取り上げた（図4-10～12）。このように、12棟の斗拱は多様な形式を示しているので、斗拱の手先数、配列位置、細部様式等を分析することとし、1) 手先数、2) 柱上斗拱、3) 中備斗拱、4) 隅斗拱、5) 如意斗拱に分けて検討する。

##### 1) 手先数について

12棟の組物を一覧すると、斗拱の手先数は五手・四手・三手・二手・一手先と持出梁の6種に分類される。そこで、12棟の建物と主屋・裳階の手先数を示すと、次のようになる。(1) 五手先 (2. 万寿寺観音殿：五手・三手)、(2) 四手先 (7. 灵泉寺大雄宝殿：四手・二手、10. 万寿寺大雄宝殿：四手・三手)、(3) 三手先 (1. 宝輪寺大雄宝殿：三手・二手、4. 報恩寺華嚴殿：三手・三手：8. 万寿観玄祖殿：三手・二手<sup>注12)</sup>、9. 圓通寺中殿：二手・三手、11. 元極宮玄祖殿：三手・二手<sup>注12)</sup>)、(4) 二手先 (5. 観音閣正殿：二手・二手、6. 藍池廟岱岳殿：二手・二手)、(5) 一手先 (3. 甘露寺正殿：一手・一手)、(6) 持出梁 (12. 斗姆宮慈航殿：三手・持出梁) である。このように、12棟の斗拱の手先数は、三手先或いは二手先を用いるものが多く、主屋では裳階より一手多い斗拱を用いるものが約半数を占めている。

##### 2) 柱上斗拱について

柱上斗拱は、外側では各手先肘木の先端に秤肘木を置いて上方の肘木を支え、一手・二手・三手先目にも同様の組物を重ねるのが本格的な形式であり、『营造法式』では「計心造」と呼ばれる（写真4-9）。しかし、12棟の中には、手先肘木端の秤肘木を用いず、手先肘木が直接上方の手先肘木を支えて縦一列に組むものがあり、これを「偷心造」と呼んでいる（写真4-10）。12棟の中で、全計心造を採用するものは報恩寺華嚴殿、藍池廟岱岳殿、灵泉寺大雄宝殿の3棟である（写真4-11）。この他の建物では、一手目、二手目等の秤肘木を省略するもの、秤肘木の代りに装飾材（麻叶云）

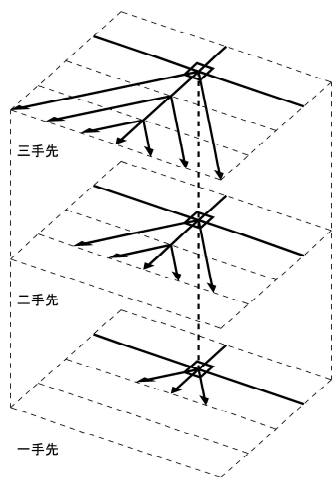


図 4-9  
斗栱手先と斜斗モデル図

を加えるもの(写真 4-12)、さらに、軒桁を支える手先肘木の代りに内部の繫梁先端を持出梁として用いるものがあり、これらは、計心造と偷心造を併用した複合式の斗栱となる。なお、主屋・裳階の斗栱に着目すると、観音閣正殿、圓通寺中殿のように主屋を計心造とし、裳階に複合式の斗栱を用いるものがあり、これも前述の事例のように主屋の斗栱をより重厚に見せる効果を生んでいる。一方、斜栱については、古くは 45° と 60° 傾斜のものがあったが<sup>註13)</sup>、ここでは 45° の斜栱が用いられ、柱上斗栱の外側を装飾的に扱うものが現れている。中には、万寿寺大雄宝殿・裳階のように手先肘木の両脇に斜栱を 2 方向に出し、手先肘木の一手目に 1 本、二手目に 2 本、三手目に 3

本と肘木を増やし、その先端を擬似尾垂木として放射状に広げる三手先斗栱等が現れている(図 4-9)。なお、柱上斗栱の内観(内側)では、前述のように主屋柱から裳階柱上に繫梁が渡されるため、斗栱の手先数は外側と同一にするか、一手減じて繫梁の下端を支えるものが一般的である。

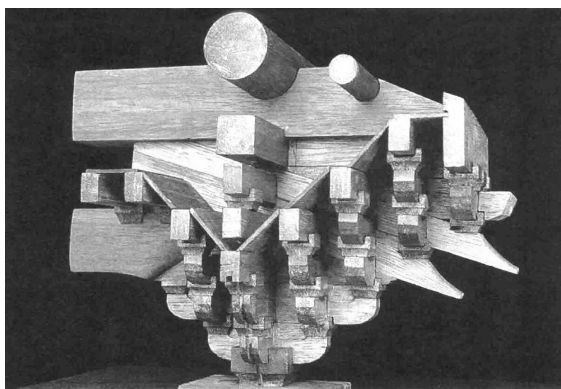


写真 4-9 計心造

(出典：『斗栱』 東南大学出版社 2017 年刊)

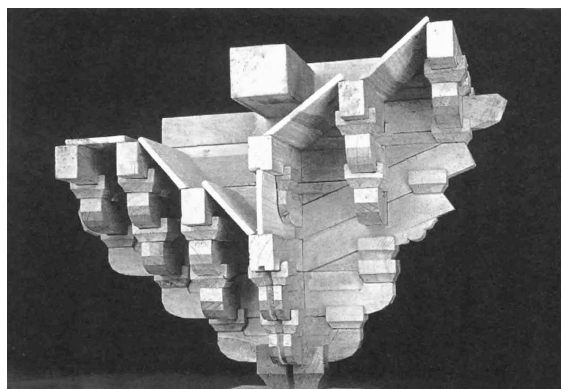


写真 4-10 偷心造

(出典：『斗栱』 東南大学出版社 2017 年刊)

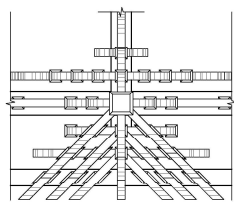


写真 4-11 7. 灵泉寺大雄宝殿・主屋正面斗栱

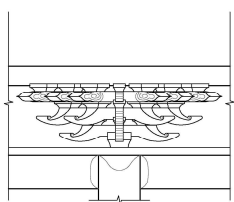


写真 4-12 10. 万寿寺大雄宝殿・主屋正面斗栱

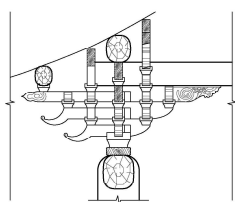
三手先斗拱



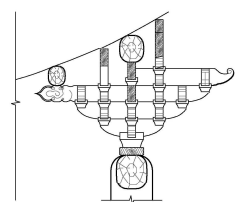
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図

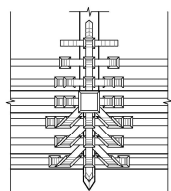


柱上斗拱側面図

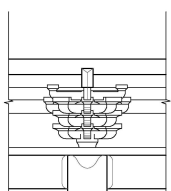


中備斗拱側面図

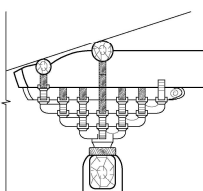
10. 万寿寺大雄宝殿・正面柱上及中備斗拱



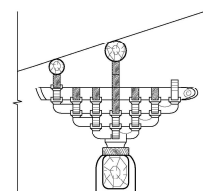
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図

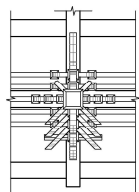


柱上斗拱側面図

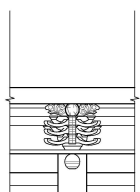


中備斗拱側面図

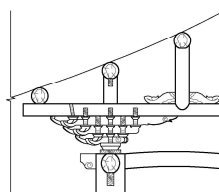
4. 報恩寺華嚴殿・正面柱上及中備斗拱



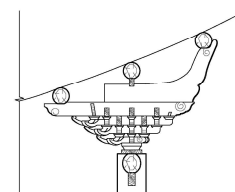
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図

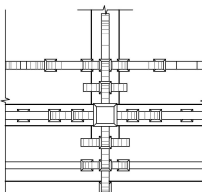


柱上斗拱側面図

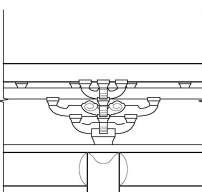


中備斗拱側面図

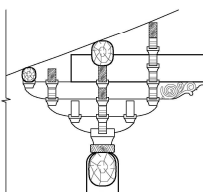
9. 圓通寺中殿・正面柱上及中備斗拱



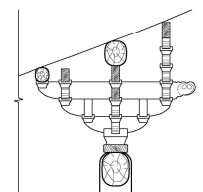
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図



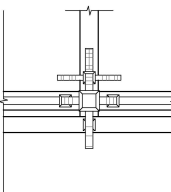
柱上斗拱側面図



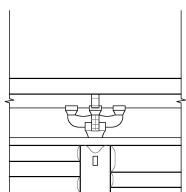
中備斗拱側面図

2. 万寿寺観音殿・正面柱上及中備斗拱

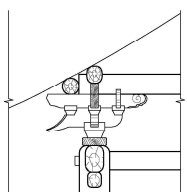
一手先斗拱



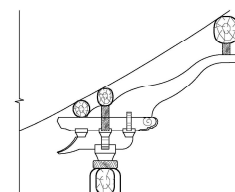
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図



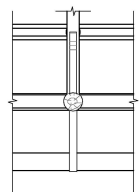
柱上斗拱側面図



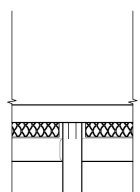
中備斗拱側面図

3. 甘露寺正殿・正面柱上及中備斗拱

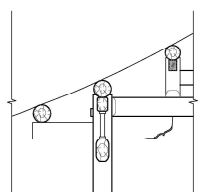
持出梁



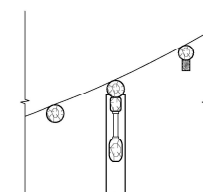
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図



柱上斗拱側面図



中備斗拱側面図

12. 斗姆宮慈航殿・正面柱上及中備持出梁

图 4-6 裳階柱上及中備斗拱 (左)



二手先斗拱

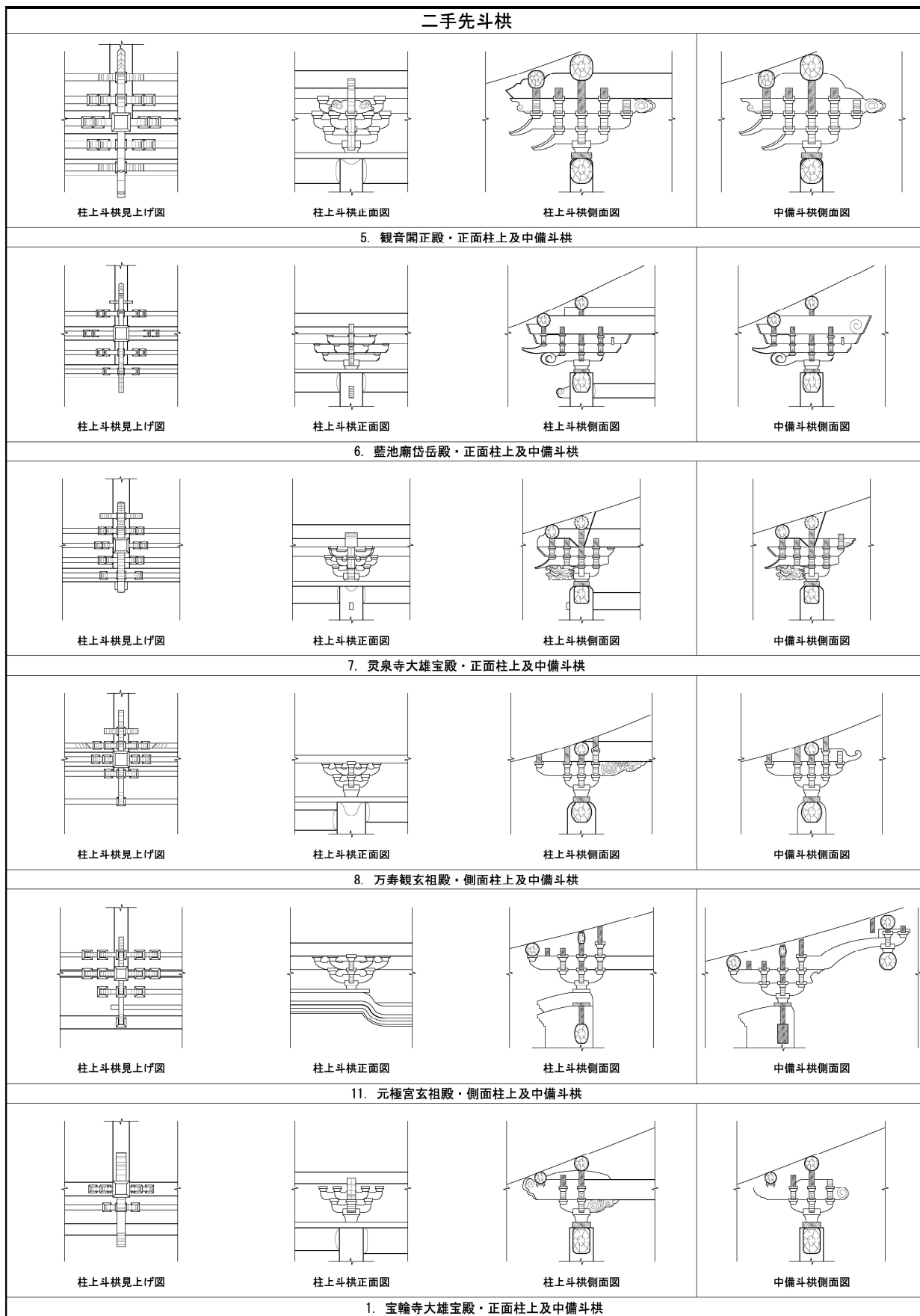
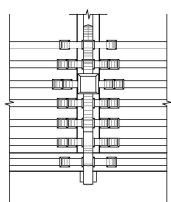
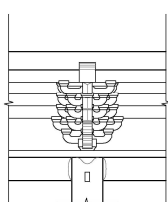


图 4-6 裳階柱上及中備斗拱 (右)

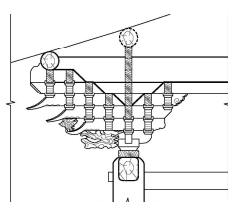
四·五手先斗拱



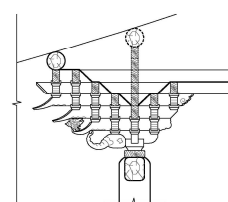
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図

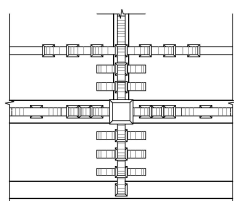


柱上斗拱側面図

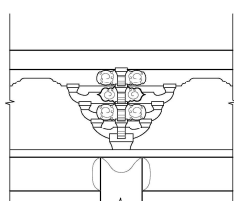


中備斗拱側面図

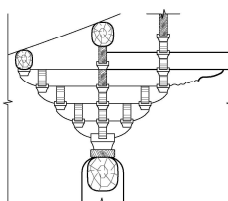
7. 灵泉寺大雄宝殿・正面柱上及中備斗拱（四手先）



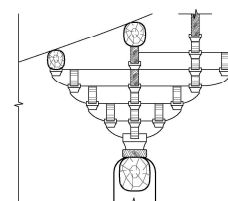
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図

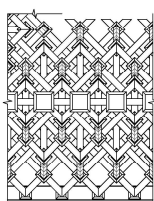


柱上斗拱側面図

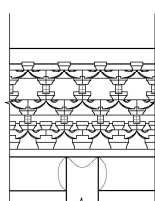


中備斗拱側面図

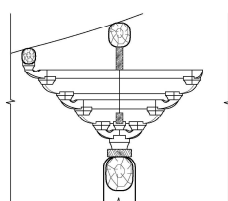
10. 万寿寺大雄宝殿・正面柱上及中備斗拱（四手先）



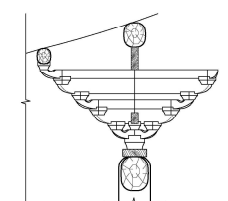
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図



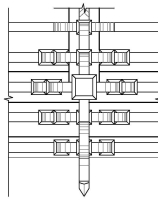
柱上斗拱側面図



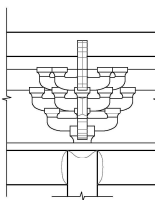
中備斗拱側面図

2. 万寿寺観音殿・正面柱上及中備斗拱（五手先）

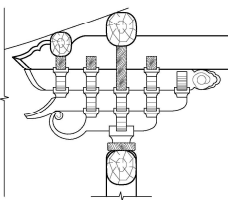
二手先斗拱



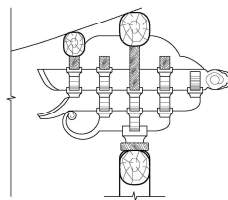
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図

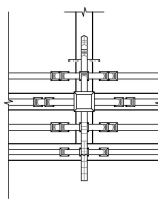


柱上斗拱側面図

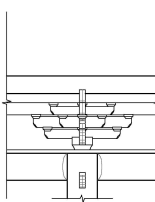


中備斗拱側面図

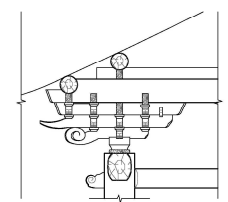
5. 観音閣正殿・正面柱上及中備斗拱



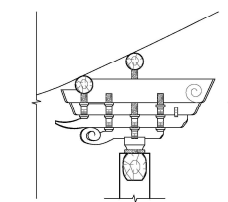
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図

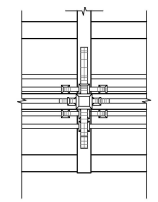


柱上斗拱側面図

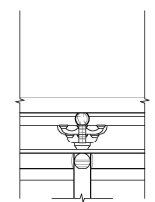


中備斗拱側面図

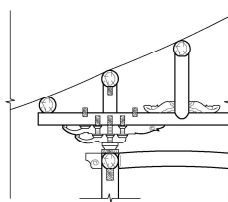
6. 藍池廟岱岳殿・正面柱上及中備斗拱



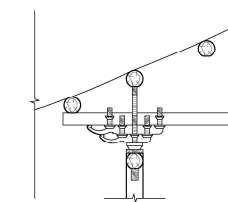
柱上斗拱見上げ図



柱上斗拱正面図



柱上斗拱側面図



中備斗拱側面図

9. 圓通寺中殿・正面柱上及中備斗拱

图 4-7 主屋柱上及中備斗拱（左）

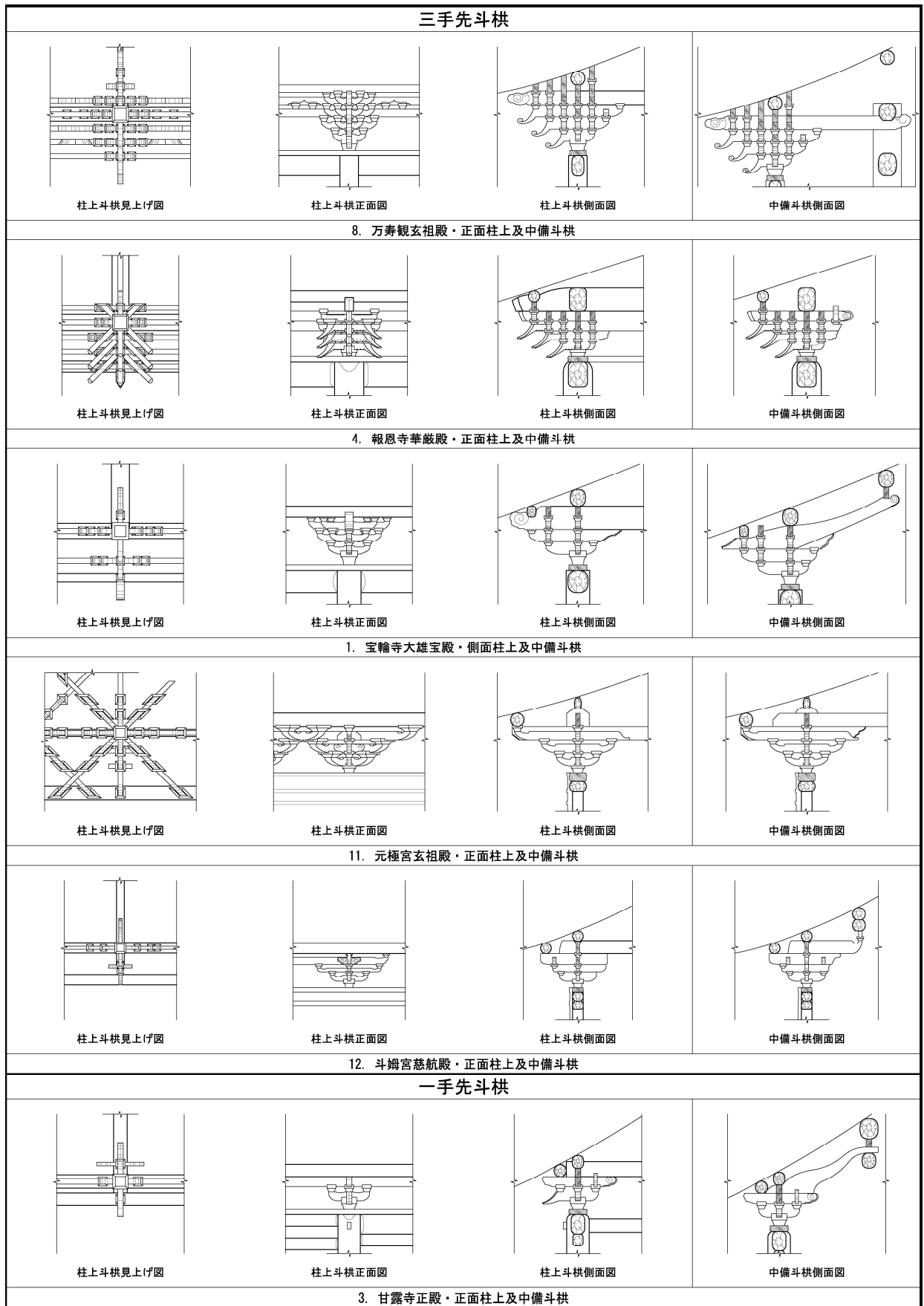


图 4-7 主屋柱上及中備斗拱 (右)

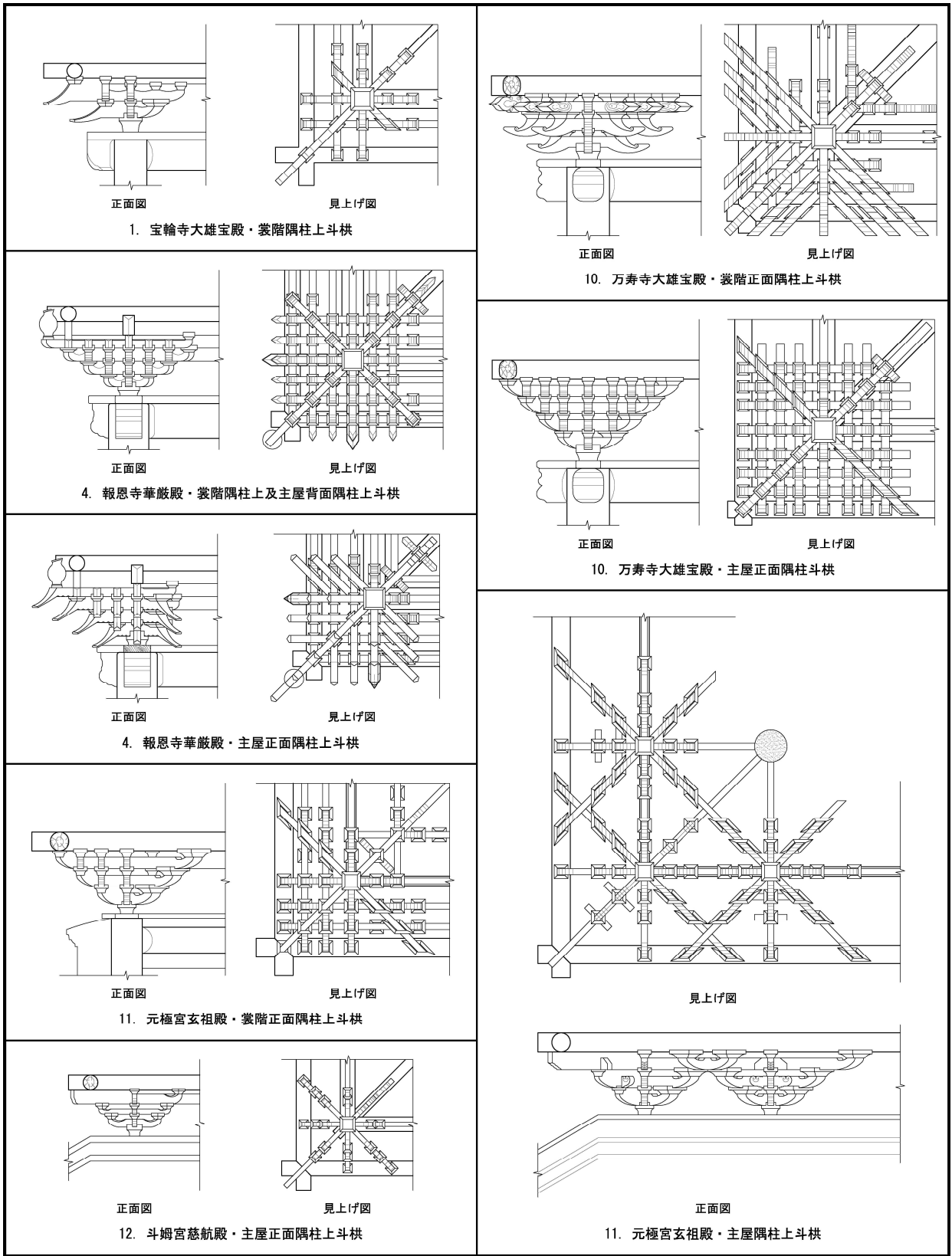


图 4-8 隅柱上斗拱立面图·見上図

### 3) 中備斗拱について

中備斗拱は、柱上斗拱の間に同様の手先数で配され、軒荷重を支持し、軒下の意匠的な役割を果している。斗拱の様式は、柱上斗拱と同形式とするものを基本とするが、12棟の裳階正面では前述のように中間を脇間より広くとり、中備斗拱を多く入れ、柱上斗拱に斜栱を用いるなどしたため、斗拱の間隔が狭くなり、万寿寺大雄宝殿・裳階では計心造とせず、二手先・三手先目では前方に手先肘木のみを延ばす偷心造としている（写真 4-13）。これは、中備斗拱の内側にも用いられ、柱上斗拱のように繫梁が渡されないため、手先肘木のみ前方に出す偷心造が見られる（写真 4-14）。一方、甘露寺正殿・裳階のように、中備斗拱の内側において真昂尾垂木が用いられなくなったものでは、この位置に湾曲した尾垂木尻（仮称：小型登梁）を用い、曲材下部に偷心造の斗拱を置いて構造的な安定を図っている（写真 4-15）。



写真 4-13 10. 万寿寺大雄宝殿  
裳階正面中備斗拱・外側



写真 4-14 10. 万寿寺大雄宝殿  
裳階正面中備斗拱・内側



写真 4-15 3. 甘露寺正殿・裳階中備斗拱尾垂木尻

#### 4) 隅斗栱について

隅斗栱は、建物の桁行（X方向）と梁行（Y方向）の軒桁が交差する隅柱上において、軒荷重を支える役割を担っている。そのため、斗栱外側ではXとY方向の肘木の広がりをおうために隅行の肘木（隅肘木と仮称）を延ばしている。12棟の中には、隅柱上に内部から隅肘木を出し、これに直交する斜栱（隅斜栱と仮称）を隅柱上で交差させるものがある。隅斗栱はX・Y・隅行の3方向と45°の隅斜栱の2方向を加えた都合5方向の肘木が外側に出されたことで、大きく4つの様式が現われている（図4-8）。一つ目は、隅柱上で5方向の肘木を延ばし、各手先肘木を独立して5方向に広げるもの（斗栱宮慈航殿・主屋）（写真4-16）。二つ目は、隅柱上で5方向の肘木を延ばし、各手先を水平と垂直に格子状に組み、立体的に組手を見せるもの（報恩寺華嚴殿・裳階）（写真4-17）。三つ目は、隅柱上から5方向の肘木を出し、X・Y・隅の3方向の間では互いに連結して手先肘木を格子状に組み、隅斜栱の2方向では手先毎肘木を出し、いずれも先端を擬似尾垂木とするもの（報恩寺華嚴殿・主屋）（写真4-18）。四つ目は、隅柱上から5方向の肘木を出し、X・Y・隅の3方向の間



写真4-16 12. 斗栱宮慈航殿・主屋隅斗栱



写真4-17 4. 報恩寺華嚴殿・裳階隅斗栱



写真4-18 4. 報恩寺華嚴殿・主屋隅斗栱



写真4-19 10. 万寿寺大雄宝殿・裳階隅斗栱

では各手先毎に隅行1方向、隅斜栱2方向とし、前述のように各手先に1本、2本、3本と独立した斜栱を出し、先端を擬似尾垂木として放射状に広げるものである（万寿寺大雄宝殿・裳階）（写真4-19）。

### 5) 如意斗栱について

12棟の母屋・裳階の正面では、前述のように中間を脇間の1.5~2.0倍程と広くとり、柱間に中備斗栱を多く配置したものは、斗栱は密接するようになり、斜栱を用いたものでは両脇の肘木と連結され、全体を網目状に組み合わせるものが現れており、この組物は如意斗栱或いは「鴛鴦交斗栱」とも呼ばれる<sup>注14)</sup>。12棟の主屋・裳階中には、3つのタイプの鴛鴦交斗栱が認められる。第1の

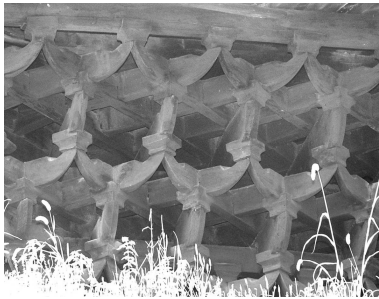


写真4-20 2. 万寿寺観音殿・主屋如意斗栱（「二葉栱」）



写真4-21 1. 宝輪寺大雄宝殿・主屋正面如意斗栱（「三葉栱」）

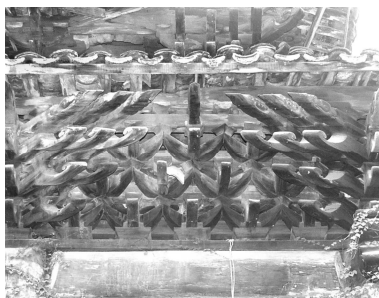


写真4-22 8. 万寿観玄祖殿・裳階正面如意斗栱（「二葉栱」と「斜栱」）

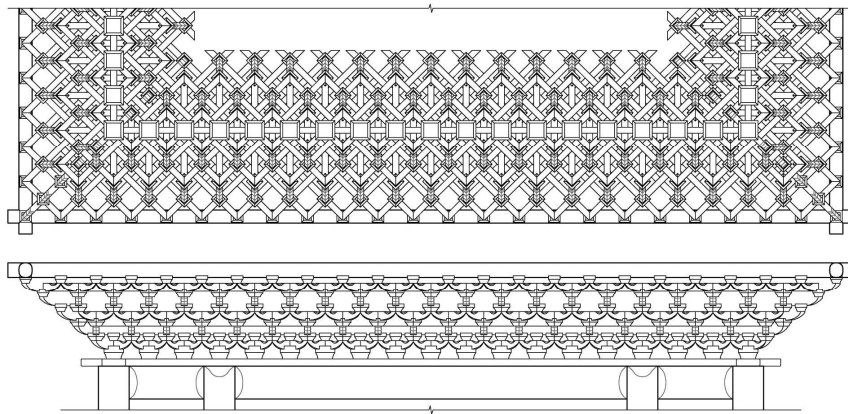


图 4-1 0 2. 万寿寺观音殿·主屋如意斗拱见上げ图(上)·立面图(下)

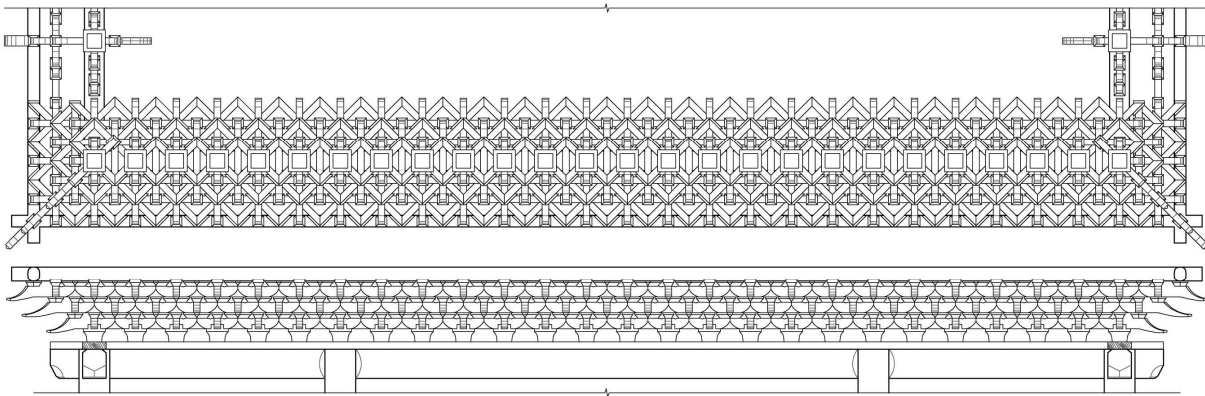


图 4-1 1 1. 宝轮寺大雄宝殿·主屋正面如意斗拱见上げ图(上)·立面图(下)

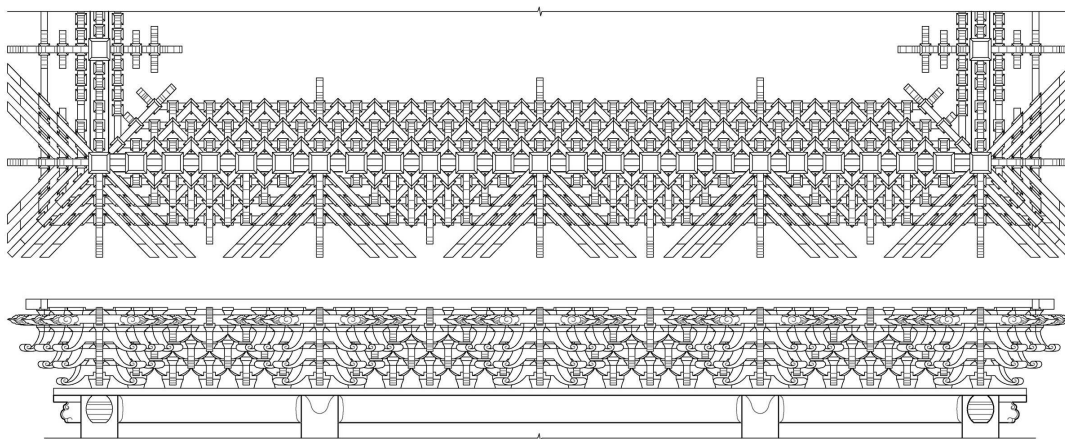


图 4-1 2 8. 万寿観玄祖殿·裳階正面如意斗拱见上げ图(上)·立面图(下)



タイプは万寿寺観音殿・母屋のように、大斗から斜栱を左右に2本出し、その結合部から手先肘木を1本出し、その上部では再び斜栱2本を出すものがあり、これを「二葉栱」と呼び、これを繰り返して五手先の組物とし、主屋の四周に巡らしている（図4-9、写真4-20）。第2のタイプは宝輪寺大雄宝殿・主屋のよう大斗から手先肘木1本と左右の斜栱2本の3本を出すものであり、これを「三葉栱」と呼び、斜栱の結合部から再び3方向の肘木を出し、これを繰り返して三手先の組物とし、主屋の正面にのみ用いている（図4-10、写真4-21）。第3のタイプは万寿観玄祖殿・裳階のように、第2タイプと同じ三葉栱を用いる鴛鴦交斗栱を設けることで、中備斗栱の役割を果し、柱上斗栱は独立した組物とし、外側では一手、二手、三手先と肘木を出し、その左右に斜栱を手先数に合わせて1本、2本、3本と出し、3方向の肘木の前端を擬似尾垂木としており、2つの様式による複合的な構成としている（図4-11、写真4-22）。

#### 4-5. 天井の形態

12棟の天井は、主屋部分の上部に天井を張るものが8棟あり、その他は化粧屋根裏としている。天井は、主屋柱頂の四方の大虹梁上に張り、5棟が格天井、3棟が八角形の「藻井天井」としている。藻井天井は『营造方式』にも取り上げられ、華北地方では金、遼代、華中地方では宋代の遺構に見られる伝統的な意匠である<sup>注15)</sup>。2. 万寿寺観音殿では、4挺の大虹梁の隅に小梁を渡して八角形を造り、その上に二手先斗栱を組み、藻井天井の下段部分の形状を造り出している（図4-13、写真4-23）。7. 灵泉寺大雄宝殿では、4挺の大虹梁上に二手先斗栱を置き、上部に角材と板材で八角形を造り、八角形の材を縮小しながら交互に重ね、略式ながら藻井天井を造り出し（図4-14、写真4-24）、主屋の中央部に一層の上昇感を生み出している。

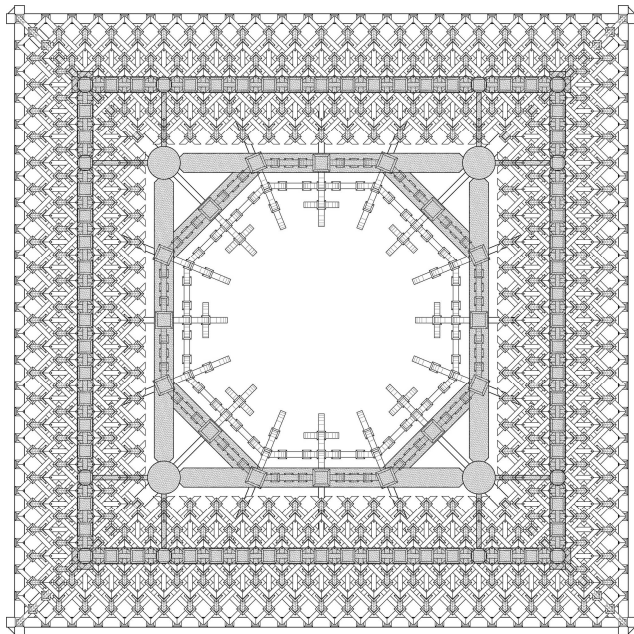


図4-13 2. 万寿寺観音殿・天井見上げ図

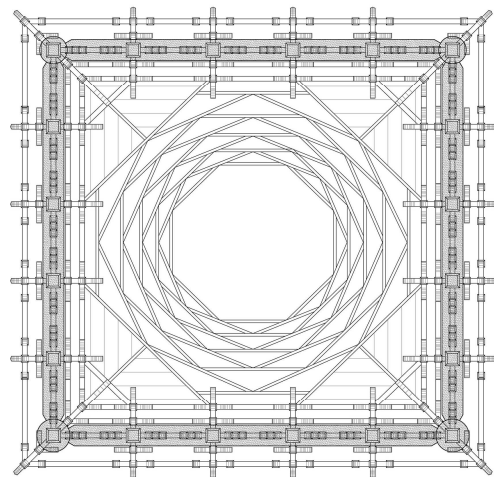


図4-14 7. 灵泉寺大雄宝殿・天井見上げ図



写真4-23 2. 万寿寺観音殿・藻井天井

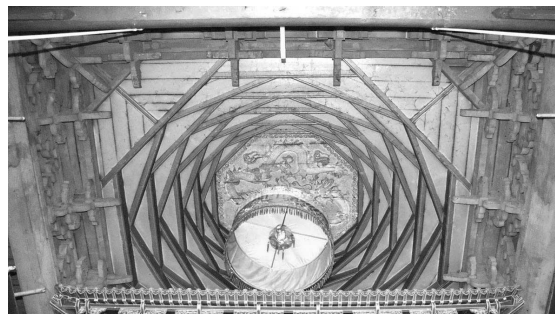


写真4-24 7. 灵泉寺大雄宝殿・藻井天井

#### 4-6. 結び

本稿では、四川省の明代の一間裳階付仏殿 12 棟について、外観、平面、架構、斗栱、天井などの建築的な特質について検討した。その特徴は、次のように纏められる。

##### 1) 外観・平面寸法と柱間配置

外観は、単層裳階付、入母屋造、本瓦葺とし、主屋・裳階の軒反りは緩やかである。平面は、桁行 3 間、梁行 3 間乃至 4 間・7 間とし、1 辺を 11m~13m 程とするものが多く、正方形とやや横長の長方形とするものがある。柱間寸法は、裳階正面では中間を脇間の 1.5 倍~2.0 倍程に広くとるものが一般的である。各建物の正面の脇間：中間：脇間の詰組比は 1：2：1 が最も多く（4 棟）、次に 1：4：1 が続き（2 棟）、この他は 1：3：1 のもの、2：4：2 のもの、3：4：3 のものが各 1 棟あり、中間に多くの詰組を配し、詰組の総数を増加する傾向が認められる。柱間装置は、周囲を大壁式或いは真壁式とし、両側背面を壁とするが、背面中間に 3 連の両開き扉を設けるものが半数以上あり、正面中間には 3 連の両開き扉、両脇に窓を設けるものが一般的である。

##### 2) 間架と架構システム

構造は、柱上に斗栱をおき、柱間に繫梁と束を用いて小屋を組む抬梁式を基本とする。内部空間は主屋部分と裳階部分に分かれ、間架は主屋部分では中央の棟木を中心とし、前後に 4 架、裳階部分では内側と外側に 1 架と 2 架にとるものが多い。架構は、主屋柱から裳階柱に桁行、梁行の 2 方向に繫梁（下段）を渡し、さらに桁行、梁行、隅行の 3 方向にも裳階柱斗栱上に繫梁（上段）を渡し、中には火打梁を渡すものもあるが、3 方の繫梁上に大瓶束を 3 本立てるのが一般的である。また、平面の隅部では主屋柱 1 本・裳階柱 3 本を正方形の位置に立て、裳階屋根の隅木を真隅としており、振れ隅のものでは裳階隅柱から 45° の隅木を内方に延し、主屋柱から桁行に延びる繫梁或いはこれに直交する繫梁との交点を求め、裳階の真隅となる位置に大瓶束を立てている。そして、これらの大瓶束上部に裳階屋根を取り付け、束頂に斗栱を載せ、主屋屋根を支える架構システムが一般的である。

##### 3) 斗栱の形態

斗栱は、五手先・四手先・三手先・二手先・一手先・持出梁の 6 種類が用いられ、その内、三手先と二手先を用いるものが多い。主屋・裳階の斗栱をみると、五手先と三手先、四手先と三手先、三手先と二手先のように、高い位置にある主屋の手先数を増し、壮麗な斗栱を用いることで、建物の威厳と重厚感を現している。また、斗栱には手先肘木先端に秤肘木を用いる計心造と用いない偷心造があるが、本格的な全計心造の斗栱は少なく、両者を併用した複合式の斗栱が多くを占める。

一方、柱上斗栱では、手先肘木と両脇の斜栱の3方向に肘木出すもの、隅斗栱ではX・Y・隅の肘木に加え、隅行肘木に直交する斜栱を合わせた5方向に肘木を出すものがあり、いずれも先端を擬似尾垂木として、斗栱の外観を装飾的に扱うものが現れている。中には、如意斗栱（鴛鴦交斗栱）を用いるものがあり、これらの手先肘木の先端では二葉栱、三葉栱を用いることで、柱上斗栱と中備斗栱を一体化し、斗栱の装飾性を一層高めている。

#### 4) 天井の形態

天井は、主屋部分である中央部に半数以上が設けており、その多くが主屋柱の大虹梁上に格天井を張っている。中には、八角形の藻井天井とするものがあり、それらは略式ながら主屋柱の上部に四角形或いは八角形の梁を組み、その周囲に斗栱を配し、その中央を開放するもの、八角形の木杵を小型化して交互に積み重ねるもの等があり、いずれも主屋空間に上昇感を生んでいる。

## 注釈

- 注 1) 本稿で取り上げた万寿寺大雄宝殿、同観音殿、万寿観玄祖殿は「四川省宜賓市の明代一間裳階付仏殿について—中国西南地方の寺廟建築の研究(6)」(日本建築学会大会学術講演梗概集・2011年8月)、宝輪寺大雄宝殿は、「重慶市の明代の一間裳階付仏殿について—中国西南地方の寺廟建築の研究(12)」(同上梗概集・2020年9月)において紹介している。
- 注 2) (表 4-1)は建立年代の古い順に取り上げ、年代が確定しないものは細部様式により判断して順序を決めた。
- 注 3) 本稿では、12棟の建物の番号について、説明上各節の初出の際に番号を付し、2回目以降は省略した。次の節においても同様の扱いとした。
- 注 4) 参考文献 7)に同じ、但し、四川分冊・中, pp. 346 を参照。
- 注 5) 参考文献 7), pp. 712 を参照。
- 注 6) 柱間寸法は、実測寸法を記載(メートル法)している。
- 注 7) 中間寸法を広くとる理由は現時点では明らかでないが、仏教、道教の寺院では明代において、阿弥陀三尊、道教三神、中尊・脇侍 3 体を祀る例が多く見られ、尊像の安置が中間拡大の要因の一つとなった可能性がある。
- 注 8) 「アイタ」の制について、関口欣也博士は中世禅宗様仏堂の柱間において、中備を詰組とする場合、中間と脇間の柱間寸法の比率を 3 : 2 にする木割法であるとし、斗栱間隔を等しく割付けて柱間を決定する技法とされる(中世禅宗様仏堂の柱間(1), 日本建築学会論文報告集, 第 115 号, p44-51, 昭和 40 年 9 月)。
- 注 9) 万寿寺観音殿・裳階では斜栱(如意斗栱、三葉斗栱)が用いられているため、背面中間の詰組数を示している。
- 注 10) 柱の外側或いは柱を包むように厚い煉瓦壁(漆喰仕上)を造り、柱が外から見えないものを指す。
- 注 11) 柱の中心に煉瓦或いは木材等で柱径より薄い壁(漆喰仕上)を造り、柱が内外から見えるものを指す。
- 注 12) 万寿観玄祖殿・裳階と元極宮玄祖殿・裳階の斗栱は、正面では三手先斗栱であるが、両側背面では二手先斗栱を配列しており(手先の差は柱高で調整している)、裳階の手先数に関する分類の際には、二手として扱った。
- 注 13) 45° の斜栱は山西省朔州市の崇福寺弥陀殿正背面柱上斗栱(金皇統三年・1143)、60° の斜栱

は山西省大同市の善化寺大雄宝殿中間中備斗栱(遼・916～1125)等に見られる。

注 14) 日本では、この種の斗栱(三葉栱)が長崎市の崇福寺第一峰門(寛永二十一年・1644)に見られる。

注 15) 藻井天井は、華北地方では山西省大同市の善化寺大雄宝殿(遼・916～1125)、山西省応縣の浄土寺大殿(金天会二年・1124)等、華中地方では浙江省寧波市の保国寺大殿(北宋大中祥符六年・1013)等に見られる。

## 第五章

### 四川省の明代の三間裳階付仏殿





## 第五章 四川省の明代の三間裳階付仏殿

### はじめに

本章では、四川省の寺廟建築の現地調査に基づき、保存状況の良い国家・省・市等の重点文物である三間裳階付仏殿の遺構5棟を抽出した。四川省境内には管見では明代以前に建立された三間裳階付仏殿は残されておらず、ここで取り上げた建物5棟は、すべて仏教寺院であり、成都市北東部と重慶に集中し、成都北部の綿陽市に1棟、北東部の閬中市に2棟、重慶市に2棟ある（図5-1）。これらの5棟について、中国文物局の資料と中国側の史料・文献から建立年代を検討し、既往研究の調査、文献調査を行った上で、現地調査を行った。さらに、一間裳階付仏殿と同様に当初の姿をよく留める軸部、組物、小屋組を対象とし、各々の平面、意匠、架構の資料を整理、図化して比較検討し、それらの沿革、平面寸法と柱間配置、間架と架構システム、斗栱の形態等の特徴を明らかにした。それらの内容について、以下の四節にそって論ずることとする。

第一節「四川省の三間裳階付仏殿」では、三間裳階付仏殿5棟の寺院の歴史及び建物の建立年代について個別に取り上げ、建物の外観、平面、斗栱及び架構について説明する。

第二節「平面寸法と柱間配置」では、三間裳階付仏殿5棟の桁行総長と梁行総長をまとめ、全体規模を把握する。また、桁行、梁行方向の柱配列状況を比較し、それらの中間と両脇間と両端間寸

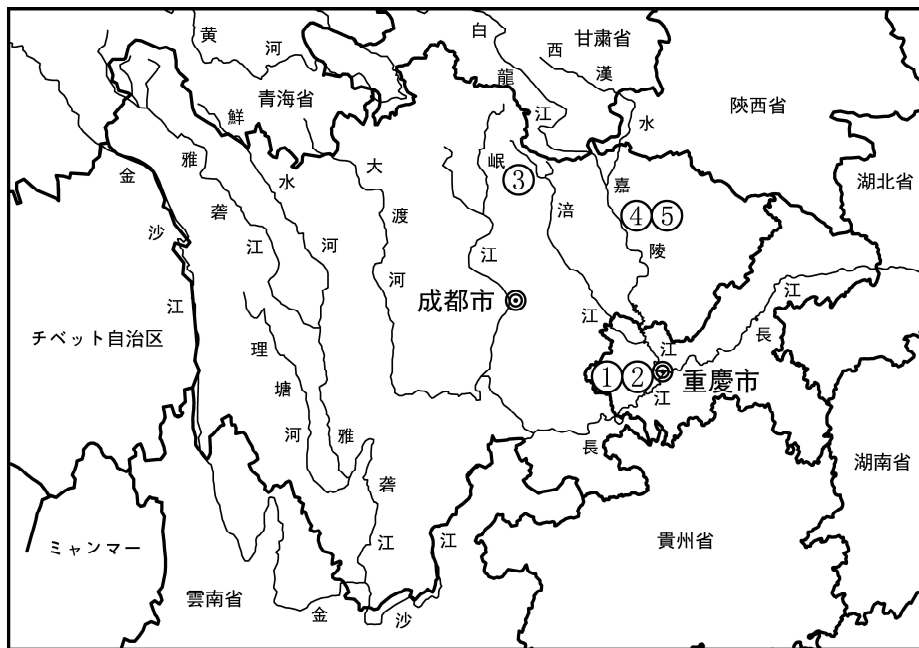


図5-1 調査対象分布図

法の比例関係を取り上げ、各柱間寸法の割合を検討する。さらに、各建物の外観について、屋根形状、屋根材、垂木形状等の特徴をまとめ、それらの共通点を取り出す。

第三節「間架と架構システム」では、建物全体の構造形式を把握し、主屋部分と裳階部分に分け、それぞれの間架及び主屋部分と裳階部分の構造上の仕組みについて分析し、さらに、裳階部分について、一間裳階付仏殿に見られたように、裳階が主屋柱と裳階柱の間の繫梁上の大瓶束に取り付くものでは、内側裳階と外側裳階に分け、その間の間架数及び主屋柱と裳階柱の構造上の繋がりを分析し、それらの構造形式を『营造法式』と比べ、建物全体の架構システムの特徴を検討する。

第四節「斗栱の形態」では、三間裳階付仏殿 5 棟の裳階と主屋の正側背面の柱上及び中備斗栱について、斗栱の配置、手先数、形状を分類し、それらの斗栱の配列の傾向を纏め、さらに、斗栱の形態、尾垂木に関する特徴を取り出して検討する。

第五節「結び」では、四川省の明代の三間裳階付仏殿 5 棟の平面、構造、意匠の特徴をまとめ、この四川省の固有の特質を指摘している。

## 5-1. 四川省の三間裳階付仏殿

### 5-1-1. 温泉寺接引殿と大雄宝殿

温泉寺は、重慶市北碚区渝南路北温泉公園内に位置し、南北朝劉宗景平元年(423)の創立である。北宋景德四年(1007)に朝廷から“崇勝禪院”を下賜され、明・清代に最盛期を迎えた。現在、境内には関聖殿(山門)、接引殿(天王殿)、大雄宝殿、観音殿、地藏殿、薬師殿等が残されている。関聖殿、接引殿と大雄宝殿は明宣徳七年(1432)の建立であり、関聖殿は清乾隆五十九年(1794)に重修し、観音殿は明成化二十年(1484)に建立され、清同治七年(1868)に重建されている<sup>V-1)</sup>。1992年3月19日に重慶市人民政府より、重慶市文物保護單位に認定された。

#### 1) 接引殿について

接引殿は、桁行5間(15.88m)、梁行4間(10.34m)、単層三間裳階付仏殿、入母屋造、本瓦葺とし、軒には、主屋・裳階とも厚板状の長方形の平行地垂木と飛檐垂木を入れ、先端には鼻隠板を用いる。間取りは、中央部分の3間×2間を主屋とし、その周囲に1間の裳階を巡らしている。内部は一つ空間とされ、床を土間式とし、上部を主屋部分では高い格天井を張り、裳階部分では化粧屋根裏を見せている。正背面は、中央間に内両開き扉3具を吊り、両脇間に内両開き窓3具を入れ、両端間に内両開き窓1具ずつを入れている。両側面は、中央2間に中央に内両開き窓1具及び左右に内片開き窓を1具ずつ入れ、両脇間に内片開き窓を1具設けている(図5-2、写真5-1)。

軸部は抬梁式とし、柱は総円柱、主屋柱が円形礎石、正面柱と背面中間柱及び四隅柱が正方形礎石付である。斗拱は、裳階正側背面では、柱の上部に頭貫(闌額)を通し、柱上に台輪(普柏枋)を載せ、その間に板壁を入れる。正背面では、柱上に擬似尾垂木付三手先斗拱を載せ、中央間中備に斗拱2具、両脇間中備に斗拱1具を入れ、両端間(裳階)の中備に斗拱を用いない(写真5-2)。両側面では、柱上に擬似尾垂木付三手先斗拱を載せ、中央2間の中備に斗拱1具ずつを入れている。正背面中備斗拱の尾垂木尻は登り梁のように後方に延し、主屋柱上部間の虹梁に掛かっている。主屋部分は、桁行3間、梁行2間とし、正側背面では、主屋柱の上部に頭貫を通して、上に台輪を載せる。正背面では、主屋柱上に擬似尾垂木付三手先斗拱を載せ、中間中備に斗拱2具、両脇間中備に斗拱1具ずつを入れている。両側面中備では、擬似尾垂木付三手先斗拱3具を入れている。

内部架構は、中央の主屋部分に8本の主屋柱を立て、それらの柱上とその下方桁行と梁行方向に大虹梁を巡らし、二重梁状に見せている。裳階部分では、主屋柱から裳階柱の内法高と柱上斗拱上部に桁行、梁行の2挺の繫梁を渡して、裳階柱上斗拱の上部から主屋柱の中段に直接取り付く裳階屋根を支えている。また、主屋柱上間の上段大虹梁の上に台輪を載せ、柱上に二手先斗拱を載せ、

中備には桁行の中央柱間に2具、両側柱間に各1具、梁間に各3具二手先斗拱を入れ、上部の格子天井を支えている（写真5-3、写真5-4）<sup>V-3</sup>。

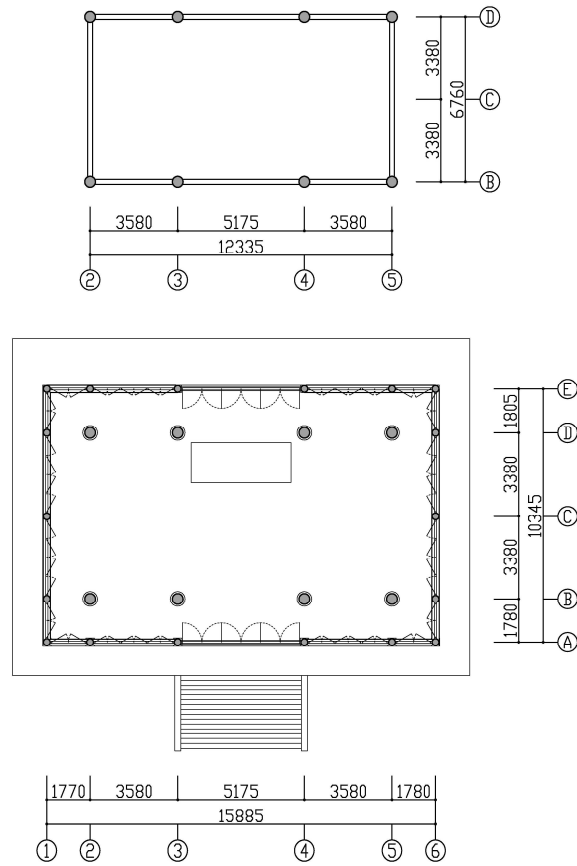


図5-2 温泉寺接引殿・主屋平面図（上）・裳階平面図（下） 1：300



写真5-1 温泉寺接引殿・外観



写真5-2 温泉寺接引殿・背面斗拱



写真 5-3 温泉寺接引殿・内部架構 1



写真 5-4 温泉寺接引殿・内部架構 2

## 2) 大雄宝殿について

大雄宝殿は、桁行 5 間 (19.01m)、梁行 4 間 (13.66m)、単層三間裳階付仏殿、入母屋造、本瓦葺としており、接引殿と比べると一回り規模が大きい。軒には、主屋・裳階とも垂木は厚板状の長方形断面の平行地垂木と飛檐垂木を入れ、先端には鼻隠板を用いる。間取りは中央部分の 3 間×2 間を主屋とし、その周囲に 1 間の裳階を巡らし、後方一間分は戸口とされている。内部は一つ空間とされ、床を土間式とし、天井を張らずに開放し、主屋部分、裳階部分共に天井を張らずに化粧屋根裏を見せている。正面は、中間に内両開き扉 3 具を吊り、両脇間に中央に内両開き扉 2 具を吊り、左右内片開き扉 1 具を入れ、両端間の中央内両開き 1 具、左右に内片開き窓 1 具ずつを入れている。背面は、梁行 1 間分を吹き放し、前から 3 間目の柱列中間では壁を設けて前に仏壇を構え、両脇間に内両開き扉 3 具を吊り、両端間の中央に内両開き窓 2 具、左右に内片開き窓 1 具ずつを入れている (図 5-3、写真 5-5)。

軸部は抬梁式とし、柱は総円柱 (両側面と背面脇間両側の柱は角柱)、主屋柱及び正面中央 4 本と背面中央 2 本の柱が円形礎石、正面両隅の柱では正方形礎石を付け、他は礎石がない。斗拱は、裳階正側背面では、柱の上部下方に頭貫 (闌額) を通し、柱上に台輪 (普柏枋) を載せ、正背面では柱上に擬似尾垂木付三手先斗拱を載せ、中央間中備に斗拱 2 具、両脇間と両端間 (裳階) 中備に斗拱を 1 具ずつ入れている。両側面では、中備に擬似尾垂木付三手先斗拱を載せている (写真 5-6)。全ての中備斗拱の尾垂木尻は登り梁のように後方に延し、裳階屋根の母屋桁に掛かっている。主屋部分は中央の桁行 3 間、梁行 2 間とするが、主屋の空間としては、裳階部分の内方 1 架分を取り込んでいる。正側背面では、主屋柱から裳階柱上斗拱上部に渡された繫梁に立つ束柱の上部に頭貫を通して、上に台輪を載せる。正背面では束柱上に擬似尾垂木付三手先斗拱を載せ、中間中備に斗拱 2 具、両脇間中備に斗拱 1 具ずつを入れ、両端間中備は斗拱を用いない。両側面中備では、中央 2 間

に擬似尾垂木付三手先斗栱1具ずつを入れている。

内部架構は、中央の主屋部分に8本の主屋柱を立て、それらの上部は三重虹梁を架け、柱上虹梁左右6分点の位置に束を立てて、上に中梁を置き、さらに中梁の左右4分点の位置に束を入れ、上に小梁を架け、小梁中央に立つ束が棟木を支えている（写真5-7）。また、主屋柱から裳階柱の内法高と柱上斗栱上部に桁行、梁行、隅行の3挺の繫梁を渡し、上段繫梁の内側3分点の位置に束を立てている（写真5-8）。束柱上部には頭貫（闌額）を通し、柱上に台輪（普柏枋）を載せ、上に斗栱を載せ、頭貫の下方束柱間に母屋桁を通し、裳階屋根が付いている。なお、主屋柱上部から束柱上部に桁行、梁行の2挺、束柱上斗栱の上部に桁行、梁行、隅行の3挺の繫梁を渡し、主屋屋根を支えている<sup>V-3)</sup>。

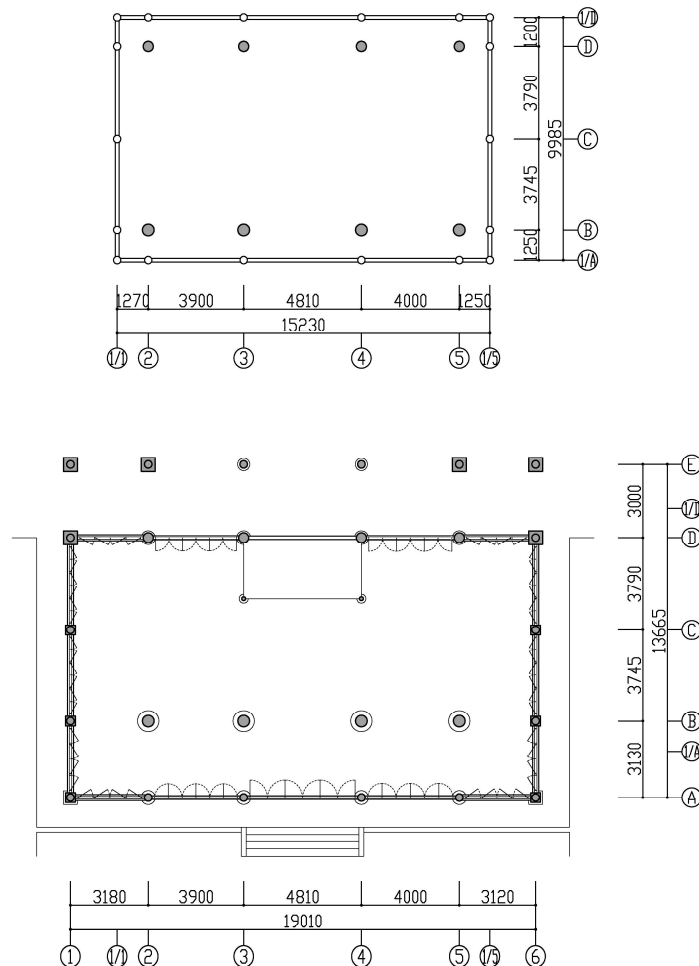


図5-3 温泉寺大雄宝殿・主屋平面図（上）・裳階平面図（下） 1 : 300



写真 5-5 温泉寺大雄宝殿・外観



写真 5-6 温泉寺大雄宝殿・側面斗栱



写真 5-7 温泉寺大雄宝殿・内部架構 1



写真 5-8 温泉寺大雄宝殿・内部架構 2

### 5-1-2. 報恩寺大雄宝殿

報恩寺は、四川省綿陽市北部の平武縣龍安鎮に位置し、明正統五年（1440）の創立である。現在、境内には天王殿、大雄宝殿、万佛閣、大悲殿、華嚴殿等の建物が残されている。碑文に「奉 聖旨 既是土官不爲例准他這遭欽此欽遵脩理報 恩寺壹所轉輪壹座完備安放藏經祝延 聖壽具本謝 恩外 大明正統拾壹年拾壹月吉旦土官僉事王璽 建立」とあり、建物は正統十一年（1446）に主要工事を終え、古記録によると天順四年（1460）に竣工している<sup>注1), V-4)</sup>。1956年8月16日に四川省人民政府から、四川省文物保護單位に認定され、1996年11月20日に中華人民共和國國務院から、全国重点文物保護單位に認定された。

大雄宝殿は、桁行5間（24.41m）、梁行4間（18.46m）、単層入母屋造、本瓦葺、中央3間×2間の主屋の周囲に1間の裳階を巡らし、さらに、背面中間と両脇間の後方に裳階一間が付加され、全体では凸字型平面の三間裳階付の建物となる。軒裏には、主屋・裳階とも正方形断面の隅部扇垂木、残りの垂木は平行垂木の地垂木と円形断面の飛檐垂木を入れている。先端に鼻隠板は用いない。内

部は一つ空間とされ、床を土間式とし、上部では主屋部分に高い格子天井を張り、裳階部分には化粧屋根裏を見せている。正面は、中間と両脇間に内両開き扉3具を吊り、両端間に羽目殺し格子窓1具ずつを入れている。背面は、中間に内両開き扉1具を吊り、両脇間に羽目殺し格子窓1具ずつを入れている。両側面は土壁の大壁とする（図5-4、写真5-9）。

軸部は抬梁式とし、柱は総円柱・正方形礎盤と円形礎石付である。斗拱は、裳階正側背面では、柱の上部に頭貫（闌額）を通して台輪（普柏枋）を載せる。正背面では、柱上に擬似尾垂木付三手先斗拱を載せ、中間と両脇間の中備に斗拱4具を入れ、両端間（裳階）の中備には斗拱を用いない（写真5-10）。両側面では、柱上に擬似尾垂木付三手先斗拱を載せ、柱間2間の中備に斗拱3具ずつを入れている（写真5-11）。主屋部分は桁行3間、梁行2間とし、正側背面では、主屋柱の上部

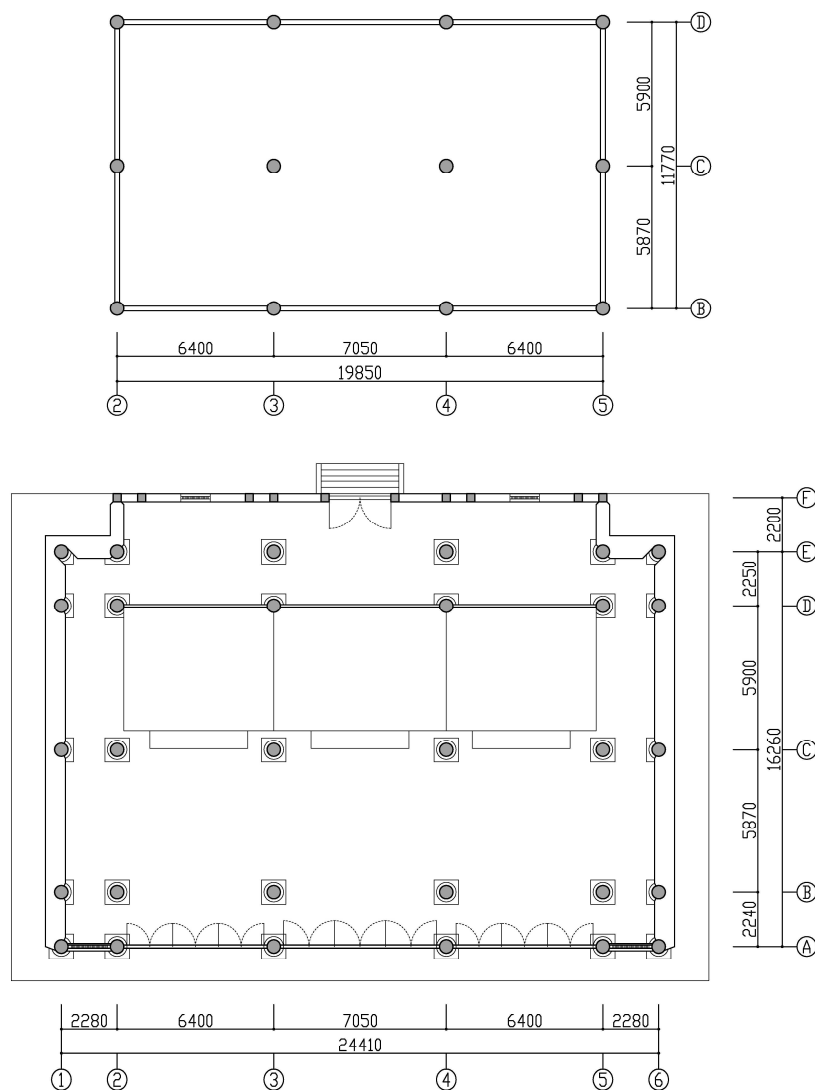


図5-4 報恩寺大雄宝殿・主屋平面図（上）・裳階平面図（下） 1：300



に頭貫を通して、上に台輪を載る。正背面では、主屋柱上に擬似尾垂木付き四手先斗栱（斜栱付）を載せ、中間と両脇間の中備に斗栱3具ずつを入れている。両側面では、主屋柱上に擬似尾垂木付き四手先斗栱（斜栱付）を載せ、中備に斗栱2具ずつを入れている。

内部架構は、中央の主屋部分では、12本の主屋柱を立て、それらの柱上とその下方桁行と梁行方向に大虹梁を巡らし、二重梁状に見せている。裳階部分では、主屋柱から裳階柱の内法高と柱上斗栱上部に桁行、梁行の2挺の繫梁を渡して、裳階柱上斗栱と主屋柱中段に取り付く裳階屋根を支えている。また、主屋柱上間の大虹梁の上に台輪を載せ、柱上に四手先斗栱を載せ、中備には桁行の柱間3間に各1具、梁行の柱間2間に各2具の四手先斗栱を入れ、上部に格子天井を張っている（写真5-12）。



写真5-9 報恩寺大雄宝殿・外観



写真5-10 報恩寺大雄宝殿・正面斗栱

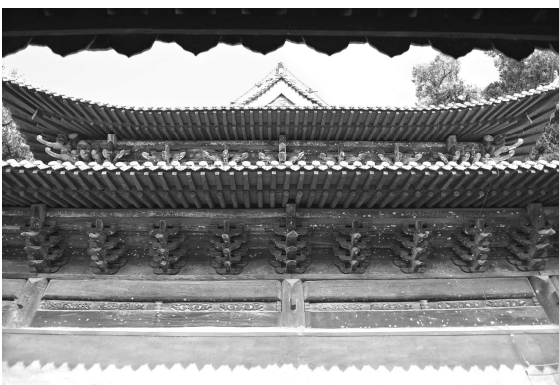


写真5-11 報恩寺大雄宝殿・側面斗栱

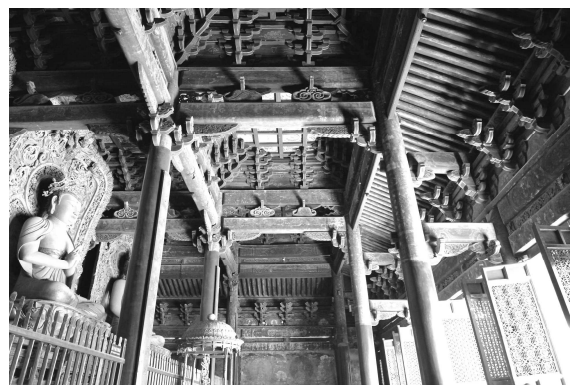


写真5-12 報恩寺大雄宝殿・内部架構

### 5-1-3. 観音寺羅漢殿と大雄宝殿

観音寺は、四川省東北部の閬中市に位置し、前身は唐代（618～907）に創立された開元寺であり、元・明代までは、当地方の報恩寺と並ぶ最大規模の寺院であった。明代の弘治四年（1491）に王府の建設のため、当初の閬中市西方から閬中市東方の公園路 63 号の現地（元開元寺所在地）に移築された。民国初期に火災で蔵経楼が焼失し、現在は、明代の弘治四年に建立された天王殿、羅漢殿、大雄殿が残されており、敷地と建物は保寧酢有限会社によって管理され、天王殿は観音文化館、羅漢殿は中国酢史館、大雄殿は保寧酢発展館として、歴史的な価値を損うことなく保存活用されている。2002 年 12 月 27 日に四川省人民政府より、四川省文物保護單位に認定され、2013 年 3 月 5 日に中華人民共和国國務院より、全国重点文物保護單位に認定された<sup>注2), V-5)</sup>。

#### 1) 羅漢殿について

羅漢殿は、桁行 5 間（18.36m）、梁行 4 間（11.64m）、単層三間裳階付仏殿、入母屋造、本瓦葺とし、軒では、主屋・裳階とも垂木の断面形状は厚板状の長方形の隅部扇垂木、他は平行垂木の地垂木と平行飛檐垂木を入れ、先端に鼻隠板を用いない。間取りは、中央部分の 3 間×2 間の主屋の

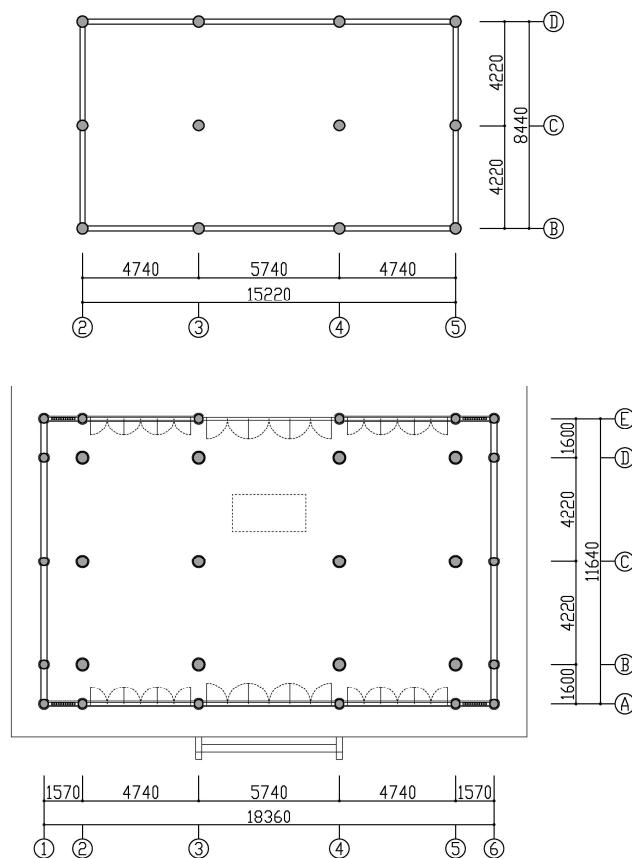


図5-5 観音寺羅漢殿・主屋平面図（上）・裳階平面図（下） 1 : 300

周囲に1間の裳階を巡らしている。正背面は、中間と両脇間に内両開き扉3具を吊り、両端間に羽目殺し格子窓1具ずつを入れ、両側面では土壁の真壁としており、内部は一つ空間とされ、床を土間式とし、主屋柱に架構を組み、化粧屋根裏を見せている(図5-5、写真5-13)。

軸部は抬梁式とし、柱は総円柱・円形礎盤付である。斗拱は、裳階正側背面では、柱の上部に頭貫(闌額)を通して台輪(普柏枋)を載せ、柱上では主屋柱から渡る繫梁の前端を更に出して持出梁とし(写真5-14)、軒を支えており、正背面中備は、中間2具、両脇間1具ずつ、両端間(裳階)には無い。いずれも斗拱の前方に持出梁を出す、後方には小型の登梁状の部材を組合せ、両側面の中備は、中央2間は正背面中備と同じ部材を入れ、両端間(裳階)は無しとする。主屋部分は桁行3間、梁行2間とし、正面では、柱上部に頭貫を通して、台輪を載せ、正面柱上に三手先斗拱を載せ、中備に尾垂木付三手先斗拱を2具ずつ入れ(写真5-15)、両側背面柱上に二手先斗拱を載せ、中備に尾垂木付二手先斗拱を2具ずつ入れる。

内部架構は、中央の主屋部分では、周囲に10本の主屋柱を一巡させ、中央に桁行2本の柱を立



写真5-13 観音寺羅漢殿・外観



写真5-14 観音寺羅漢殿・裳階持出梁



写真5-15 観音寺羅漢殿・主屋正面斗拱



写真5-16 観音寺羅漢殿・内部架構

て、桁行と梁行に主屋柱上の斗拱上ならびに裳階取付高と内法高に繫虹梁を架けている（写真 5-16）。また、中央 2 本の柱は屋根裏最上部まで伸ばして棟木を支え、主屋周囲の 10 本の主屋柱からは、裳階柱の内法高に桁行、梁行、隅行の 2 梃から 3 梃の繫梁を渡し、主屋柱を裳階取付位置より上方まで延ばし、柱上部に頭貫を通して上に台輪を載せ、柱上に斗拱を載せ、主屋の屋根を支えている<sup>V-6)</sup>。

## 2) 大雄宝殿について

大雄宝殿は、桁行 5 間 (21.60m)、梁行 3 間 (13.88m)、単層入母屋造、本瓦葺、中央 3 間×1 間の主屋の周囲に 1 間の裳階を巡らした三間裳階付の建物であり、羅漢殿より一回り規模が大きい(図 5-6, 写真 5-17)。軒裏には、垂木断面が板状の隅部扇垂木、他は平行垂木の地垂木と平行飛檐垂木を入れている。先端には鼻隠板を用いない。内部は一つ空間とされ、床を土間式とし、化粧屋根裏を見せている。正背面は、中間と両脇間に内両開き扉 3 具を吊り、正面の両端間に羽目殺し格子窓 6 具ずつを入れている。両側面では赤漆喰塗の真壁とする。

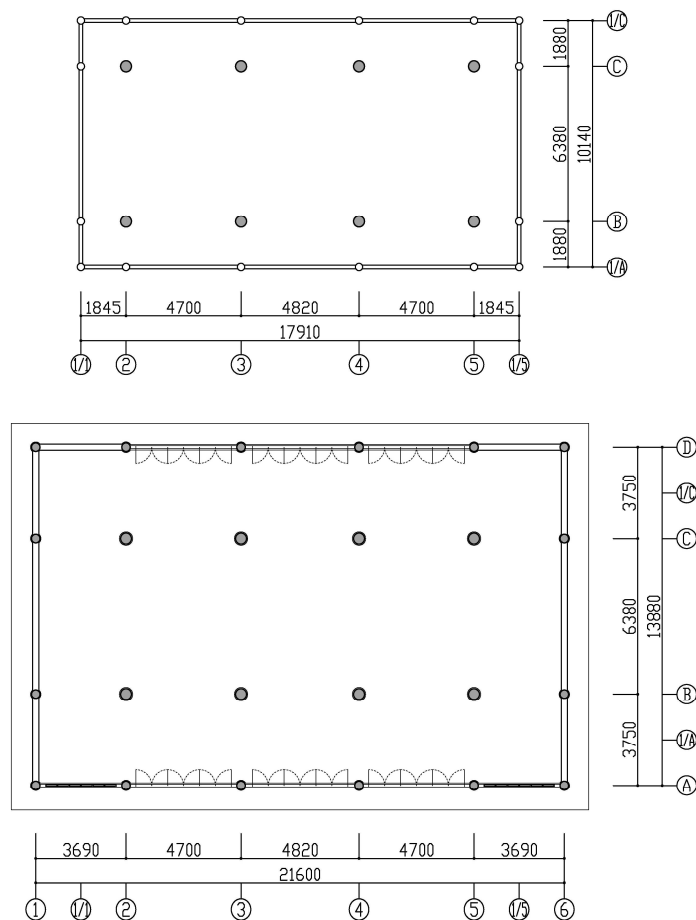


図 5-6 観音寺大雄宝殿・主屋平面図 (上)・裳階平面図 (下) 1 : 300

軸部は抬梁式とし、柱は総円柱、礎盤はない。斗栱は、裳階正側背面では、柱の上部に頭貫（闌額）を通して台輪（普柏枋）を載せる。正面では、柱上に三手先斗栱を載せ、中間と両脇間の中備に斗栱2具を入れ、両端間（裳階）の中備に斗栱1具を入れる（写真5-18）。背面では、柱上に擬似尾垂木付二手先斗栱を載せ、中間と両脇間の中備に斗栱2具を入れ、両端間（裳階）の中備に斗栱1具ずつを入れる（写真5-19）。両側面では、柱上に擬似尾垂木付二手先斗栱を載せ、柱間3間の中備に前方から斗栱1具、3具、1具を入れる。主屋部分は、桁行5間、梁行3間とし、正側背面では円束（大瓶束）の上部に頭貫を通し、上に台輪を載せ、4隅の大瓶束上に三手先斗栱を載せる。正面では、大瓶束上に三手先斗栱を載せ、中間と両脇間の中備に斗栱2具ずつを入れ、両端間の中備には斗栱を用いない（写真5-18）。両側背面では、大瓶束上に二手先斗栱を載せ、背面の中間と両脇間の中備に斗栱2具ずつを入れ、両端間の中備には斗栱を用いず、両側面の中間の中備に斗栱3具を入れる。なお、中備斗栱では、いずれも後方の尾垂木尻位置に小型の登梁状の材（湾曲尾垂木尻）を用い、後端を母屋桁に掛ける。



写真5-17 観音寺大雄宝殿・外観

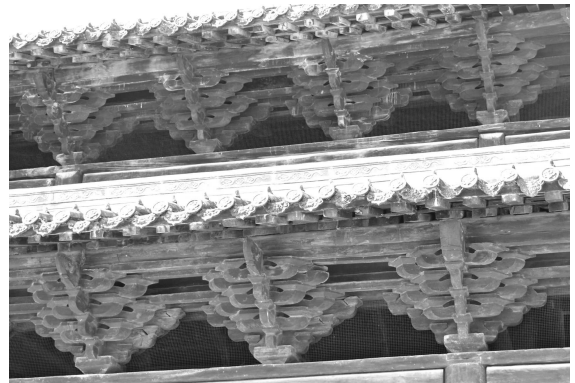


写真5-18 観音寺大雄宝殿・正面斗栱

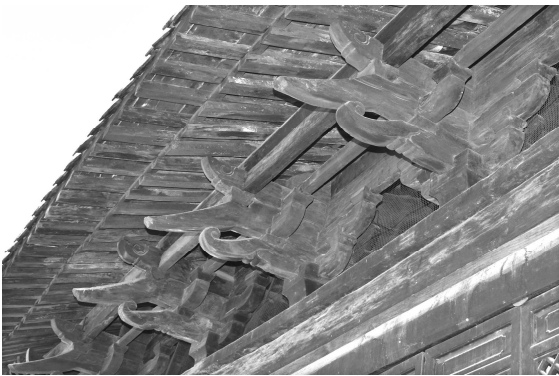


写真5-19 観音寺大雄宝・裳階背面斗栱



写真5-20 観音寺大雄宝殿・内部架構

内部架構は、中央の主屋部分では、8本の主屋柱を立て、それらの柱上とその下方桁行と梁行方向に大虹梁を巡らし、二重梁状に見せている。裳階部分では、主屋柱から裳階柱の内法高と柱上斗拱上部に桁行、梁行、隅行の3挺の繫梁を渡し、上段繫梁の中央に大瓶束を立て、裳階屋根を支えており、さらに主屋柱は上方に伸ばし、柱上部に頭貫を通し、上に台輪を載せ、柱上に斗拱を載せ、裳階屋根を支えている（写真 5-20）<sup>V-6)</sup>。

## 5-2. 平面寸法と柱間配置

三間裳階付仏殿 5 棟の平面は、桁行 5 間、梁行 4 間のものが 4 棟、桁行 5 間、梁行 3 間が 1 棟である(表 5-1, 図 5-7)。規模についてみると、最大規模の報恩寺大雄宝殿は桁行 5 間 (24.41m)、梁行 4 間 (16.26m) であり<sup>注3)</sup>、最小規模の温泉寺接引殿は桁行 5 間 (15.88m)、梁行 4 間 (10.34m) であり、全体の規模の平均は、桁行総長 19.85m、梁行総長 13.15m となる。

平面形態は、建物の桁行総長と梁行総長の比率をみると、5 棟は 1 : 0.63~0.72 であり、すべて横長の長方形である(表 5-1)。その内、温泉寺接引殿、報恩寺大雄宝殿、観音寺羅漢殿と大雄宝殿では 1 : 0.63~0.67 であり、温泉寺大雄宝殿では 1 : 0.72 であり、他 4 棟と比べると、梁行方向がやや深めであり、全体の平均比率は 1 : 0.66 で、横長の長方形であることが分かる。次に、柱間寸法についてみると、裳階正面は端間と脇間と中間の比率が 1 : 1.27 : 1.31 (観音寺大雄宝殿) から 1 : 3.02 : 3.66 (観音寺羅漢殿) まであり、平均値は 1 : 1.87 : 2.21 である。5 棟の端間と脇間の比率は、1 : (1.23~1.27) が温泉寺大雄宝殿と観音寺大雄宝殿の 2 棟、1 : 2.02 が温泉寺接引殿の 1 棟、1 : (2.81~3.02) が報恩寺大雄宝殿と観音寺羅漢殿の 2 棟がある。端間と中間の比率は、1 :

(1.31~1.51) が観音寺大雄宝殿と温泉寺接大雄宝殿の 2 棟、1 : (2.92~3.09) が温泉寺接引殿と報恩寺大雄宝殿の 2 棟、1 : 3.66 が観音寺羅漢殿の 1 棟である。脇間と中間の比率は、1 : (1.02~1.23) が観音寺大雄宝殿、報恩寺大雄宝殿、観音寺羅漢殿と温泉寺大雄宝殿の 4 棟、1 : 1.44 が温泉寺接引殿の 1 棟である。この結果より、中間は脇間の約 1.1 倍、端間の約 1.4 倍乃至約 3.0 倍、脇間は端間の約 2.3 と 2.9 倍であることが分かる。また、側面柱間では 3 間が 1 棟、4 間が 4 棟ある。この内、脇間と中間の比率は、柱間 3 間が 1 : 1.70 の観音寺大雄宝殿のみ、柱間 4 間が 1 : 1.19 の温泉寺大雄宝殿の 1 棟、1 : 1.90 の温泉寺接引殿の 1 棟、1 : (2.62~2.64) の報恩寺大雄宝殿と観音寺羅漢殿の 2 棟があり、この結果より、側面中間は脇間の約 2.0 倍と約 2.5 倍があることが分かる。一方、裳階正面の柱上斗栱と中備斗栱に着目し、斗栱の配列について眺めてみたい(図 5-7)。まず、5 棟の正面柱間について、端間 : 脇間 : 中間の中備斗栱 (詰組) の数を見ると、0 : 1 : 2 とするものが温泉寺接引殿と観音寺羅漢殿の 2 棟がある。これらの柱間寸法比率 (柱間比) は、温泉寺接引殿では 1 : 2.02 : 2.92、観音寺羅漢殿では 1 : 3.02 : 3.66 である。詰組比率 (詰組比) を 0 : 4 : 4 とする報恩寺大雄宝殿では柱間比は 1 : 2.81 : 3.09 とし、1 : 1 : 2 とする温泉寺大雄宝殿では柱間比は 1 : 1.23 : 1.51 とし、1 : 2 : 2 とする観音寺大雄宝殿では柱間比は 1 : 1.27 : 1.31 としている。このように、中間に一番多くの詰組を配し、脇間、端間に詰組数を減少する傾向にある。また、柱間比は、詰組数に応じて柱間寸法を広めているが、斗栱間隔は中間と脇間で異なる。

ここで、5棟の外観について眺めると、屋根は単層裳階付、入母屋造、本瓦葺を基本とし、主屋・裳階の正面隅の軒反りは緩やかである(表5-2, 写真5-1, 5, 9, 13, 17)。垂木は現状で見る限り、5棟すべて主屋・裳階とも地垂木と飛檐垂木を出し、平行垂木として、隅を扇垂木とするものは3棟(報恩寺大雄宝殿、観音寺羅漢殿と大雄宝殿)、隅を平行垂木とするものは2棟(温泉寺接引殿と大雄宝殿)ある。垂木の断面形状は、主屋・裳階共ほぼ正方形とするものが2棟(温泉寺接引殿と大雄宝殿)ある。

表5-1 三間裳階付仏殿平面寸法表(左)

No	寺院名	建築名	所在地	建立年代	桁行× 梁行	桁行 総長(m)	梁行 総長(m)	桁行(m)				
								左端間	左脇間	中間	右脇間	右端間
1	温泉寺	接引殿	重慶市	明・1432	5×4	15.88	10.34	1.77	3.58	5.17	3.58	1.78
						1.00	0.65	1.00	2.02	2.92	2.02	1.01
2	温泉寺	大雄宝殿	重慶市	明・1432	5×4	19.01	13.66	3.18	3.90	4.81	4.00	3.12
						1.00	0.72	1.00	1.23	1.51	1.26	0.98
3	報恩寺	大雄宝殿	綿陽市	明・1446	5×4	24.41	16.26	2.28	6.40	7.05	6.40	2.28
						1.00	0.67	1.00	2.81	3.09	2.81	1.00
4	観音寺	羅漢殿	閬中市	明・1491	5×4	18.36	11.64	1.57	4.74	5.74	4.74	1.57
						1.00	0.63	1.00	3.02	3.66	3.02	1.00
5	観音寺	大雄宝殿	閬中市	明・1491	5×3	21.60	13.88	3.69	4.70	4.82	4.70	3.69
						1.00	0.64	1.00	1.27	1.31	1.27	1.00

注：上記の寸法は図面から拾い、小数点以下二桁まで三桁を切り捨てとして記入する。また、報恩寺大雄宝殿の後方一間は、

表5-2 三間裳階付仏殿意匠表(左)

No	寺院名	建築名	建立年代	屋根 形状	屋根材	垂木							天井	正面		
						地垂木			飛檐垂木			鼻隠板		柱上	中間 中備	
						断面型	隅部	平部	断面型	隅部	平部	地 垂木				飛檐 垂木
														形状	形状及 個数	
1	温泉寺	接引殿	明・1432	単層 裳階付 入母屋	本瓦葺	正方形	平行	平行	正方形	平行	平行	○	○	L	3TR	3TR-2
						F	F									
2	温泉寺	大雄宝殿	明・1432	単層 裳階付 入母屋	本瓦葺	正方形	平行	平行	正方形	平行	平行	○	○	-	3TR	3TR-2
						F	F									
3	報恩寺	大雄宝殿	明・1446	単層 裳階付 入母屋	本瓦葺	丸棒形	扇形	平行	正方形	扇形	平行	-	-	L	4TR	4TR-3
						A/K	A/K									
4	観音寺	羅漢殿	明・1491	単層 裳階付 入母屋	本瓦葺	厚板形	扇形	平行	厚板形	扇形	平行	-	-	L	3T	3T-2
						K	K									
5	観音寺	大雄宝殿	明・1491	単層 裳階付 入母屋	本瓦葺	厚板形	扇形	平行	厚板形	扇形	平行	-	-	-	3T	3T-2
						K	K									

※ 各建物の行中は、上の行が主屋、下の行が裳階を示している。

2T: 二手先斗拱; 2T-1: 二手先斗拱一具; 2TR: 擬似尾垂木付二手先斗拱; 2TR-1: 擬似尾垂木付二手先斗拱一具; OB: 持送梁;  
S&Q: 形状及個数; A&C: 評価認定; NCR: 国文物; CCR: 市文物



雄宝殿)、厚板状の横長の長方形とするものが2棟(観音寺羅漢殿と大雄宝殿)、主屋・裳階の地垂木を丸形、飛檐垂木を正方形とするものが報恩寺大雄宝殿の1棟である。鼻隠板は、主屋・裳階とも地垂木と飛檐垂木先端に設けるものが2棟(温泉寺接引殿と大雄宝殿)、設けないものが3棟(報恩寺大雄宝殿、観音寺羅漢殿と大雄宝殿)ある。柱間装置は、大壁式が報恩寺大雄宝殿1棟であり、真壁式が他4棟あり、正側背面の柱間の建具は、正面中間と脇間に3連の両開き扉、端間に窓を設

表5-1 三間裳階付仏殿平面寸法表(右)

梁行(側柱)(m)				梁行(間架)(m)										
前方	中間		後方	前方		中間						後方		架椽数
1.78	3.38	3.38	1.80	1.78	1.69	1.69	1.69	1.69	1.69	1.69	1.69	1.20	1.80	
1.00	1.90	1.90	1.01	1架	2架			2架			1架			
3.13	3.74	3.79	3.00	1.88	1.25	1.24	1.25	1.25	1.26	1.26	1.27	1.20	1.80	8架
1.00	1.19	1.21	0.96	2架	3架			3架			2架			
2.24	5.87	5.90	2.25	2.24	1.46	1.47	1.47	1.47	1.47	1.47	1.47	1.49	2.25	10架
1.00	2.62	2.63	1.00	2架	4架			4架			2架			
1.60	4.22	4.22	1.60	1.60	1.40	1.41	1.41	1.41	1.41	1.41	1.40	1.60	1.60	8架
1.00	2.64	2.64	1.00	1架	3架			3架			1架			
3.75	6.38		3.75	1.87	1.88	1.59	1.60	1.60	1.60	1.59	1.88	1.87	8架	
1.00	1.70		1.00	2架	4架						2架			

軸組構造上には影響がないため、桁行5間(24.41m)、梁行4間(16.26m)と考える。

表5-2 三間裳階付仏殿意匠表(右)

斗栱															
正面		両側面									背面				A&C
両脇間中備	両端間中備	1列目柱上	1-2中備	2列目柱上	2-3中備	3列目柱上	3-4中備	4列目柱上	4-5中備	5列目柱上	柱上	中間中備	両脇間中備	両端間中備	
形状及個数	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状及個数	形状	形状	形状及個数	形状及個数	形状及個数	
3TR-1	—	3TR	3TR-3	3TR	—	—	—	—	—	—	3TR	3TR-2	3TR-1	—	
F	—	F	F	F	—	—	—	—	—	—	F	F	F	—	
3TR-1	—	3TR	—	3TR	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	—	3TR	3TR	3TR-2	3TR-1	—	
F	—	F	—	F	F	F	F	F	—	F	F	F	F	—	
3TR-1	—	3TR	—	3TR	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	—	3TR	3TR	3TR-2	3TR-1	—	
F	—	F	—	F	F	F	F	F	—	F	F	F	F	—	
3TR-1	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	3TR-1	3TR	3TR	3TR-2	3TR-1	3TR-1	
F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	
4TR-3	—	4TR	4TR-2	4TR	4TR-2	4TR	—	—	—	—	4TR	4TR-3	4TR-3	—	
A/K	—	A/K	A/K	A/K	A/K	A/K	—	—	—	—	A/K	A/K	A/K	—	
3TR-4	—	3TR	—	3TR	3TR-3	3TR	3TR-3	3TR	—	3TR	3TR	3TR-4	3TR-4	—	
K	—	K	—	K	K	K	K	K	—	K	K	K	K	—	
3T-2	—	3T	2T-1	2T	2T-1	2T	—	—	—	—	2T	2T-2	2T-2	—	
K	—	A/K	K	K	K	K	—	—	—	—	K	K	K	—	
OB-1	—	OB	—	OB	OB-1	OB	OB-1	OB	—	OB	OB	OB-2	OB-1	—	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
3T-2	—	3T	—	2T	2T-3	2T	—	3T	—	—	2T	2T-3	—	—	
K	—	A/K	—	K	K	K	—	A/K	—	—	K	K	—	—	
3T-2	3T-1	3T	2TR-1	2TR	2TR-3	2TR	2TR-1	3T	—	—	2TR	2TR-2	2TR-2	2TR-1	
K	K	A/K	F	F	F	F	F	A/K	—	—	F	F	F	F	

A:斜栱; K:計心造; T:偷心造; F:計心造と偷心造の複合造; L:格天井;

けるもの4棟、中間に3連の両開き扉、脇間と端間に窓を設けるものが温泉寺接引殿の1棟ある。背面柱間は、温泉寺接引殿と観音寺羅漢殿では正面と同じであり、温泉寺大雄宝殿では背面の一間通りを吹放しにしており、その前方の柱間の中間を壁とし、脇間と端間に正面と同じ建具を入れ、報恩寺大雄宝殿では中間に3連の両開き扉、端間に窓を設け、端間を壁とし、観音寺大雄宝殿では、中間と脇間に正面と同じ建具を入れ、端間を壁としている。側面は、温泉寺接引殿と大雄宝殿のみ柱間に窓を設けている。基壇と礎石は簡素な扱いとされ、すべての建物が基壇をもつものの3尺以下と低く、礎石・礎盤は、いずれも正方形の礎石と円形の礎盤を石材による造り出しとしている。

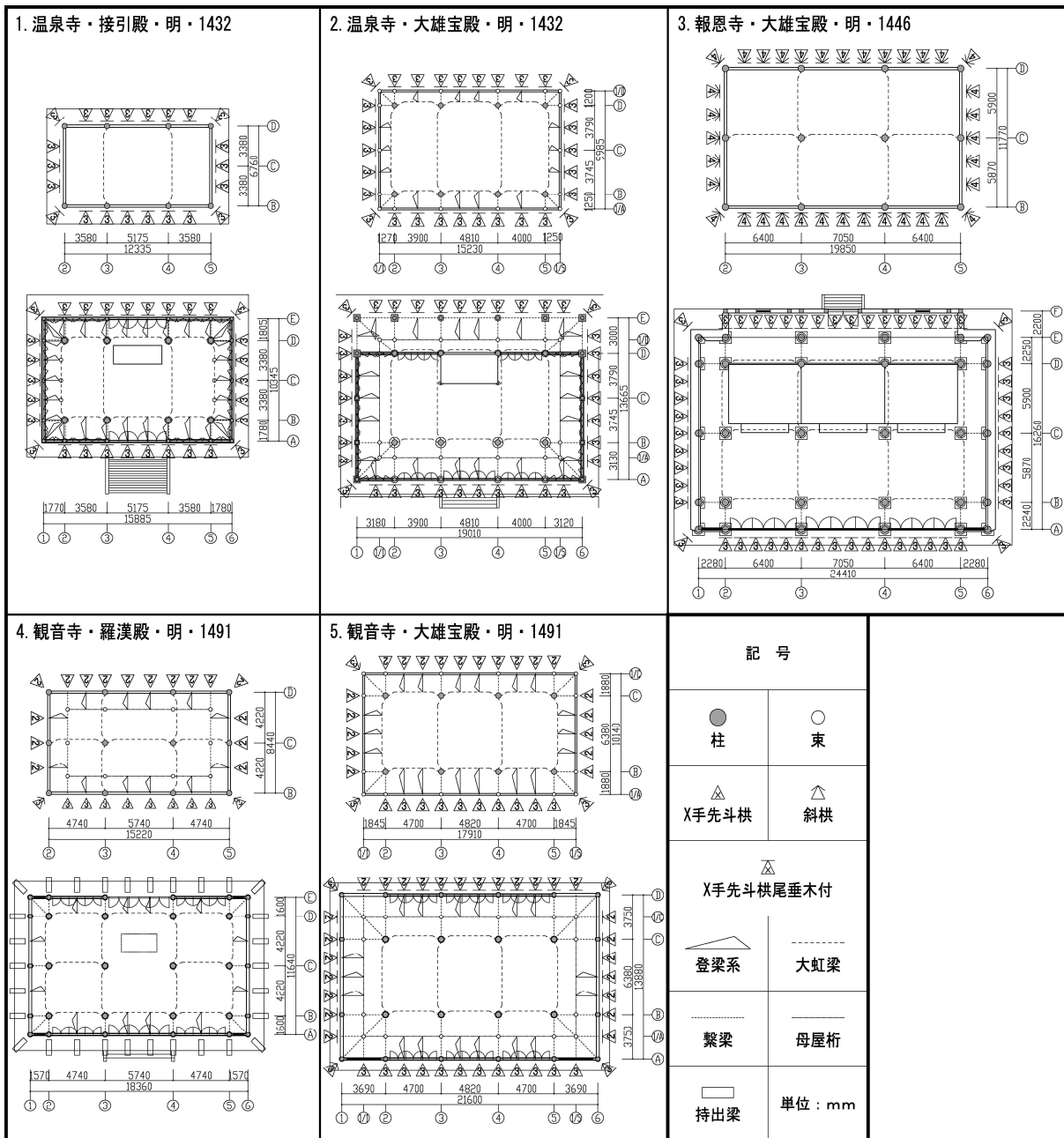


図5-7 三間裳階付仏殿平面図

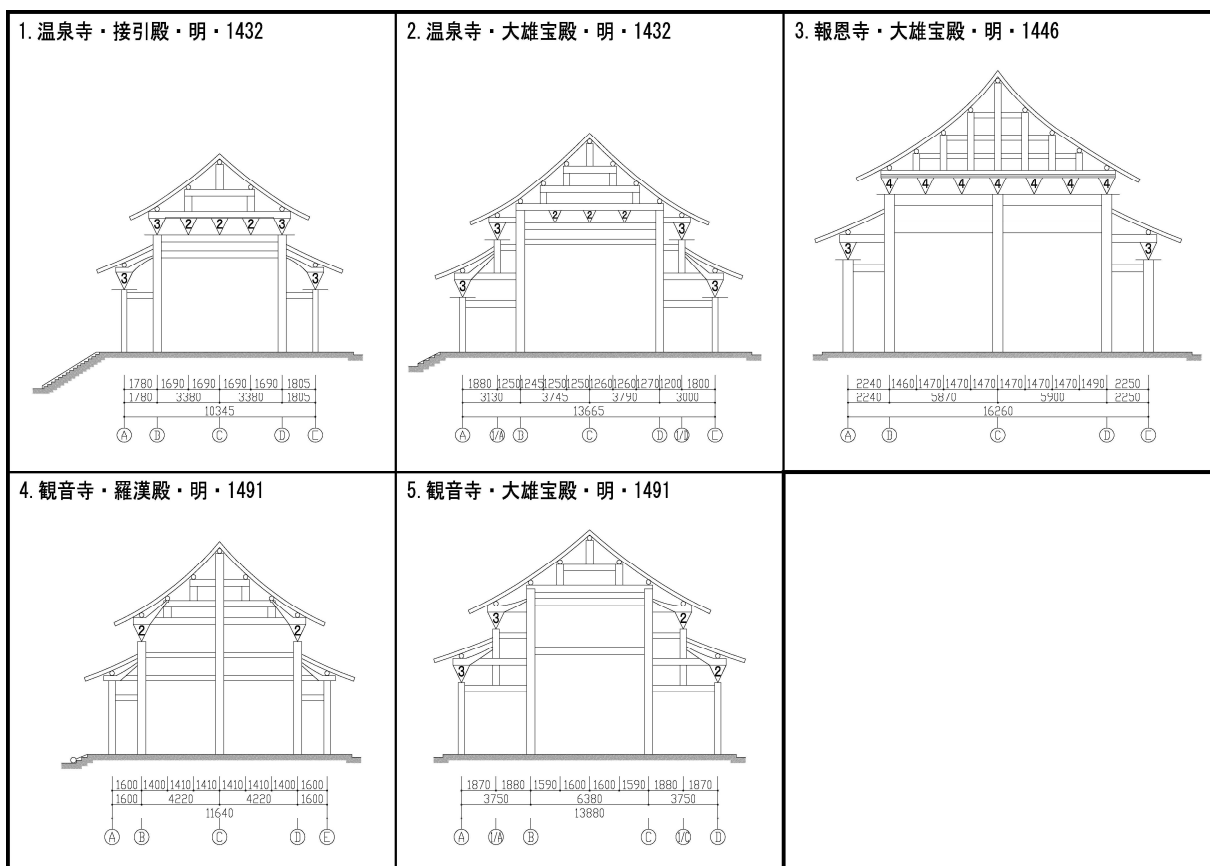
### 5-3. 間架と架構システム

三間裳階付仏殿 5 棟の構造形式について、主屋・裳階の平面図に斗栱、虹梁、梁組を表記すると(図 5-7)のようになる。これによると、いずれも抬梁式であり、華北・華中地方の構造形式に属していることが分かる。また、5 棟の内部空間をみると、中央に太い主屋柱 8 本(柱径平均:約 44.5cm)を立てているのが 3 棟、12 本(柱径平均:約 50.0cm)を立てているのが 2 棟、周囲に 18 本(観音寺大雄宝殿 1 棟は 16 本)の裳階柱(柱径平均:約 36.8cm)を立てている。そこで、内部空間について、主屋部分と裳階部分に分け、主屋柱と裳階柱を結ぶ繫梁による架構と屋根構造について検討してみたい。

5 棟の主屋・裳階について、梁行の架構図を一覧すると(図 5-8)のようになる。各建物は、屋根を支える母屋桁の一つの間隔を 1 架とする「間架」を基準とするため、間架と架構を検討してみたい。

#### 1) 間架について

主屋部分では、4 架とするものが温泉寺接引殿と観音寺大雄宝殿の 2 棟があり、6 架とするもの



記号: △: X手先斗栱; ▽: X手先斗栱尾垂木付; 単位: mm;

図 5-8 三間裳階付仏殿梁行架構図

が温泉寺大雄宝殿と観音寺羅漢殿の2棟があり、8架とするものが報恩寺大雄宝殿1棟ある。間架についてみると、主屋4架のものは、主屋柱間の棟木を中心に柱間を2架ずつ分けて計4架とし、6架のものは棟木と主屋柱との間を3架ずつに分けて計6架とし、8架のものは棟木と主屋柱との間を4架ずつに分けて計8架とし、すべて前方間架数と後方間架数が同じである。

裳階部分を見ると、裳階屋根が主屋柱に取り付く本来の形式のものが3棟（温泉寺接引殿、報恩寺大雄宝殿、観音寺羅漢殿）あり、主屋柱と裳階柱を結ぶ繫梁上に立てた大瓶束上部に取り付くものが2棟（温泉寺大雄宝殿、観音寺大雄宝殿）ある。そのため、裳階は大瓶束を立てるものでは、束を境にして内側裳階（仮称）と外側裳階（仮称）に分けられ、裳階の間架数は、内側裳階と外側裳階を合わせたものとなる。裳階2架は2棟があり、すべて内側1架、外側1架、裳階屋根が束に取り付く形式である。裳階1架は3棟があり、『营造法式』にある主屋柱に直接裳階を取り付ける手法を用いており、本格的な裳階付仏殿の形式といえる。



写真5-21 温泉寺大雄宝殿・裳階繫梁架構



写真5-22 報恩寺大雄宝殿・裳階繫梁架構



写真5-23 温泉寺大雄宝殿・裳階柱上斗拱内側



写真5-24 観音寺大雄宝殿・束繫梁

## 2) 架構について

(図 5-7)を眺めてみると、5 棟は、いずれも主屋柱と裳階柱の間に桁行、梁行の 2 方向の繫梁（下段）を渡している。また、主屋柱から裳階柱の斗栱上部に桁行、梁行、隅行の 3 方向に繫梁 3 挺（上段）を架けているのが温泉寺大雄宝殿、観音寺羅漢殿、観音寺大雄宝殿の 3 棟であり、その内、温泉寺大雄宝殿と観音寺大雄宝殿では上段 3 挺の繫梁上に大瓶束 3 本を立て、裳階屋根の母屋桁と隅木を支えている(写真 5-21)。桁行、梁行の 2 方向に繫梁 2 挺（上段）を架けているのは報恩寺大雄宝殿のみである(写真 5-22)。温泉寺接引殿では、桁行、梁行、隅行 3 方の裳階柱斗栱上部尾垂木尻を内部に延し、主屋柱に架けている(写真 5-23)。また、裳階屋根が東に取り付く温泉寺大雄宝殿と観音寺大雄宝殿では東上に斗栱を載せ、東上段に桁行、梁行の 2 方向に繫梁 2 挺、斗栱上部に桁行、梁行、隅行の 3 方向に繫梁 3 挺を架けている(写真 5-24)。一方、平面の隅部分をみると、主屋柱 1 本と裳階柱 3 本をほぼ正方形の位置に立てており、これは対角線上に渡す裳階の隅木を真隅とするためとみられる。

#### 5-4. 斗栱の形態

斗栱は、屋根荷重を桁から受ける部材であり、中国の伝統的木造建築の重要な構成要素の一つとして、様々な形式がある。5 棟の建物は、抬梁式の伝統を基本とし、主屋・裳階では各々同様の斗栱を四周に配している。しかし、各建物の斗栱は、手先数、斜栱の有無等による違いを見せ、5 棟の斗栱は多様な形式を示している(表 5-2)。そこで、斗栱の手先数、配列位置、細部様式等について、1) 手先数、2) 構造様式、3) 斜栱、4) 尾垂木と尾垂木尻に分けて検討することとする。

##### 1) 手先数について

5 棟の組物を一覧すると、斗栱の手先数は四手・三手・二手と持送梁の 4 種に分類される。そこで、5 棟の建物と主屋・裳階の手先数を示すと、次のようになる。(1) 四手先(報恩寺大雄宝殿：四手・三手)、(2) 三手先(温泉寺接引殿と大雄宝殿：三手・三手)、(3) 二手先(観音寺大雄宝殿：二手・二手注)、(4) 持送梁(観音寺羅漢殿：二手・持出梁)である。また、観音寺羅漢殿と大雄宝殿の斗栱配置を見ると、羅漢殿では主屋部分の両側背面が二手先斗栱で、正面を三手先斗栱とし、大雄宝殿では主屋・裳階部分の両側背面が二手先斗栱で、正面また四隅柱上斗栱を三手先斗栱とし、柱高が同一であり、台輪から母屋桁の高さも同じである為、三手先斗栱の大きさを二手先斗栱より小さくし、同じ高さ位置に収まっている(写真 5-25, 写真 5-26)。このように、5 棟の斗栱の手先数は、三手先或いは二手先を用いるものが多く、主屋と裳階が同じ手先数の斗栱か、主屋は裳階より一手多い斗栱を用いる傾向が認められる。

##### 2) 構造様式について

斗栱は、外側では各手先肘木の先端に秤肘木を置いて上方の肘木を支え、一手・二手・三手先目にも同様の組物を重ねるのが本格的な形式であり、『营造法式』では「計心造」と呼ばれる。また、



写真 5-25 観音寺羅漢殿・主屋側面斗栱



写真 5-26 観音寺大雄宝殿・主屋背面斗栱

手先肘木端の秤肘木を用いず、手先肘木が直接上方の手先肘木を支えて縦一列に組むものがあり、これを「偷心造」と呼んでいる。5棟の中には、全計心造を採用するものは報恩寺大雄宝殿、観音寺羅漢殿の主屋、観音寺大雄宝殿の主屋と裳階正面及び四隅柱上である（写真5-27）。「計心造」のものは無いが、温泉寺接引殿と大雄宝殿の主屋・裳階斗栱では、一手目と二手目を計心造、三手目の秤肘木を省略し、計心造と偷心造を併用した複合式の斗栱の配置としている（写真5-28）。また、観音寺大雄宝殿の裳階両側背面の斗栱は、一手目を計心造、二手目を偷心造とする複合式の斗栱である（写真5-29）。

### 3) 斜栱について

従来の斗栱は、X・Y方向に手先肘木を出し、斗栱全体を構成するが、ここでは、45°の斜栱が用いられ、柱上斗栱の外側を装飾的に扱うものが現れている。柱上と中備斗栱は、報恩寺大雄宝殿・主屋では手先肘木の両脇に斜栱を2方向に出し、手先肘木の一手目、二手目、三手目、四手目に各1本と肘木を増やし、その先端を擬似尾垂木として放射状の四手先斗栱を用いている（写真5-30）。



写真5-27 報恩寺大雄宝殿・裳階正面斗栱



写真5-28 温泉寺大雄宝殿・裳階正面斗栱



写真5-29 観音寺大雄宝殿・裳階背面斗栱



写真5-30 報恩寺大雄宝殿・主屋正面斗栱

隅斗栱は、報恩寺大雄宝殿・主屋の隅斗栱のように、隅柱上から5方向の肘木を出し、X・Y・隅の3方向の間では互いに連結し、隅斜栱の2方向では手先毎肘木を出し、いずれも先端を擬似尾垂木としている（写真5-31）。また、観音寺大雄宝殿主屋・裳階の隅斗栱のように、隅柱上から5方向の肘木を出し、X・Y・隅の3方向の間では手先肘木を格子状に組むものがある（写真5-32）。

#### 4) 尾垂木と尾垂木尻について

尾垂木は軒先の荷重を支える挺子の役割を果たす部材であり、真昂尾垂木と擬似尾垂木に分かれ、真昂尾垂木では、尾垂木が一本の直材とされるが、擬似尾垂木では、尾垂木が直材でなく、折線の材を用いている。尾垂木尻については、従来は真昂尾垂木尻の後部を示すが、直線ではなく小型登梁のような湾曲材であり、斗栱と一体化し、構造的な強化を計り、さらに尾垂木尻の後端を支持する母屋桁との接合部の高さに対応させるために湾曲材としている。そのため、尾垂木尻は軒の桁を支える挺子の機能を残しつつ、高さの異なる部材を繋ぐ登梁の形状へと変化したものと考えられる。

5棟の斗栱の尾垂木についてみると、真昂尾垂木がなく、温泉寺接引殿（主屋・裳階）、同大雄宝殿（主屋・裳階）、報恩寺大雄宝殿（主屋・裳階）、観音寺大雄宝殿（裳階）の4棟が擬似尾垂木を設けて、形状は少し上に湾曲した形になっている（写真5-27～30）。尾垂木尻については、小型登梁のような形状のものは、温泉寺接引殿（裳階）、同大雄宝殿（主屋・裳階）、観音寺羅漢殿（主屋・裳階）、同大雄宝殿（主屋・裳階）の4棟があり、全て後方に一架分を延び、母屋桁に架けている。その形状には2種類がある。一つ目は直線形のものが温泉寺大雄宝殿（裳階・屋根）の1棟であり、材が比較的細く、構造上の役割が低く、装飾性が強く感じられ（写真5-33）、二つ目は少し曲線的なもの（仮称：小型登梁）が温泉寺接引殿（裳階）、観音寺羅漢殿（主屋）、同大雄宝殿（主屋・裳階）の3棟があり、太い材を設け、構造上の役割を大きく果している（写真5-34～36）。また、温泉寺接引殿（裳階）の側面と観音寺羅漢殿（主屋）側面の尾垂木尻では、内側の軸材の位置によ



写真5-31 報恩寺大雄宝殿・主屋隅斗栱



写真5-32 観音寺大雄宝殿・裳階隅斗栱



り、一直線に後方に延し、前者は東、後者は虹梁に渡しているものもある（写真 5-37, 写真 5-38）。  
 観音寺羅漢殿の裳階では、斗拱を入れず、持出梁を設け、その後部には小型登梁状の尾垂木尻のよ  
 うに、母屋桁に渡している（写真 5-39）。



(1) 裳階正面斗拱尾垂木尻

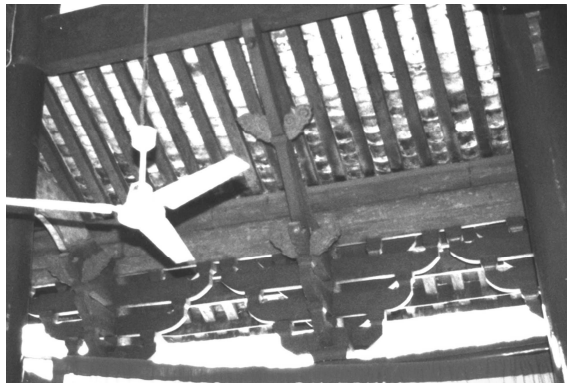


(2) 主屋背面斗拱尾垂木尻

写真 5-3 3 温泉寺大雄宝殿・尾垂木尻



(3) 裳階正面尾垂木尻



(4) 裳階背面尾垂木尻

写真 5-3 4 温泉寺接引殿・裳階尾垂木尻

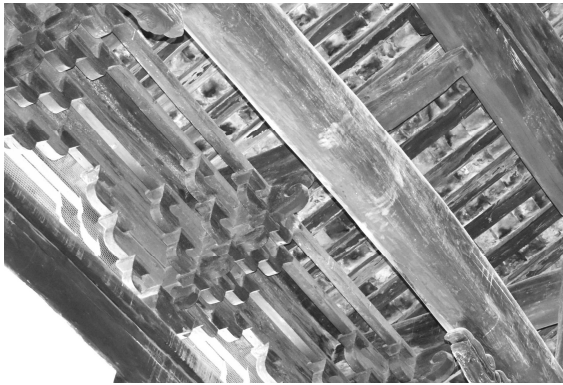


(1) 主屋正面尾垂木尻

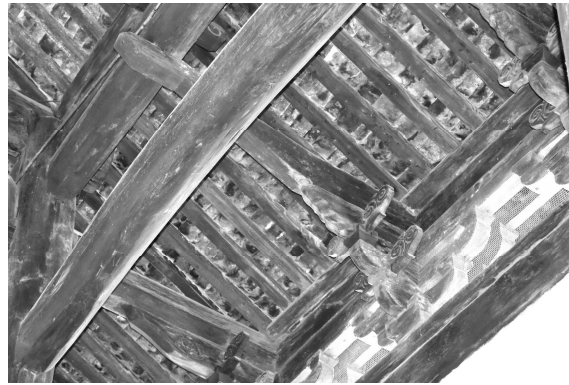


(2) 主屋背面尾垂木尻

写真 5-3 5 観音寺羅漢殿・主屋尾垂木尻



(1) 主屋正面斗拱尾垂木尻



(2) 主屋背面斗拱尾垂木尻



(3) 裳階正面斗拱尾垂木尻



(4) 裳階背面斗拱尾垂木尻

写真 5-3 6 観音寺大雄宝殿・尾垂木尻



写真 5-37 温泉寺接引殿・裳階側面尾垂木尻



写真 5-38 観音寺羅漢殿・主屋側面尾垂木尻



写真 5-39 観音寺羅漢殿・裳階持出梁後部

## 5-5. 結び

本章では、四川省の明代の三間裳階付仏殿5棟について、平面、構造、斗栱などの建築的な特質について検討した。その特徴は、次のように纏められる。

### 1) 外観・平面寸法と柱間配置

外観は、単層裳階付、入母屋造、本瓦葺とし、主屋・裳階の軒反りは緩やかである。平面は、桁行5間、梁行3間乃至4間とし、すべて横長の長方形である。柱間寸法は、裳階正面では中間を脇間の1.1倍、端間の1.4倍～3.0倍、脇間を端間の2.3倍～2.9倍、裳階側面では、中間を脇間の2.0倍～2.5倍程に広くとるものが一般的である。次に、斗栱についてみると、各建物の正面の端間：脇間：中間の中備斗栱の比率（詰組比）は0：1：2が2棟、この他は0：4：4のもの、1：1：2のもの、1：2：2のものが各1棟あり、中間に最も多くの詰組を配する傾向が認められる。柱間装置は、周囲を真壁式とするものが半数以上あり、正面の中間と脇間に3連の両開き扉を入れ、端間に窓を設けるものが一般的である。

### 2) 間架と架構システム

構造は、柱上に斗栱をおき、柱間に繫梁を用いて小屋を組む抬梁式を基本とする。内部空間は主屋部分と裳階部分に分かれ、間架は主屋部分では中央の棟木を中心とし、前後に2架乃至3架、裳階部分では1架乃至2架とするものが多い。架構は、主屋柱から裳階柱に桁行、梁行の2方向に繫梁（下段）を渡し、さらに桁行、梁行、隅行の3方向にも裳階柱斗栱上に繫梁（上段）を渡すものが一般的である。裳階屋根の取り付く方式については、二種類がある。一つ目は直接主屋柱に取り付ける『营造法式』に見られる形式のもの（3棟）、二つ目は裳階柱と主屋柱間に上段の繫梁を渡し、その繫梁上に太瓶束を立て、太瓶束に取り付ける形式のもの（2棟）である。

### 3) 斗栱の形態

斗栱は、四手先・三手先・二手先・持出梁の4種類が用いられている。主屋・裳階の斗栱を見ると、主屋と裳階が同じ手先数の斗栱とするものが一般的であるが、主屋を裳階より手先数を増すことで、建物の重厚感を表わすものがある（3棟）。また、斗栱には手先肘木先端に秤肘木を用いる計心造と用いない偷心造があるが、本格的な全計心造の斗栱が多くを占める。一方、45°の斜栱を用いるものが現われ、建物の外観を一層華やかに見せるものもある（3棟）。また、尾垂木は、従来の直材の真昂尾垂木は姿を消し、擬似尾垂木を用いるものが半数以上ある。湾曲型の尾垂木尻は、4棟の建物に現れ、すべて小型登梁のように後方に一架分延長し、母屋桁や虹梁に掛け渡している。

## 注釈

注 1) 参考文献V-1), pp. 22-30 を参照。

注 2) 参考文献V-1), pp. 77-79 を参照。

注 3) 報恩寺大雄宝殿の後方一間は、軸組構造上に影響がないため、桁行 5 間(24.41m)、梁行 4 間(16.26m)と考えた。



## 第六章

### 結 論





## 第六章 結論

### 6-1. 本論文の成果

本論文は、中国・四川省の元・明代の寺廟建築を対象とし、それらの建築的な特質を論じたものである。四川省について、地理的・歴史的な背景と宗教の伝播の過程を述べ、古代から近世までの仏教、道教の寺院と廟の建築を概観した上で、元・明代の寺廟建築の遺構の現地調査に基づき、その中から保存状態の良い遺構を取り上げ、3つの建築形態に分けて建築的な特徴を検討している。

その内容は、第2章「四川省の寺廟建築の歴史的背景」、第3章「四川省の元・明代の三間仏殿」、第4章「四川省の明代の一間裳階付仏殿」、第5章「四川省の明代の三間裳階付仏殿」で論じた。

そこで、四川省の元・明代の寺廟建築の特質を明らかにするため、ここでは第2章から第5章までの内容を1) 地勢と歴史的背景、2) 外観と平面、3) 間架と架構システム、4) 斗栱と中備、5) 登梁と湾曲尾垂木尻、6) 天井と内部空間、7) 元・明代の建築的な変容の7項目に分けて総括し、これをもって本論文の成果とする。

#### 1) 地勢と歴史的背景

四川省は、長江の上流域にあって多くの支流が流れ、周囲には3000m級の山々が聳えて四川盆地を形成しており、亜熱帯湿潤気候に属する肥沃な国土は「天府の国」と呼ばれた。また、古代より長江文明の発祥地として知られ、BC. 11世紀に「巴」、BC. 17世紀に「蜀」が成立したことで、成都ならびに重慶の周辺に古代文明の基礎が築かれた。3世紀には漢王朝の後継とされた蜀漢が建国され、魏・呉・蜀が争う三国時代を迎えることになる。この頃、華北地方より当地方に仏教が伝わり、隋・唐時代(581~907)に仏教は道教と共に広まり、多くの寺院が創立され、その後青城山が道教の聖地、峨眉山が仏教の四大聖地に数えられるようになった。しかし、宋・元・明代を通じて多くの寺廟建築が戦乱や災害等により姿を消した。一方、四川省には、BC. 3世紀の漢代の画像磚の画像や崖墓の明器が残され、ここには木造軸組式の建築が表現されており、寺廟建築においても同様の建築様式が採用されていたと考えられる。また、南宋代の雲岩寺輪蔵(江油市、淳熙8年・1181)は、四川省の現存最古の寺廟建築と考えられており、北宋代に国家により編纂された建築技術書『营造法式』小木作の建築様式に類似するものであり、当地の寺廟建築は華北地方の官式の建築様式を導入していたことが分かる。このように、四川省の寺廟建築は中国の伝統的な木造建築の技術を基本とし、この地方の建築文化を形成する歴史的な背景を備えていたことが分かる。

#### 2) 外観と平面

三間仏殿、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿の外観は、いずれも入母屋造、本瓦葺、低い基壇上

に建ち、軒反りは緩やかであり、寺廟建築として木造軸組式の安定感のある外観を呈している。軒回りは現状で見える限り、軒を二軒平行垂木とし、隅部を扇垂木とするものが一般的である。垂木の断面形状は、四川省北部には華北地方の正方形断面の垂木、古風な丸形断面の垂木が見られるが、省全体としては華南地方の板状の長方形断面の垂木が多く、先端に鼻隠板を打つものが一般的である。外壁は華北地方の大壁式が一部に用いられるが、華中・華南地方の真壁式が半数以上を占めている。柱間装置は、正面中央間に両開き扉、両脇に窓、背面中央に戸口を設けるものが一般的である。三間仏殿の中には、一列目の柱列を吹放し、二列目に柱間装置を設けるものがあり、これは元代の建物に限られる。このように、外壁、垂木、軒部等に周辺地域の建築様式が認められ、華北と華中・華南地方の影響を受けたことが分かる。

平面と柱間配置は、三間仏殿、一間裳階付仏殿では、一辺（総長）を11m～15mの正方形またはやや横長長方形とし、三間裳階付仏殿では、正面を16m～24m、側面を10m～16m程の横長長方形とするものが半数を占める。柱間配置は、三間仏殿、一間裳階付仏殿ではいずれも正面3間、側面3間或いは4間とし、三間仏殿では中間を脇間の2.0倍～3.0倍、一間裳階付仏殿では中間を脇間の1.5倍～2.0倍にとるものが一般的であり、このように正面中間の柱間寸法を広くとる点が四川省の大きな特徴である。三間裳階付仏殿では、正面5間の中間を脇間の1.1倍、端間の1.4倍～3.0倍、側面では3間乃至4間とし、中間を脇間の2.0倍～2.5倍にとるのが一般的である。このように、正面中間を広く取ったことで、正面中央に多くの中備斗栱（詰組）を配している。正面の脇間と中間の詰組比は、三間仏殿では1具：2具が5割、1具：(3～4)具が2.5割、一間裳階付仏殿の裳階では1具：2具が3割、1具：(3～4)具以上が5割、三間裳階付仏殿の裳階では中央3間に中備斗栱を集中させ、華やかで重厚な外観を生み出している。一方、建物内部では文化大革命によって仏像が破壊されたため、仏壇のみ残すものが多いが、現在なお三間仏殿、一間裳階付仏殿の中には中央柱間に3軀の仏像、三間裳階付仏殿では、中央柱間3間に1軀ずつ3軀の仏像を安置するものが残されている。これは、仏教では阿弥陀3尊、弥勒3尊、道教でも3軀の神像を祀る信仰形態があり、このような祭祀形式に対応するための内部空間が求められ、正面中間や脇間が柱間を拡大することに繋がったと考えられる。

### 3) 間架と架構システム

三間仏殿、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿の構造は、いずれも土間に礎石を据え、丸柱を立て、柱上に斗栱を置き、柱間に虹梁などの横架材を渡し、繫梁と束を重ねて小屋を組む「抬梁式」を基本とする。この構造の基本となるのが「間架」である。中国建築では、建物の梁行断面を決定することにより設計を始めるため、先ず母屋桁の間隔の基準寸法を定める必要がある。この母屋桁の1

間隔を「一架」と呼び、設計モジュールとされる。

三間仏殿、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿の間架は、庇では一架系、二架系、三架系の3種、主屋では二架系、三架系、四架系の3種が用いられる。三間仏殿について見ると、主屋部分では棟木の前後二架の都合四架、庇部分では前後二架の都合四架が大半であり、全体を八架とするのが一般的であり、これは『营造法式』大木作の側様図の「八架椽屋・四柱」にあたる。また、一架寸法は主屋部分では0.9m～1.8m、庇部分では1.4m～2.5mと一定せず、間架寸法は主屋では共通するが、主屋部分と庇部分、さらに庇部分内においても異なるものが多く、主屋と庇に統一的な間架寸法が用いられない点に大きな特徴がある。一間裳階付仏殿では、主屋が前後二架で都合四架とし、裳階では後述の架構システムで示すように主屋と裳階が重なり合うため、これを裳階に含めると裳階部分は前後二架の都合四架となる。三間裳階付仏殿では、主屋部分は前後二架、三架、四架とし、都合四架、六架、八架のものがあり、裳階部分は『营造法式』大木作のように裳階柱が主屋柱に直接取り付くため、前後一架の都合二架のものが多く、中には前後二架の都合四架のものもある。

次に、三間仏殿、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿の架構システムについて見ると、三間仏殿では中央に4本の主屋柱を立て、その周囲に側柱（庇柱）を立てており、主屋柱上では大虹梁（大梁）を1段～2段に互に繋いで四周を固め、主屋柱から側柱上と側柱斗拱上に2段（上・下段）の繫梁を渡し、隅柱にも2段の隅行の繫梁を渡し、3方向の軸組を構成させる。さらに、庇部分を二架とするものでは上段の繫梁に大瓶束を立て、上部の母屋桁を支える。また、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿では、中央に4本乃至8本～10本の主屋柱を立て、いずれも主屋柱から裳階柱に桁行、梁行の2方向に繫梁を渡し、さらに桁行、梁行、隅行の3方向にも裳階柱斗拱上に繫梁を渡し、中には火打梁を渡すものもあるが、3方向の上段の繫梁上に大瓶束を3本立てて上部荷重を支えるものが一般的である。なお、三間裳階付仏殿では、『营造法式』大木作のように主屋柱に裳階を直接取り付けるものが一般的である。

#### 4) 斗拱と中備

三間仏殿、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿の斗拱について見ると、三間仏殿では三手先・二手先・一手先・持出梁の4種が用いられている。斗拱配置には2方式があり、一つは正面に三手先・二手先、両側背面に三手先・二手先・一手先・持出梁等、正面と側背面に異なる斗拱を用いるもの、また一つは三手先或いは二手先等の同様の斗拱を4面に用いるものである。中でも、正面と側面で斗拱が異なる場合、側面では前から一本目と二本目の柱上斗拱の違いにより、斗拱の高さと手先の違いを補正する必要があり、柱高、肘木の長さを変えて対応している。そのため、建物側面では柱高が異なり、頭貫が階段状に競り上がるものがあり、これが大きな特徴となっている。一間裳階付

仏殿では、五手先・四手先・三手先・二手先・一手先・持出梁の6種類が用いられ、その内三手先と二手先を用いるものが多い。主屋と裳階の斗栱をみると、五手先と三手先、四手先と三手先、三手先と二手先のように、高い位置の主屋の手先数を増し、壮麗な斗栱を用いることで、建物の威厳と重厚感を表している。一方、斗栱には手先肘木先端に秤肘木を用いる「計心造」と、秤肘木を用いず手先肘木を縦一列に延ばす「偷心造」がある。四川省では、本格的な全計心造の斗栱は少なく、両者を併用した複合式の斗栱が大半を占める。また、柱上斗栱では、手先肘木と両脇の斜栱の3方向に肘木を出すもの、隅斗栱ではX・Y・隅方向の肘木に加え、隅行肘木に直交する斜栱を加えた5方向に肘木を出すものがあり、いずれも先端を擬似尾垂木とし、斗栱の外観を装飾的に扱うものが現れている。中でも、如意斗栱（鴛鴦交斗栱）を用いるものがあり、それらの手先肘木の先端では二葉栱、三葉栱を連続させ、斗栱を一体化させた鴛鴦交斗栱を生み出し、斗栱の装飾性を一層高めている。三間裳階付仏殿の斗栱は、四手先・三手先・二手先・持出梁の4種類があり、主屋と裳階の斗栱をみると、四手先と三手先、三手先と三手先、二手先と二手先、二手先と持出梁のように、主屋と裳階が同じ手先数の斗栱或いは裳階の手先を一手減じるものも多く、中には本格的な全計心造の斗栱を用いるものもあり、大型の単層裳階付仏殿として威厳のある外観を見せている。

#### 5) 登梁と湾曲尾垂木尻

三間仏殿、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿の内部の構造材について見ると、仏殿内部に登梁と湾曲材尾垂木尻を用いるものがある。前者は、主屋部分の屋根裏中央で前後に横断する合掌形の太い斜材（大型登梁）を組むもので、三間仏殿にのみ用いられており、主屋柱上の桁行の大虹梁中央から棟木にかけて高く渡され、主屋の母屋桁2架分あるいは3架分の荷重を支えている。これは、三間仏殿では中間が脇間の2.0倍～3.0倍と広いため、桁行の中央に直交する構造材が必要となり、母屋桁中央の撓みを避けるため、大型登梁の採用は必然的な対応であった。後者は、斗栱と母屋桁を繋ぐ長く湾曲した尾垂木尻（小型登梁）である。三間仏殿、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿では、いずれも主屋部分、庇部分或いは裳階部分の周囲側柱上に斗栱が置かれ、主屋柱と側柱（庇柱）、主屋柱と裳階柱では各柱筋に繫梁を渡し、柱上斗栱は尾垂木尻によって斗栱と母屋桁を繋いでいた。しかし、元・明代に入ると尾垂木が疑似尾垂木となり、真昂尾垂木が姿を消したため、柱間が拡大された部分では、構造的に中備斗栱に尾垂木尻を復活させることが必要となり、湾曲尾垂木尻が考案されたと考えられる。また、この大型登梁ならびに湾曲尾垂木尻は構造的な役割のみならず、内部空間に高く上昇感のある内部空間を生み出すのにも効果的であった。

#### 6) 天井と内部空間

三間仏殿、一間裳階付仏殿、三間裳階付仏殿の天井は、次の3つの形式に分かれる。一つ目は、

主屋部分と庇あるいは裳階部分のすべてを化粧屋根裏とするもの、二つ目は、主屋部分に格天井を張り、庇あるいは裳階部分を化粧屋根裏とするもの、三つ目は、主屋部分に「藻井天井」を張り、裳階部分を化粧屋根裏とするものである。これらは、中国の寺廟建築の中小規模の建物に見られる一般的な内部空間であるが、中でも一間裳階付仏殿に用いられた藻井天井は、主屋部分の大虹梁上に斗栱を置き、八角形の梁を組み、梁組を狭めて積み上げ、内部空間に一層の上昇感を生み出しており、これは、宋代の『营造法式』小木作に見られる伝統的な天井であり、建物の格式と威厳を示している。

### 7) 元・明代の建築的な変容

元・明代の建築的な変容は、三間仏殿の中に元代の遺構 5 棟、明代の遺構 15 棟が残されているため、ここに両時代の違いを読み解くことが出来る。元代の仏殿と明代の仏殿との変化を眺めると、平面形態は、元代には正面柱列を吹き放しとするものがある点に特徴があり、明代には一例も見られない。軸組は、元代には柱・梁などが比較的に木太く、明代には次第に木細くなる傾向が認められる。架構は、元代には正面中間を広くしたことで、小屋組中央に梁行の大型登梁を用いる点に大きな特徴があり、明代には同様の登梁が一例も見られない。斗栱は、元代から明代前半まで伝統的な真昂尾垂木を用いるものがあるが、明代後半には真昂尾垂木が消え、擬似尾垂木、仮昂尾垂木を用いるものが一般的になる。垂木の断面形状も元代には正方形のものが多く、明代には厚板型のもので一般的となる。このように、元・明代の三間仏殿には両時代による変容が認められ、宋代の『营造法式』に見られた古式な伝統が元代を境に姿を消す傾向にあり、明代に入ると四川省の寺廟建築に独自の様式が形成されたと考えられる。

以上のように、四川省の元・明代の寺廟建築は、古代・中世より四川盆地において長江文明以来の歴史と伝統を保ち、華北・華中・華南地方の影響を受けつつも固有の建築文化を築いていた。宋代の国家の建築技術書『营造法式』に従った本格的な木造技術に加え、華北地方の大壁式の重厚な構造、華中地方の抬梁式の穏やかな架構、華南地方の垂木、斗栱の瀟洒な意匠を摂取しつつ、内部では大型登梁・湾曲尾垂木尻を考案し、独自の架構システムを成立させる等、四川省の独自の建築様式を生み出したことが明らかになった。

## 6-2. 本論文の意義

中国建築史学の研究は、1930年の中国营造学社の設立に始まり、その後の大戦による中断を挟んで、1980年代以降に中国人研究者による本格的な研究が行われ、1990年代に日中の学術交流が始まると、日中の共同研究が行われるようになり、その研究成果は両国で共有されるようになった。しかし、2000年以降中国の急速な経済発展に伴い、各地の歴史的建造物への保存政策が遅れたことにより、古建築の破壊が続いたが、2010年代には政府による文物保護の対策が行われるようになった。近年は、日本側において、この分野の研究者が減少しており、日本側からの中国建築史学の研究成果は限られている。そうした中で、本論文は新たな研究成果を同史学に提供できたことが第一義的な意義である。

次に、本論文は四川省の元・明代の三間仏殿、明代の一間と三間裳階付仏殿の遺構を対象とし、平面、構造、意匠について分析・検討し、その特質を明らかにしており、中でも、次の三点について学術的な成果を挙げたと考えている。

一点目は、四川省の寺廟建築の元・明代三間仏殿、明代一間裳階付仏殿、明代三間裳階付仏殿について、現地調査に基づく資料により平面規模、構造形式、意匠等の特質を実証的に解明出来たことである。

二点目は、四川省の寺廟建築について、中国宋代の建築技術書である『营造法式』と対比させ、中国の官式の木造建築の規範が踏襲されているかを検証し、また、本格的な木造伝統技術をどのような点で翻案しているかを述べ、最後に「外観と平面」、「間架と架構システム」、「斗栱と中備」、「登梁と湾曲尾垂木尻」、「天井と内部空間」、さらに「元・明代の建築的な変容」の5項目について論じており、四川省の固有の特質がどのような内容であったかを指摘したことである。

三点目は、中国建築史学の元・明時代の寺廟建築について、西南地方の木造建築が、華北・華中・華南地方とは異なり、それら周辺地域の影響を受けながら、四川省独自の建築様式を確立していたことを示した。そして、中国における元・明代の寺廟建築においては、地域性の解明が重要な課題であることを指摘できたことである。

最後に、日中両国の中国建築史学において、「中国・四川省の元・明代の寺廟建築に関する研究」が学術発展の一助となることを期待している。

## 参考文献目錄

### [ I ] 第一章

- 1) 竹島卓一: 中国の建築, pp. 17-43, 中央公論美術出版社, 1970. 4
- 2) 田中淡: 中国の伝統的木造建築, 建築雑誌, Vol. 98, No. 1214, pp. 32-35, 日本建築学会, 1983. 11

### [ II ] 第二章

- 1) 彭遵泗, 王秀楚, 朱子素, 松枝茂夫(訳): 蜀碧・嘉定屠城紀略・揚州十日記, 平凡社, 1965. 2
- 2) 孫曉芬: 明清的江西湖廣人與四川, 四川大学出版社, 2005. 10
- 3) 黃雲生(編): 民國華陽縣志, 四川府縣志輯③, 中国地方志集成, 巴蜀書社, 1992. 8
- 4) (清)常明, (清)楊芳灿, 他(纂修): 四川通志, 全四冊, 巴蜀書社, 1984. 12
- 5) 楊耀坤: 魏晉南北朝時期的巴蜀仏教, 魏晉南北朝史論稿, pp. 342-346, 成都出版社, 1993. 7
- 6) (梁)釋慧皎(撰), 湯用彤(校注), 湯一玄(整理): 高僧伝, pp. 189, pp. 229-232, 中華書局, 1992. 10
- 7) (唐)玄奘, 水谷真成(訳注), 中野美代子(解説): 大唐西域記, 全三冊, 平凡社, 1999. 6-8
- 8) 陳穎, 田凱, 張先進, 他(編): 四川古建築, 中国古建築從書, 中国建築工業出版社, 2015. 12

### [ III ] 第三章

- 1) 国家文物局編: 中国文物地図集(四川分冊), 文物出版社, 2009. 9
- 2) 四川省建設委員会, 四川省勘察設計協會, 四川省土木建築学会編: 四川古建築, 四川科学技術出版社, 1992. 6
- 3) 青鋒, 他(編): 四川重慶古建築地図, 清華大学出版社, 2016. 12
- 4) 四川省文物考古研究院編: 四川古建築測繪図集(1~3), 科学出版社, 2010. 12, 2012. 3, 2013. 11
- 5) 陳穎, 田凱, 張先進, 他(編): 四川古建築, 中国古建築叢書, 中国建築工業出版社, 2015. 12
- 6) 国家文物局主編: 中国文物地図集(四川分冊・中), pp. 357, 文物出版社, 2009. 9
- 7) 蔡宇琨, 趙元祥, 張宇: 四川塩亭新發現的元代建築花林寺大殿, 文物, pp. 75-91, 文物出版社, 2017. 11
- 8) 四川省文物考古研究院: 四川古建築測繪図集(第3輯), pp. 11, 科学出版社, 2013. 11
- 9) 閻金強, 張宇: 四川蘆山青龍寺大殿調查記, 田野新考察報告, 建築創作, pp. 242-244, 天津大学出版社, 2011, 11
- 10) 朱小南: 閬中永安寺大殿建築時代及構造特征淺析, 四川文物, 1991年, 第1期, pp. 67-69, 四川文

物編輯部, 1991. 2

- 11) 青鋒, 他(編): 四川重慶古建築地図, pp. 308, 清華大学出版社, 2016. 12
- 12) 景竹友: 三台尊勝寺, 四川文物, 1991年, 第6期, pp. 67-68, 四川文物編輯部, 1991. 11
- 13) (宋)李誠: 营造法式(下・上), 浙江人民美術出版社, 2013. 10
- 14) 中国科学院自然科学史研究所主編: 中国古代建築技術史, pp. 109-115, 科学出版社, 1985. 10

#### [IV] 第四章

- 1) 陳蔚, 胡斌, 他(編): 重慶古建築, 中国古建築叢書, pp. 152-154, 中国建築工業出版社, 2015. 12
- 2) 国家文物局主編: 中国文物地図集(四川分冊・下), pp. 794, 文物出版社, 2009. 9
- 3) 丁天錫: 屏山縣万寿寺与万寿觀, 四川文物, 1986年, 第3期, pp. 24-25, 四川文物編輯部, 1986. 6
- 4) 四川省地方志編纂委员会編: 四川省志・文物志(下), pp. 348-349, 四川人民出版社, 1999. 2
- 5) 陳穎, 田凱, 張先進, 他(編): 四川古建築, 中国古建築叢書, pp. 100-103, 中国建築工業出版社, 2015. 12
- 6) 成都文物考古研究院: 四川雅安市雨城区觀音閣調查簡報, 四川文物, 2019年, 第2期, pp. 83-94, 四川文物編輯部, 2019. 4
- 7) 庄文彬: 遂寧灵泉寺, 四川文物, 1992年, 第3期, pp. 73, 四川文物編輯部, 1992. 6
- 8) 青鋒, 他(編): 四川重慶古建築地図, pp. 238, 清華大学出版社, 2016. 12
- 9) 陳穎, 田凱, 張先進, 他(編): 四川古建築, 中国古建築叢書, pp. 124-125, 中国建築工業出版社, 2015. 12
- 10) (宋)李誠: 营造法式(下・上), 浙江人民美術出版社, 2013. 10

#### [V] 第五章

- 1) 四川省建設委员会, 四川省勘察設計協會, 四川省土木建築学会編: 四川古建築, pp. 74, 四川科学技术出版社, 1992. 6
- 2) 陳蔚, 胡斌, 他(編): 重慶古建築, 中国古建築叢書, pp. 144-146, 中国建築工業出版社, 2015. 12
- 3) 杉野丞, 沢田多喜二: 四川省の明代の裳階仏堂について-甘露寺正殿・温泉寺大仏殿・同接引殿-中国西南地方の寺廟建築の研究(2), 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築歴史・意匠, pp. 329-330, 2000. 9
- 4) 陳穎, 田凱, 張先進, 他(編): 四川古建築, 中国古建築叢書, pp. 100-103, 中国建築工業出版社, 2015. 12



- 5) 国家文物局主編:中国文物地図集(四川分冊・中), pp. 651, 文物出版社, 2009. 9
- 6) 曹毅, 杉野丞, 沢田多喜二:四川省閬中市の観音寺の建築について-中国西南地方の寺廟建築の研究(11), 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築歴史・意匠, pp. 337-338, 2020. 9

## 本論文に関係する著者の発表論文

本論文は、筆者が平成22年から令和3年にかけて「日本建築学会計画系論文集」、「同学会東海支部研究報告書」、「同学会学術講演梗概集」に発表した中国西南地方の寺廟建築に関する研究論文ならびに修士論文「中国四川省の寺廟建築の特質に関する研究」を再構成したものである。そこで、これまでに発表してきた関係論文を取り上げることとする。なお、本論文を纏めるにあたり、原文をできるだけ忠実に編集したが、内容の一部と図版については、本文が理解しやすいよう修正、補足した。

### [I]主要論文

日本建築学会計画系論文集:

- 1) 「中国・四川省の元・明代の三間堂に関する研究」

A STUDY ON THE BUDDHIST BUILDINGS OF THREE BAY TYPE IN SICHUAN PROVINCE, CHINA IN  
YUAN AND MING DYNASTY

日本建築学会計画系論文集, Vol. 85, No. 774, pp. 1789-1799, 2020. 8

曹毅, 杉野 丞, 沢田 多喜二, 李 灃璋, 張 葉茜

- 2) 「中国・四川省の明代の一間裳階付仏殿に関する研究」

A STUDY ON THE BUDDHIST BUILDINGS OF THREE BAY TYPE WITH ONE COSYME FLOOR IN  
SICHUAN PROVINCE, CHINA IN MING DYNASTY

日本建築学会計画系論文集, Vol. 87, No. 794, pp. 781-792, 2022. 4

曹毅, 杉野 丞, 沢田 多喜二, 李 灃璋, 張 葉茜

### [II]関係論文

日本建築学会東海支部研究報告集:

- 1) 「四川省遂寧市の明代の三間仏堂について—中国西南地方の寺廟建築の研究(8)—」

日本建築学会東海支部研究報告集, Vol. 57, pp. 589-592, 2019. 2

曹毅, 杉野 丞, 沢田 多喜二

日本建築学会大会学術講演梗概集(建築歴史・意匠):

- 1) 「四川省の元代の永安寺大殿の建築について—中国西南地方の寺廟建築の研究(4)—」

- 日本建築学会大会学術講演梗概集 2010(建築歴史・意匠), pp. 633-634, 2010. 9  
曹毅, 杉野 丞, 沢田 多喜二
- 2) 「四川省元・明代の吹放付三間堂について—中国西南地方の寺廟建築の研究(9)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2019(建築歴史・意匠), pp. 419-420, 2019. 9  
曹毅, 杉野 丞, 沢田 多喜二
- 3) 「四川省閬中市の観音寺の建築について—中国西南地方の寺廟建築の研究(11)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2020(建築歴史・意匠), pp. 337-338, 2020. 9  
曹毅, 杉野 丞, 沢田 多喜二
- 4) 「四川省雅安市観音閣正殿について—中国西南地方の寺廟建築の研究(13)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2021(建築歴史・意匠), pp. 165-166, 2021. 9  
曹毅, 杉野 丞, 沢田 多喜二
- 5) 「四川省の元代の五龍廟文昌閣の建築について—中国西南地方の寺廟建築の研究(5)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2010(建築歴史・意匠), pp. 635-636, 2010. 9  
沢田 多喜二, 曹毅, 杉野 丞
- 6) 「四川省宜賓市の明代の一間裳階付仏殿について—中国西南地方の寺廟建築の研究(6)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2011(建築歴史・意匠), pp. 441-442, 2011. 8  
杉野 丞, 曹毅, 張 葉茜, 沢田 多喜二
- 7) 「四川省の真武山廟群の建築について—中国西南地方の寺廟建築の研究(7)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2011(建築歴史・意匠), pp. 443-444, 2011. 8  
沢田 多喜二, 曹毅, 張 葉茜, 杉野 丞
- 8) 「四川省南部の元代の三間堂—中国西南地方の寺廟建築の研究(10)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2019(建築歴史・意匠), pp. 421-422, 2019. 9  
沢田 多喜二, 曹毅, 張 葉茜, 杉野 丞
- 9) 「重慶市の明代の一間裳階付仏殿について—中国西南地方の寺廟建築の研究(12)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2020(建築歴史・意匠), pp. 339-340, 2020. 9  
沢田 多喜二, 曹毅, 杉野 丞
- 10) 「四川省南部の明代の三間堂—中国西南地方の寺廟建築の研究(14)—」  
日本建築学会大会学術講演梗概集 2021(建築歴史・意匠), pp. 167-168, 2021. 9  
沢田 多喜二, 杉野 丞, 曹毅

## 後書

本論文は、筆者が平成 22 年から令和 3 年にかけて、日本建築学会に発表した中国西南地方の寺廟建築に関する研究ならびに修士論文「中国四川省の寺廟建築の特質に関する研究」を基にしており、その起点は、愛知工業大学建築学科歴史意匠研究室において、1990 年代から行われてきた「中国四川省の寺廟建築の研究」に基づいており、この研究活動に参加できたことによるものである。

私は、平成 14 年に日本の大学に留学するために来日し、一年半の日本語学校の語学勉強を終え、大学受験に合格し、平成 16 年に愛知工業大学工学部都市環境学科建築専攻に入学した。建築史に興味を持ち、大学四年の時に建築歴史意匠研究室に入った。平成 20 年 3 月に学部を卒業した後、同年 4 月に同大学大学院前期課程（修士課程）に入学し、中国建築史学を専攻し、「中国四川省の寺廟建築の特質に関する研究」と題とする修士論文を提出した。平成 22 年 3 月に修士課程を修了し、中国に帰国して設計事務所に勤務し、中日両国の設計プロジェクトの実務を経験した。しかし、建築史の研究に対する興味が消えず、平成 26 年に同大学院後期課程（博士課程）に進学し、修士論文で研究した内容を一層深く、広範囲に研究を行うため、歴史意匠研究室の教授の指導を受け、これまでに研究室において行われた現地調査の資料を整理し、さらに、資料補足のため、これまでの調査に加え、平成 30 年、令和元年に同大学歴史意匠研究室の協力と指導を得て、四川省の現地調査を行うことになった。さらに、文献研究、実測調査、図面作成、写真撮影等の資料に基づいて、これまでの研究室の研究成果を参照し、指導教授の助言と校閲を受け、2019 年 11 月に日本建築学会計画系論文集に第 1 編目を投稿し、続いて 2021 年 7 月に同論文集に 2 編目を投稿し、博士論文の骨格が整った。そして、令和 3 年 12 月学位論文「中国・四川省の元・明代の寺廟建築に関する研究—三間仏殿と単層裳階付仏殿を中心として—」の執筆を終え、四川省の元・明代寺廟建築の特質の解明に一応区切りを付けることが出来、本論文を完結させることが出来た。

これから、本論文作成に当たってお世話になった方々に謝辞を述べなくてはならない。

研究者として育てて下さった先生、先輩、友人などに感謝の気持ちを伝えたい。愛知工業大学大学院工学研究科の杉野丞教授には指導教授として、表現できない程に多くのことを教えて頂いた。論文作成に際し、主題の設定から内容の把握、文法用語、語彙の訂正に至るまで御指導を頂き、何も分からない私のような学生を相手に杉野教授は始終誠実かつ親切で、提出した論文の下書きを朱で染めて下さった。学部から博士まで、学問だけのみならず、生活の面にも終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻を頂き、心より感謝申し上げます。また、現地調査、資料収集などにおいて常に御指導と御支援を頂いた同大学の沢田多喜二先生、そして、研究の過程で、貴重な助言をして下さった

同大学の飯田喜四郎客員教授、四川大学建築與環境学院の李沅璋教授、研究室の後輩である張葉茜氏に感謝の意を表します。さらに、学位申請論文を審査頂いた諸先生方には、本拙論をご精査頂き、改めて感謝申し上げます。また、研究室における様々な御教示と御協力を直接また間接的に頂いた先輩、同輩、後輩にも感謝したい。

また、研究を進めるにあたり、ご支援、ご協力を頂きながら、ここにお名前を記すことが出来なかった多くの方々に心より感謝申し上げます。この他、研究を続けていく間に、愛知工業大学教職員の方々、また、中国の現地調査において文化財保護に携わっておられた方々、調査協力をして頂いた多くの方々の教えを受け、親切にして頂いた。その内容をすべて書くことになれば、それだけで一冊の博士論文になることは確実である。そして、今まで筆者が収集した四川省の寺廟建築の文献史料及び遺構資料についての研究は、時間と紙幅の関係から本論文には含まれていない。それらについては、今後の研究課題として発表することを予定している。

最後になりますが、二十歳から日本留学の二十年間に経済的に、精神的にも支えて下さった両親に心から感謝します。そして、三十路を過ぎてからの大学院博士課程入学を快く承諾し、どのような状況においても応援してくれた素晴らしい妻に心から感謝します。

令和3年12月吉日

愛知工業大学大学院工学研究科 歴史意匠研究室 曹 毅